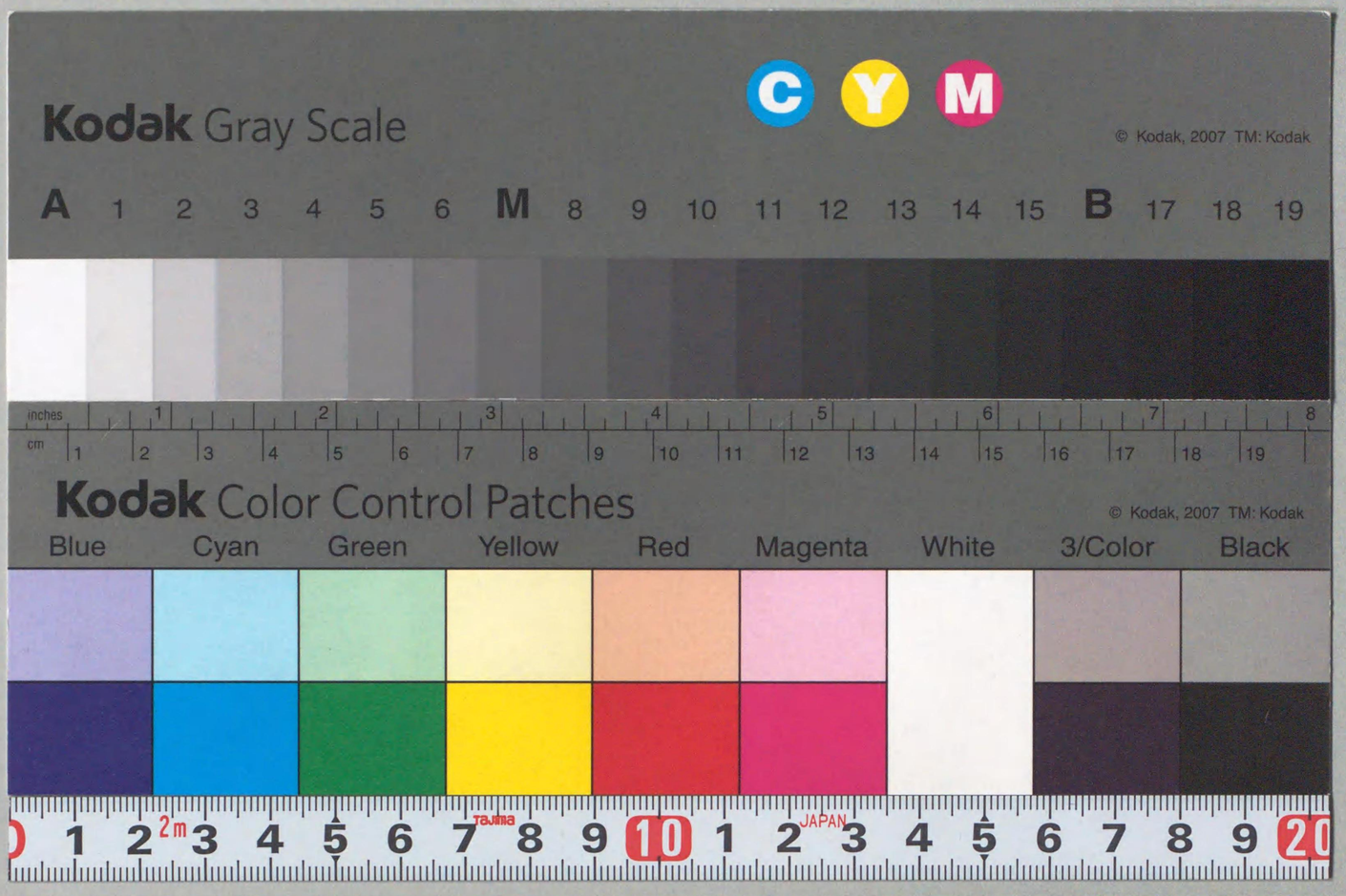


795.
H 633 b2
(2W)

名人本因坊秀哉謹評

雀幕府御秘藏碁戰

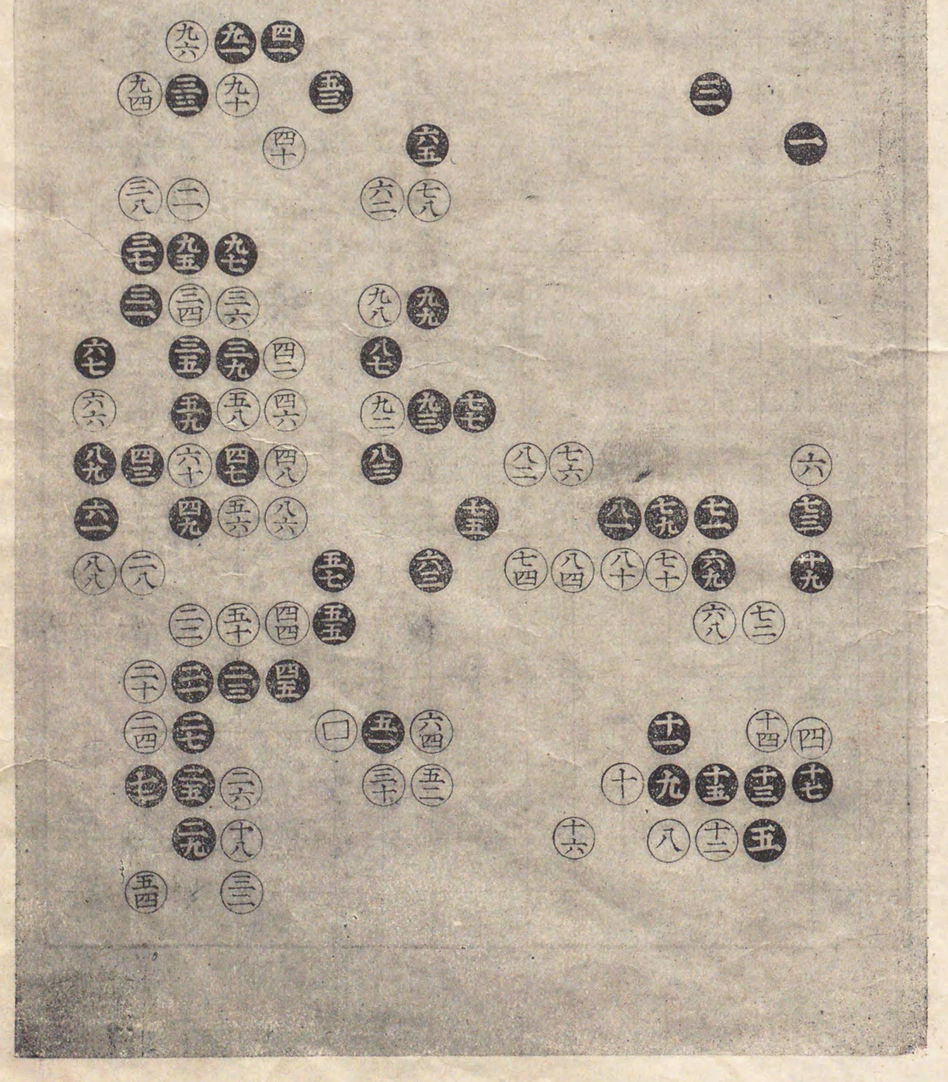
東京 大阪屋號 斯文館發行

舊幕府御秘藏碁戰　縮寫

天保十四年癸卯
閏九月二十七日
七日勝　秀策
先番　左一郎

八五　劫提

第二號



國立國會
38.8.14
圖書館藏書

贈寄
瀬越憲作
殿

617855

名人 本因坊秀哉

はしがき

本書は敢て古人打碁の是非得失を批評するを以て目的としたるに非ずして、專ら布陣及戰略の變遷進化の迹を尋ぬるを以て主眼とせるものなり。其收輯せる所のものは夫の有名なる本因坊丈和對服部因徹の名人爭碁を始めとして、某貴顯の秘藏に係る碁聖秀策（始め桑原と稱し後安田の本姓に復す）約百七十局の打碁中、其の幾十局に過ぎずと雖も、名人本因坊秀哉先生が該博富贍の識見と眼光、帷幄に徹する靈力とを以て、一手苟くもせず、最も謹嚴に最も緻密に多年研究の結果を公にせるものにして、一部の圍碁進化史とも謂ふべく、閑餘之を盤上に展開して、徐に翫味したらむには、啻に舊幕府時代御城碁の、如何に各名手が苦心慘憺、機略縱橫、畢世の全力を傾注せるかを知ると同時に如何に其の布陣及戰略の變遷

進化せるかを知り得べきなり。是れ名人に非ずんば決して爲す得べき業に非ず。以て本書の價値を知るべきなり。聊か由來を記して序に代ふと云爾。

大正六年三月

編者識

舊幕府 御秘藏碁戰 目次

(文化十一戌年七月廿一日) 二目勝 先番 本因坊丈和 井上立徹……一 二
(天保六年七月十九日) 中押勝 先番 名人 本因坊丈和 赤星因徹……三 五
(延寶八庚申五月五日) 互先 三代目 本因坊道悅 山崎道策……六 七
(建長五年癸丑正月) 先番 名人 本因坊道悅 日蓮上人三十二才 吉祥丸十一才……八 九
(寛文十年七月) 勝 名人 名人格 武田信玄……一二 高阪彈正……一三 安井算知 本因坊道悅……一〇 一一
(永祿九年丙子春) 先 先 阪口仙得 碁聖秀策……一四 一五
(萬延元年申十二月八日) 中押勝 先番 碁聖道策……一六 安井知哲……一七
(元祿六年) 中押勝 先 本因坊秀和 阪口仙得 本因坊秀策……三九 四一
(寛永年中) 名人 井上家一世 中村道碩……二五 二六
(寛永) 一目勝 先番 二世 井上因碩……二六
(寛永六年) 二目勝 先番 名人 四世 本因坊道智 井上因碩……二七 二八
(享保十二年十一月十七日) 六目勝 先番 名人 本因坊道智 井上因碩……二八 三〇
(寶曆元未年十一月十七日) 市 準名人 六段 五世 六世 安井仙角 本因坊知伯……三一 三二
(明和三戌年十一月十七日) 準名人 六段 六世 八世 井上因碩 本因坊伯元……三三 三四
(寛政十一未年五月廿五日) 三目勝 先番 八段 六世 九世 本因坊察元 井上因碩……三五 三六
(嘉永五壬子年二月十五日) 市 七段 九目勝 先番 十世 六段 本因坊烈元 安井知得……三七 三八
(文化三寅年十一月十七日) 先番 二目勝 三目込出し 盤面五目勝 嘉永名手四十三段の連碁
(弘化三年十一月十七日) 市 十一目勝 先番 十一世 二世 本因坊元丈 中野知得……四二 四三
(喜永三年辛庚戌年) 三目勝 先番 碁聖秀策 伊藤松和……二〇 二二
(正保三年丙戌十一月二日) 七段 十三世 本因坊丈策 中押勝 先番 七段 阪口仙得……四四 四五

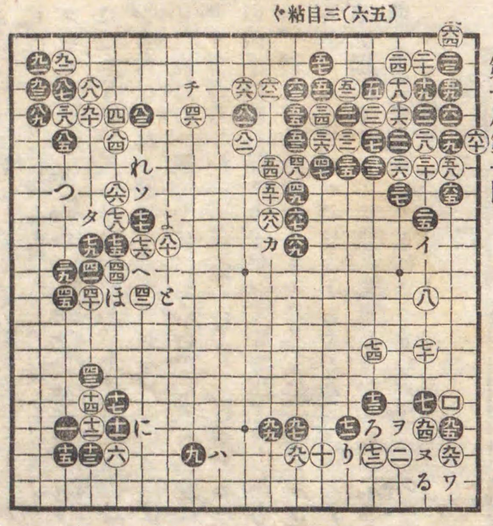
準名人	十四世	本因坊秀和	四六
上手		安田秀策	四七
中押勝	五段	中川順節	四八
五段		河喜田耕之助	四九
七目勝	四段	安田秀策	五〇
先番	五先	岸本左一郎	五一
中押勝	五先	安田秀策	五二
四段	四段	岸本左一郎	五三
六目勝	四段	安田秀策	五四
五先	先番	鶴岡三郎助	五四
五先	四段	安田秀策	五五
中押勝	四段	眞井德次郎	五六
二目勝	四段	葛野忠左衛門	五七
五先	先番	安田秀策	五八
忠左衛門改	六段	水谷順策	五九
十五目勝	先番	安田秀策	六〇
七段		太田雄藏	六一
三目勝	先	安田秀策	六二
七段		大田雄藏	六三
先	五段	安田秀策	六四
七段		安井算知	六五
中押勝	先	安田秀策	六六
中押勝	先	安田秀策	六七
七段		服部正徹	六八

弘化元年		本因坊秀和	六九
二月十九日	先	安田秀策	七〇
弘化三年	八段	本因坊秀和	七一
十月廿一日	中押勝 先	安田秀策	七二
弘化三年	八段	本因坊秀和	七三
十月廿三日	六目勝 先	安田秀策	七四
嘉永四年	八段	本因坊秀和	七五
十月廿二日	四目勝 先	碁聖秀策	七五
嘉永四年	八段	本因坊秀和	七六
十月廿八日	三目勝 先	碁聖秀策	七七
弘化三年	六段	井上秀徹	七八
十月十七日	先々先	碁聖秀策	七九
弘化三年	六段	井上秀徹	八〇
十月廿九日	先	碁聖秀策	八一
弘化三年	六段	井上秀徹	八二
十二月晦日	十目勝 先番	碁聖秀策	八三

舊幕府 御秘藏碁戰

名人 本因坊丈和
二目勝 本因坊秀哉謹評
先番 井上立徹

（文化十一戌年七月二十一日對局）



第一局第一圖

▲第一圖黑(九)の變化　黑(九)と二間に挾んだからとて敢て惡いといふ譯ではないが、此場合黑(イ)に詰め、白(ろ)にこすみたるとき黑(ハ)に挾むも亦一策である▲白(二三)の趣向　白(二三)は「してう」が利かぬのだから普通(二三)へのびるか、(に)へはねるのが、當り前であるが、譜の如く(二三)へはね込んだのは所謂白の趣向で斯く打つたのである▲黑(一七)の變化　黑(一七)は先づ一本(二三)におし、白が(二七)にはねた時黑(一七)におし、白が(一八)へ下つて斷ち切つたらば黑も亦(二三)の處を切ツて戰ふ手段もあるが譜の如く黑(三)と(五)の緣を絶たれたのは隨分嚴しい▲白(二六)は捨石、振變る手段　白(二六)とつけたのは即ち捨石で譜の如く(二六)(二八)(三〇)の三子を犧牲に供して自分の方を厚くしたのは洵に巧妙な手段で頗る面白い

▲黑(四三)と(四五)　扨て黑(四三)へはね、而して白が(四四)へふくれたとき黑が(四五)へ曲つたのはドウ云ふものであらうか、大分白に働かれた姿ではあるまいか。黑(四三)へはねる手で普通の如く(四四)へのびて居ると自ら白の大模樣が消える譯で、其時白若し(ほ)につげば黑尙ほ(へ)におし、白(と)にのびたとき黑(チ)に打込む趣向もある。然るに譜の如く白に(四四)へ孕れられ次いで(四六)に圍はるゝに至つては白の形勢は頗る雄大なるもので、此上(四七)の處を約へらるゝやうにツては白の模樣は愈〻厚壯になる譯であるからドウしても此處は最早や捨置くことは出來ない。ソコで黑が(四七)とおしたのは是れは勢ひ止むことを得ぬのである▲白(五〇)の二段ばねも亦面白い。苦し白が(五〇)へ二段ばねせずして普通の如く(五四)へのびると黑より(五〇)におされるからモウ一本のびねばならぬ。ソコで黑に先手で(八)の一子を攻められるゝ結果を豫想して斯くの如く(五〇)へ二段ばねの手段に出たのであらう。斯くて黑白相交換して白が遂に先手を取つて(七〇)に先鞭を着けたのは如何にも巧妙なる打方である。扨て白(五〇)から黑(六九)までの白兵戰中黑(五一)のはねは蓋し見損じではあるまいか。譜の如く白に(六六)へ竝ばれては結局兩劫になツて圍中の黑は擒にされて了ふ。黑(五一)の手で單に(六七)へのび、白尙ほ(六八)へ押した時黑は(六九)にのびて敵の動靜を窺ふ方が宜くはあるまいか。

△八一の處粘ぐ

第二圖

▲白(七三)亦面白し　白が若し譜の如く(七三)に竝ばずして常套に泥みて(り)に亘ると黒(ヌ)、白(る)、黒(ヲ)、白(七二)となッたとき黒は(ワ)へはねて劫に打つ手段がある。劫にされては堪らない。黒は劫自慢の碁で上隅邊に澤山劫を持つて居るから白はそれを避けて(七二)へ並んだものと思はれる▲黒(七七)の二段ばね　黒(七五)にはね次いで(七七)へ二段ばねした趣向はドウであらうか黒(七五)の手で單に(カ)に曲て居れば(四八)以下(六八)の四子が駄目詰まりとなッて味が出て來るから白も氣味が悪い。若し其儘捨置かうものなら(五一)一隊の黒は其駄目詰まりを利用して(八一)へつける手もあるし其他いろ〳〵趣向をして手を延ばすことの出來る姿であるから黒は(七五)の手で(カ)へ曲ッて居ても惡いことはあるまい▲黒(八三)の手段、黒(八三)の手にて若し(八六)へ(七八)の一子を擒にすると白は無論(よ)におすだらう。其時黒(タ)に取れば白は(れ)に打つし、又黒(タ)に取らずして(ソ)につげば白から(つ)に利かせらるゝ筋がある。ソコで黒は已むを得ず(八三)へつけて種々趣向したのであらうが其深意の那邊に在るやは當局者でなければ解らない。

▲第二圖黒(一)　は此場合非常に大きい手であるが、或は此手にて第一圖に於ける(九二)の一子を黒(一)に切取れば結局黒△印につけ、白×印に下るとすれば黒は既に捕虜となッて居る第一圖(五一)の一隊を利用して、稍〻危險ではあるが、又印へ劫に打つ手段がないでもない。併し劫となッた所で、白から(一)におされ次いで※印へはねられる事となるのも隨分嚴しい手で、さうなると碁はドうなるか分らないから黒は(一)に曲つて居たのだらう▲白(一二)の變化　白(一二)は(一九)について打つ手がないでもないが蓋し白は碁が宜いと見たから大事を取つて(一三)へついたのであらう▲白(一三)と(一二)　白(一三)は此場合なか〳〵大きい手である。要するに白が大人しく(一三)について(一九)につぐ危險を冒さなかッたのは蓋し此(一三)の手を見越したからであらう▲黒(二九)の手段　黒が(二九)へ下つたのも大きい手で、詰り黒(三一)以下(三七)までの絞りを利かせる手を見越したのであるが、事玆に至つては大勢如何とも恢復の見込がない。之を要するに黒の敗因は(四三)へはね次いで(四五)へ曲つた手にあると思はれる。

名人爭碁

名人本因坊丈和 中押勝

上手赤星因徹 先

（本局は天保六未年七月十九日打掛、同二十一日又打掛、同二十四日又打掛同二十七日終局）

白(六)古今無類の妙手

第一圖

▲白(一三)の變化　白(一三)は單に(い)に詰めて打つ趣向もあり、又(一五)へかけ、黒(一七)、白(一三)、黒(一三)に飛んだとき白(い)に詰めて打つ趣向もある▲黒(一三)の變化　黒(一三)の手にて單に(ロ)におし、白(二六)、黒(ハ)、白(二四)、黒(二五)、白(二三)、黒(六九)、白(四一)、のときき黒(九八)に打つも亦常用の手段である。白(二八)は所謂趣向で、(二九)へかけるのが普通の手である。▲黒(三三)の變化　黒(三三)に切る手にて先づ(三八)へはね、白(三五)へ下つたとき黒單に▲印へこすみ著けるのも常用の手段である。然るに黒先づ(三四)を切り次いでへ(三五)はねたのは即ち譜の如く白をして(三六)に沿はしめて黒(三七)にこすみ著け、次いで(三九)へはねて打たうといふ趣向である。▲白(四四)の變化　白は(四四)の手で單に(に)へ下る手段がないでもない。それは一方には黒(四五)のけいま掛けを防ぐと同時に(ロ)の出切を狙つて居るのであるけれども左すれば黒先づ(四八)にぐずみ白×印につぎたる時(へ)に下ることになる(四五)のかけを防ぐことが出來る代りに黒に(四八)へくすまれて眼形を作られる不利益があるといふことを知らねばならぬ。▲白(四六)の趣向　白先づ(四六)にのぞき而して(四八)にあてたのは洵に面白い手である。其譯は黒(四九)の手で、若しも(六〇)につげば白には(に)へ下るといふ手段がある。其時黒が(六八)に包圍すれば白(ロ)、黒(ホ)、白(へ)、黒(ト)、白(ハ)、黒(チ)、白(リ)、黒(ヘ)のつぎとなつたとき白に於ては※印へはね出す手がある。けれども先きに白の(四八)のあてがないと黒から(×)へはね込まれて「うッてがへ」でアベコベに擒にされて了ふ。さういふイキサツがあるから白は先づ(四六)にのぞき次いで(四八)にあてたのだ。▲黒(五七)の變化　黒五七は(ヌ)へこすんで居る方が(ル)のはねが嚴しいから利益であると思ふ▲黒(六一)の變化　黒(六一)の手で(六三)に孕れて居る手もあり又(七三)に飛んで打つ手段もある。

▲丈和先生古今無類の妙手

▲因徹先生應手に苦みて吐血昏倒す

▲古今の妙手、白(六八)と(七〇)　白(六八)を古今無類の妙手といふは抑も何故なるか。黒が(六七)へはねたとき白は其儘捨置いても上に出路があるから決して死ぬ氣遣ひはないが、唯攻立

てられるのが苦しい。左りとて此場合▲印に受け次いで(あ)にかけつゐで居れば碁が遅れて了ふ。ソコで白が敵の思ひも寄らぬ地中に(六八)と一著を下して黒の動静を窺つたのである が其結果、白が(七〇)と打つたのも亦妙手と謂はざるを得ぬ。事玆に至つては黒(七一)のかけつぎは止むを得ぬ譯で、白は左上隅の一團がイザ危いといふ時には(▲)と(▼)此の二ツのあてを利かせる手段があつて十分に外部へ遁出す血路が開けてあるから隅の白は樂々と生きて居るのである。乃ち先手を取つて(七二)と他の大場に打込みたる其手段の妙、到底尋常棋家の思ひも寄らざる所で古今の妙手と稱へらるゝ所以である。

▲黒(七一)のかけつぎ　黒が若し(七二)のかけつぎをしなければドウなるかといふと白は先づ(ヘ)につけて様子を見るだらう。其時黒(ト)へはね出せば白(ハ)、黒(ホ)、白(に)、黒(チ)に一子を取りたるとき白※印を切り、黒(ヲ)に突出し、白(七二)にのび、黒(ワ)におしたとき白(リ)を切る手順となる。ソコで黒が△印へはね込めば劫となるが、黒(ワ)へ出る手で直ぐに△印へはね込んで攻め合へば(二八)以下の白を擒にすることが出來る代りに先手で外側からピシ〳〵と締めつけられて了ふ。さうなるとアベコベに(五三)以下の黒が弱くなつて攻めらるゝことになるから(七二)のかけつぎを閑却する譯には行かぬ。

▲白(八〇)も亦面白い　手である。黒が若し(カ)につげは(よ)に突出し、黒(タ)におさへた時白(れ)を切る手段である。これは黒が(七七)へ飛んだから斯うなツたのであるが、併し黒が(七七)へ飛んだのも大いに意味がある。といふのは若し白がすて置けば黒先づ(八二)へはね、白(八三)に約へ、黒(八九)にかけつぎたるときの白が(八三)の邊に應ずれば(九三)の處を切らうといふ趣向であつて白が(七八)へ突當ツたとき黒が(七九)へのびたのも矢張り其意味を含んで居るのである、ソコで白が隅に頓著せず不斷は好まぬ手であるが此場合(八〇)へ曲つたのは臨機の處置と謂はざるを得ぬのである。

▲白(九六)の突出しは嚴し　白(九三)にのぞき次いで黒が(九五)へ突出したとき白も亦(九六)へ突出したのは隨分嚴しい手で、ドノ位先きが見えるのか、迚も尋常棋家の企て及ぶ所でない。其戰略如何は次の圖に就て説明しやう。

▲第二圖白、見合ひの戰略　白が(九三)とのぞき次いで(九六)へ突出(第一圖參照)したのは詰り本圖に於ける如く(犬)に劫を打拔かうといふ意味を含んだ手であツて、黒が若し(七七)につぐ手で、モウ一手を費やして白◎四子を擒にすれば(三六)へ突出すべく、又黒が譜の如く(七)につがば◎◎四子を遁げ出さうといふ所謂見合ひの趣向で、黒が(七)とついだから豫定の通り白は(ろ)と切り次いで(一〇)へあてゝ譜の如く打つたのである。何ぞ其手段の巧妙なるや白(一〇)と打ち尋いで(一四)へ飛ばれるに至つては黒は大分働かれたと謂はねばならぬ。玆に注意すべきは白(一四)(一六)(一八)とおしたのは黒の應手如何によつては白(一三)へ劫に打込み黒が其一目を取つたとき白(四四)について上下を駄目詰りにするといふ意味を含んで居ることである。併し既に白(一〇)と打ちて(四四)へ劫仕掛けに行く必要がないから(一三)とあてゝ了ツたことゝ了解するが宜い。

▲黒(七三)のふくれ　黒(七三)のふくれは此場合黒(七)一聯隊が餘程忙しい形勢に在るのだから一見甚だ閑手なるが如く思ふ者もあるか知らぬけれども、併し此手を打たないと、白から(八九)へはね込まれ、黒(イ)、白(七三)、黒(ロ)のつぎとなつたとき締められて了ふ恐れがある。ソコで止むことを得ず斯くの如く孕れたのであらう。尤も(七三)へ孕れる手で黒(七五)へはねて白の(八九)のはね込みを凌ぐ手段がないでもない。それでも白は(八九)へはね込む手がある。其結果は黒(七三)に切り、白亦(ろ)を切つたとき黒、假に(九三)へ突出すとせば白(七八)へはね、黒(七九)にのび、白(は)におしたとき黒は(九〇)若くは(ニ)どちらを切つても(ホ)にあてゝ兩王手を喰ふから惜い哉切る手がない、先づ(へ)にふくれる位のものだらう。ソコで白(ト)へはねて二目を擒にしても十分の形勢である。其時黒が右邊に於ける中間の白にかゝつて見た所が容易に取ることが出來ぬのみか左上方面の黒四子が薄弱であるから機を見て(イ)につがれる手筋になつて居るからドウも黒の方が具合が惡い。夫れから又黒が(九三)へ突出さずして(は)へはねれば白(イ)につぎ、黒(九三)へ突出し、白(七八)へはね、黒(へ)に一子を取り白(九一)へのび、ソコで(三)の劫爭となる手もあるが黒には之れに優る劫がないから結局右邊中間の白と振變る位のものだらう。夫れから又白が(七八)へはねる手で(九一)へのび、黒(ほ)へのび、白(七八)へはねて三目を捨てゝも十分である。執れにしても白の優勢たるを疑はぬ。

黒(四五)劫とる
白(四八)同
黒(四九)つぐ
黒(五一)劫とる
白(五四)同
黒(五七)同
白(六〇)同
黒(六三)同
白(六六)同

第二圖

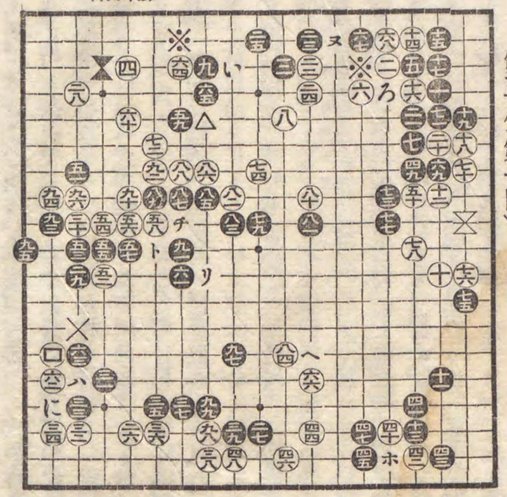
名人の對局

互先　三代目　本因坊道悅
先番　山崎道策
（延寶八庚申五月五日より十日打切）

▲黑白の着手細評　黑(三)は所謂趣向で今日でも人に由つて打つこともあるがマア(四)の處へ打つて居るのが普通である。左すれば黑(三)と白(二)は同じ位地を占めた形で、(一)の黑は全然先着の利を獲て居ると斯う云ふ好い割合になるからである白(四)は如何であらうか。後に(い)に詰めた時分に譜の如く『もくわき』にあるよりは▼印の『もくした』に在る方が間合ひの廣い丈け割り合ひが好いと云ふのは今日の定論である▲白(六)の尖みは即ち

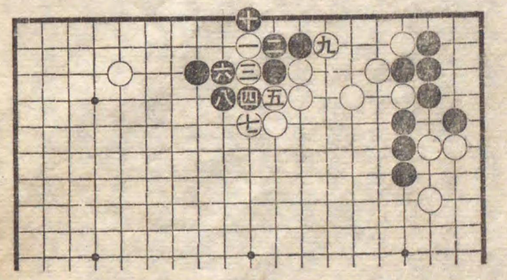
第三局（第一圖）

（乾隅）



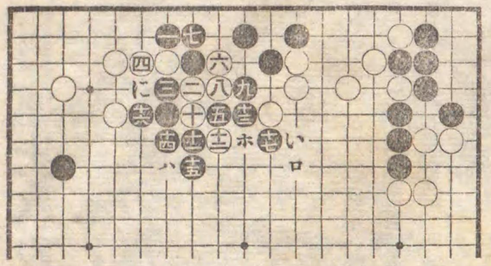
（坤隅）

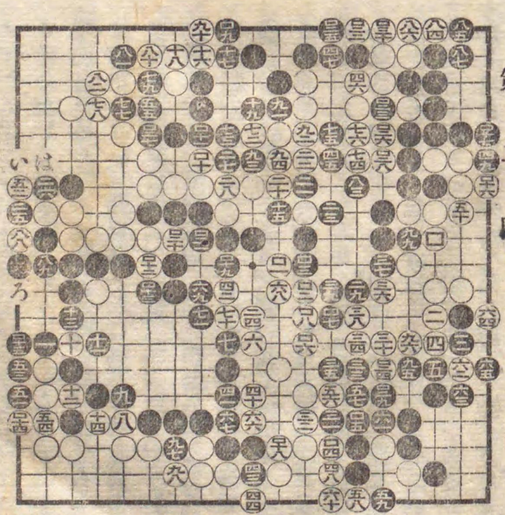
第一圖（甲）



古風の定石で、今日では(ろ)に立つ方が宜いと云ふことになツて居る。それは(七一)へ附越しの狙ひが利くからである▲白(一〇)は如何であらうか。是れも趣向で打つたのであらうけれども、當今に於ては明隅（あきすみ）へ打つのが普通で、又一番大きい手であると云ふ定論になツて居る▲黑(二五)は堅い手ではあるが甚だ緩いやうに思はれる。此に於て前へ戻つて說明する必要があると云ふのは前に白(六)の尖みは古風で(ろ)に立つが宜いと云つた。それは單に(七一)へ附越が利く許りでなく、白(二二)につけ、尋いで(二四)に引いた時、白(六)に尖んで居るよりは(ろ)に在る方が格好が宜いではないか。扨て黑が(二五)へ掛粘いだのは若し此手を拔けば白から甲圖の如く(一)(三)の捨石を打たれて外から締めつけられるのを嫌つて斯くの如く堅實に守つて居たのであらうけれども、併し白が締めつけて見た所が外部の石立が愚形になるから黑は手を拔いても差支ない。(二五)の手で坤隅の明隅へ打つて居るのが一番宜いのである。但し白が△印へ冠せて來た時には無論黑は(二五)へ掛粘いで居なければならぬ。黑(二七)も大塲で好い處には違ひないが今日では(三一)か(二八)、何れでも掛りが大きいと云ふことになツて居る▲白(三二)は普通(三三)に應じ、黑(八)に押え、白(に)となるのが通形であるが、殊更に白が(三三)に控えたのは詰り×印の打込を狙つたのである。ソコで黑も亦(三三)へ尖みつけ、白(三四)のとき其儘棄て置くと×印へ打込まれる恐れがあるから其打込を凌ぎ旁〻(三五)へ掛けたのである▲黑(三九)は緩くはあるまいか、(五七)へ煽る方が面白からん▲黑(四五)の手で(ホ)に切るは俗手で、譜の如く打つ方が働いて居る譯である▲ハテナ白が(四六)へ尖んで(四八)へ亘つたのはドウモ變な手だナ。位が低くて面白くない。此塲合は先づ(四六)の手で(へ)に飛ぶも一策である▲黑(五一)へ打込み尋いで黑(五三)に衝當り(五七)へ突拔いて振變つたのは黑の方が利益である。と云ふのは坤隅の外部は鐵壁で寄りも付けん外勢を張つて居るが、(三〇)の白に對する防備としては僅に(二九)の一子あるのみで甚だ手薄い。が圖の如くなると兩々相對して頗る嚴重の固めとなツて領域も出來るからである。但し黑(六一)は緩い氣味がある。(ト)に押すと今度(チ)の跳ねが嚴しくなるから白は矢張り(チ)へ延びて居なければなるまい。ソコで黑(リ)へ桂馬に打つ方が働きではあるまいか▲黑(六五)は堅い手ではあるが左うすると(五九)の尖みが變になるナ。此手で※印へ跳ねたらドウか。尤も白には(六五)へ跳出す手がある。併し跳ね出した所が結局乙圖の如く黑が(一七)へ跳ねる手になる。白が(い)に跳ねりやア黑は(ロ)へ二段跳ねをする。斯うなると白は隨分窘（いち）められる。夫れから一方に黑は(ハ)の曲りを見て居ると

第一圖（乙）





第二圖

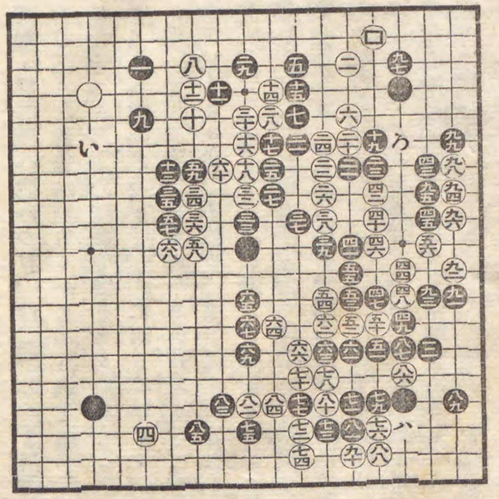
云ふ利益もある。又黑が(一七)へ跳ねる手で先づ(ハ)へ曲つて白が(に)に二目を取つた時に黑(ホ)へ突出して居ても惡くはないが、夫れよりは暫く(ハ)の曲りを保留して(一七)へ跳ねる方が面白い▲黑(六七)は旨い手だナ。それは白から(ヌ)に約へられると白には眼が出來て黑の方が却て攻められるから何とか應手をしなければならぬ。ソコで黑が(六七)に飛んで白の眼を奪つたのは旨い手だ。夫れから黑が(六九)へ突出し尋いで(七一)に粘いだのは既に(六七)に飛ぶ時から豫定した手である。而して黑が既に(六七)へ飛んだ以上はアベコベに白から(七一)の處へ突込まれると黑(ろ)に取り白※印の粘ぎとなツて(六七)の取りが殘る一方に隅の黑が眼を缺れる。夫を見越して居るから黑(六七)(七一)と打つたのは極く堅固で良い手である。黑が(七三)へ跳ねたからは(七五)の手で×印へ置く筋はあるが夫は面白くないと見たかナ。

▲第二圖、平穩の局　此碁は誠に無事な碁唯(五一)のつけは面白い、要するに此碁は道策先生が壯年時代の碁で其後先生の技倆益〻上達したのであると云ふことを附言して置く。

日連上人の激戰
（三十二歳）

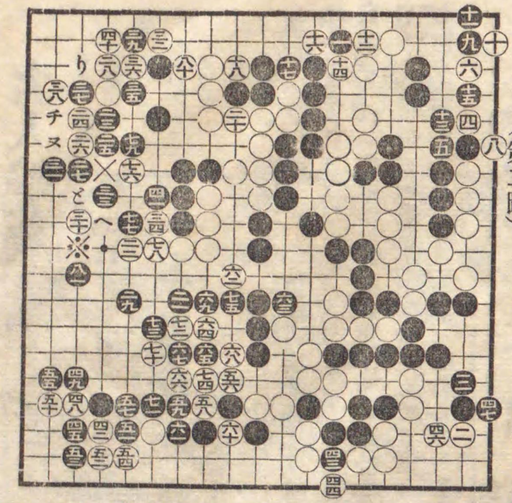
吉祥丸の奮闘
（十一歳、後、日則と改む）

（建長五年癸丑正月於松葉谷草庵）



（第一圖）

▲第一圖　黒白の布石、法に適はず、黒が三子を置き、白が二子を敷き而して黒が先を以て打つたのは先づ二目の格で、ドウ云ふ譯で斯ふ云ふ碁を打つたものか、蓋し支那に於ては昔から斯う云ふ式で打つて居るから支那式に則つたのかも知れない。白が(三)と懸つたのは布石上甚だ其當を得ない。ナゼかと云ふに目下即ち(二九)へ三間に挾まれたらドウカ。黒の(一)と(二九)との間合ひが釣合好くなると同時に白は挾撃される事になるのは面白くない。夫れよりは(い)に一間高に飛んで居るのが普通の布石である。黒(三)是れも又宜しくない。白が常軌を守らず(三)と懸つたるこそ幸ひなれ。何故に(二九)へ打つて自己の發展を謀りながら敵を挾撃する態度に出でなんだらうか。白(四)是れ又無意味の着手である。(二九)の『もくしたん』に挾まれるのは白の最も苦痛を感ずべき筈の處であるから黒が此好處を等閑に附して(三)と懸つたからは(二九)の處へ三間に開くか、左もなくば(ろ)の方面へ掛つて敵を攻める手段に出づべきである。黒(五)の一間挾みは(一)との間合ひが離れ過ぎるのみか、甚だ急に過ぎて宜しくない。矢張り(二九)へ三間に挾むが宜い。白(六)これは黒が(五)へ一間に挾んだから其釣合を取る爲めに打つたかドウかは知らないが、隨分冒險の着手と謂はざるを得ない。ナゼかと云ふに白は先づ(ろ)に冠せて自分の發展を謀りながら敵を攻むる好着點があるにも拘らずそれを捨置いて敵の繩張内に打込んだのは隨分冒險的の打方である。黒(一三)の煽りは面白くない。此場合(い)に包圍すべき處である。白(一六)は甚だ緩い。試に黒(一一)、白(一三)、白(一四)、黒(一五)を無いものと假定せよ。其時白が(一六)へ桂馬に飛んだとすれば如何にも變な格好になる。先づ(五九)へつけるのが筋である。黒(一七)の尖みつけは惡手である。圖の如く一路先きへ(一八)に延びられると自分が却て一歩出遲れとなる許りではない。(一八)(一九)(一三)の味方が自然弱くなるから只(ロ)に飛んで自己を守りながら敵の動靜を窺ふが宜い。白(一三)へ跳ねて黒に(一三)へ粘がれたのは失策である。此場合白は(一三)に切るべき筋である。白(一三)は俗手である。(五八)へ飛ぶ方が働きがある。白(四〇)又惡し斯かる場合に一間飛んで黒に(四一)へ利かされるのは甚だ白の不利である。寧ろ(四一)へ跳ねるが宜しい。白(四四)も亦筋違ひで



（第二圖）

ある。ナゼかと云ふに譜の如く(四五)へ利かされて儲けられたのは白の爲めに甚だ不利であるからである。此場合は先づ(九五)へつけるが宜い。黒(四九)は隨分急激な手である。黒が好んで戰ひを求むるは怪我の基であるから斯樣な處は穩に(五一)へ一間飛んで居る方が趣きもあり下の白にも響く譯である。黒(八五)の掛粘ぎは此場合(ハ)に切つて居なければならぬ。然るに白が(八六)に覗いて尋いで(八八)へ下つたのは何たる緩手ぞ。(八六)へ覗く手で(ハ)に粘いで攻合へば無論白の方が手數が多いから黒軍一隊を屠しにすることが出來る。之を逸したのは白の爲めに甚だ惜むべきである。

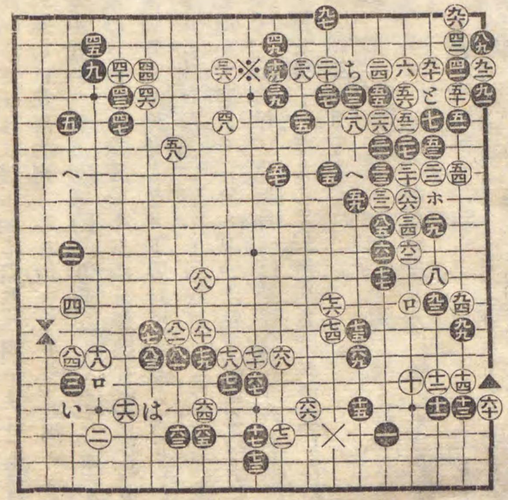
▲第二圖　黒(三一)は(五六)の跳出しを防ぎ旁〻打つた手で是非のない手である。黒(三九)は自分が一方に弱い味方を控えて居ながら斯くの如く敵を攻むる手段に出たのは所謂打ち過ぎである。此場合黒は(三一)に下つて居る方が宜い。其時白が若し×印を切らば黒、夫(六)へ跳ね、白(三)に延びた時黒(へ)につける筋がある。初心者の爲めに其成行を示さんにソコで白が萬一(と)に曲らば黒(三七)の虎を切り、白(三八)に跳ね、黒(チ)を切り、白(り)に取り、黒(ぬ)に絞り白(三七)に粘いだとき黒(三〇)に押へて白を絞る手段がある。斯くの如く白は(三七)の處を切られて絞られる手があるから×印を切る手はない。だから(三一)へ下つて居るが宜いと云ふのである。然るに黒が(三〇)と打たれてから(三一)へ下つたのは甚だ危險である。此時白が(三三)へ亘つたのは是れ又極めて緩い。×印を切らば黒は應手に窮するであらう。次の黒が(四一)の手で※印へつけるのが即ち働きである。然るに譜の如く黒が(四一)と押へたのは甚だ遠慮に過ぎたりと申さざるを得ぬ。之を要するに黒白共に緩手はあるが全體を通じて見ると中々の激戰奮闘でア、云ふ方々の碁としては洵に上出來で確に後世に傳はる丈けの價値がある。

名人爭碁二十局の中

二世名人 安井算知
三世名人格 本因坊道悦
（寛文十年七月）

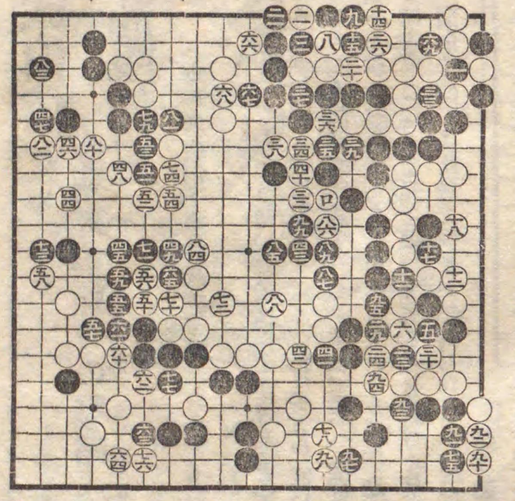
▲第一圖 黒白概評　黒(三)の掛りは寛文頃の碁風で、敢て悪いと云ふ譯ではないが、今日に於ては毎々言ふ通り左隅か、右隅いづれか明隅へ打つのが利益であると云ふ定論になつて居ることは既に讀者諸君の了解せらるゝ所であらうと思ふ。白(四)も同樣である。(五)と明隅へ陣取る方が利益である。黒(七)の掛りは先づ(十一)に締り、而して白が(九)へ掛つて來れば黒も亦(七)へ掛るべく或は白(九)に掛らずして(十)の締りを打てば卽ち黒も亦九に締つて彼此れ略〻其位を同じふすると云ふ所謂見合ひの趣向に打つが宜い。左れば左下隅では、(四)と挾まれて居る丈け不利の姿であるけれども其代り(十一)と固めて居る丈け確に先着の利を收めて居る割合になると云ふことは是れ又今日の定論である。白(八)は緩くはあるまいか。蓋し是れは白(十)、黒(十一)、白(十二)、黒(十三)となる定形を見越した手段であらうけれども白の態度としては如何であらうか。寧ろ白(十)へ掛り、黒(十一)に應じ、白(十二)に押え、黒(十三)に下つたとき白(八)に打つ定道に泥まずして(七)の黒を(ホ)若くは(二九)へ挾撃かたゞ〳〵廣く展開する方が面白くはあるまいか。然るに譜の如く(八)と打つては(七)の黒を攻めるには更に一手を(ホ)に費やさねばならぬから緩いと云ふ嫌ひあるを免かれぬのである。

第一圖



次に白(十四)と黒(十五)の交換は確に白の損である。此手で白先づ(い)に尖みつけて居る方が利益ではあるまいか。然らずんば白假に(い)に尖みつけずして(十六)に尖み黒(十七)に開きたりとせよ。後に白から(六五)へ詰められたらドウか、黒は是非とも(十五)へ尖んで×印の打込を防がずばなるまい。碁はコ、である。譜の如く白(十四)に押えて黒をして(十五)へ尖ましむる方が利益か、將た白(六五)へ詰めて黒をして(十五)へ尖ましむる方が利益かと云へば無論白(十四)に押へてあるよりは(六五)へ詰めてある方が德であると云ふことは明白である。要するに白(十四)の押えは所謂(三)筋で其位甚だ低く縦しんば後に黒が(十四)へ曲つて來た所で、時尚ほ早くは白は手を拔いても差支ない所である。だから此場合白の手段はいろ〳〵あるけれ共前に言ふ通り先づ(い)へ尖みつけ黒(ロ)に延た時(は)に打つて居る方が遙に利益であると信じて疑はない。白(十六)も亦緩くはないか。今言ふ通り(い)に尖みつけ次いで(は)に煽る手段に出づる方が宜いと思ふ。黒(十九)は如何であらうか。大分緩んだ手である。(二十)へ二間に挾むか乃至(三八)へ三間に挾む方が面白い。假に黒(二十)へ二間に挾みたるとき白(五五)へ尖まば黒は※印へ開くべく、又黒(三八)に挾み白(と)へ尖みつけ、黒(五三)へ延び白(ち)に飛ばゞ黒は(二九)へ詰めて打つべく、何れも普通の定石である。然るに此普通定石外の(十九)に緩めて(二十)へ打たした其眞意を知るに苦まざるを得ぬ。扨又黒(二一)は或は▼印へ打つ手を狙つたかは知らぬけれども此場合餘り香ばしき手ではない。試に思へ、左上隅の黒は卽ち(五)と低く小けいまに左上 △ 右上 算

第二圖



▲第二圖 白一目搔取リ巧妙　劫に負けては碁も亦白が負けである。併し白(三三)へのぞき次いで(三四)へ附越し(四十)と立切つて一目を擒にして打上げにさせたのは頗る巧妙な考へで損害も大きいけれども此手は中々大きい。併し碁は負けである。

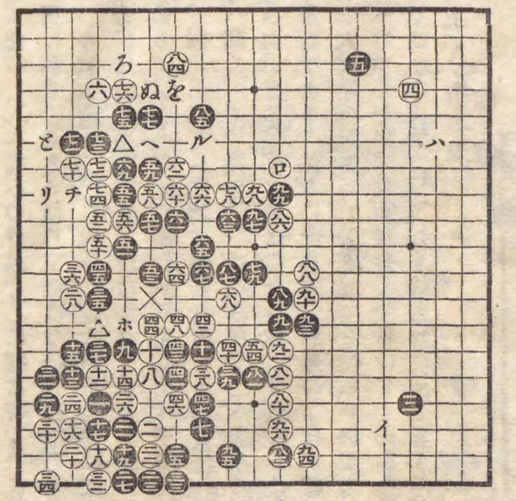
勝 **武田信玄**

先 **高阪彈正**

（永祿九年丙子春於長遠寺）

兩雄車懸りの戰略

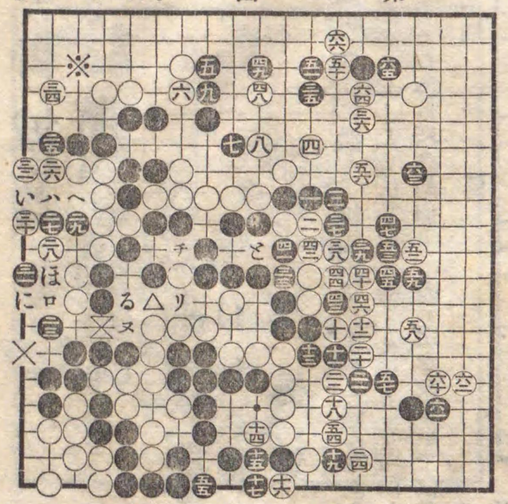
第一圖



黒先三目ヲグ

▲第一圖 **黒白概評** 白(三)へ掛つたのは損の手で無論明隅へ打たねばならぬ。黒(三)も亦損である。(イ)に打つ方が宜い。黒(五)も不可である左上隅即ち明隅へ打つか或は(三七)へ一間飛ぶか何れか其一を擇ぶべきである。白(六)も宜しくない。斯くては全く黒と同じ形になツて先を讓つて居る丈け負けて居る割合である。白を持つては此邊で何とか趣向しなければならぬ。先づ(ろ)へ打つが宜い。黒(七)は甚だ急なり右上隅に攻むべき好處があるから先づ(ハ)に掛つて敵の動靜を窺ふが宜い。即ち黒(ハ)へ掛るは(五)の一子を援くる所以である。黒(九)は惡手である。黒(一)が一段低く(三四)に在り白の掛りも亦(三一)に在つて白(十四)へ一間に飛んだ時なれば(三七)へ『けいま』に打つは普通の定石であるが、此場合に於ては黒(九)は(三七)へ一間飛ぶが宜いのである。黒(十一)是れ又大惡手である。白(十)と押したからは無論(ホ)に延びねばならぬ。左もなくば(九)に瘤つた趣意が立たない。黒(四三)の粘ぎは惡手である。圖の如く白(四六)へあて、黒(四七)に取り、白(四八)の押えとなつて黒三目を絞らるゝに至つては白の外形が厚壯になるから黒が惡い。(四三)へ粘ぐ手で單に(四七)に一目を取つて居るが宜い。白(四四)の延びも亦緩い、手順上直ぐに(四六)へあてゝ絞る方が宜い。其時黒(四八)へ延びれば白(四四)の筋をドコまでも押して行く、左すれば自然左側の黒が急になるのみならず(四七)の粘ぎが利くことになるから黒は單に(四七)へ一子を取る外はあるまい。其時白(四八)に絞るとすれば次いで(四四)に粘ぐか或は×印へ掛粘ぐか何れかを擇むことになる。黒(五五)は宜しくない、ワザ〳〵(五六)の穴を明けて(五八)の切創を作る打方は其意を得ない。先づ黒(五六)へ押す位のものであらう。黒(五九)のはねも亦惡手である。かう云ふ處は單に(六二)へ延びて居る方が宜いのである。白(六六)は究めて俗手である。試に(六三)の一子を取除けて見よ。(五八)、(六七)、(六六)と三目並びあるからはマサカ白(六三)と盃形に打ちはすまじ、(六六)へ延びる手で(へ)にはねて居るが宜い。白(七二)も亦俗手である。單に(と)へはねべき筋である。其時黒(チ)に附け越さば白(り)へ跳ねて凌ぐ手があるではないか、然るに白(七三)へ突當り黒(七三)に押へた時白(七四)に粘いだのは更に俗手を重ねたものである。既に白(七三)へ突當つた以上は(七四)に粘ぐ手でナゼ△印を切らないのであらうか。其結果は黒(へ)、白(七五)、黒(七七)の押しとなるとせんかゝに於て白には兩樣の打方がある。單に(と)へ跳ねるも可なり或は又白(ぬ)へ跳ね、黒(ル)へ飛び、白(を)に延び、黒(八五)に並びたる時白(と)へ跳ねて外部の四目と振變る手段もある。然るに白(七四)に押へたのは如何にも俗手たるを免かれないのである。

第二圖



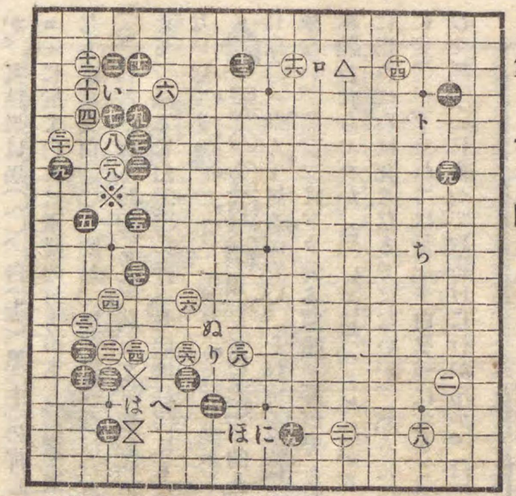
▲第二圖 **黒の敗因**(三三)の手 白(十四)の曲りは惡手である。單に(十八)へ飛んで居るが宜い。それでも黒は手を抜くことが出來ない。黒(三一)はドウ云ふ意味か譯が分らぬ。此手で黒(三三)へ跳ねたらドウか、白(い)に押へる外なかるべく、其時黒(ロ)に出れば白は死となるではないか。然るに黒(三一)へ打ち、白に(三三)へ下られては最早や白を擒にすることは出來ない。强ひて黒(ハ)に打つて取掛けに行かんか。白(に)へ附け越し、黒(ロ)に遮り白(ほ)に押へ、黒(へ)に置きて四目『なかで』にしたる時、白が(と)へ跳ね込んで眼を缺いたらドウか。黒(り)に一目を抱へて眼を作らうとする(と)と白△印へあて、黒(チ)に取つたとき白×印へはねこみ、黒(ヌ)に押え、白(る)の曲りとなつて斷ち切られて了ふ手があるから詰り黒はドチラか取られて仕舞ふ。夫故に(り)へ跳ね込まずして攻合ひにすれば無論黒の方が手が足りないからアベコベに全滅して仕舞ふ。だから容易に黒(ハ)杯へ曲つて取掛けに行けるものでない、黒(三三)は閑手である。若し白が(と)へ跳ね込んで眼を奪はうとすれば黒は先づ(チ)へあて、白(り)に粘げば黒は×印へ置いて生きて居る手があるではないか。此場合黒は(三三)の手で※印へ打たばドウか、蓋し白は應手に窮するであらう。加之ならず(三三)の白と隅との聯絡が斷ゆれば白(二六)、(三三)の一隊に死味が殘る。然るに惜い哉黒(三三)と遊びて白に(三四)と固めらるゝに至つては隅に地が出來るのみならず(三三)の白は隅と聯絡を保ちて完全の生きとなつた譯である。黒(五七)の引出しは無謀である。ナゼかと云ふに白(三三)、(十八)の大部隊は完全に生きを保てるに反し黒(四五)(五三)の一隊は究めて薄弱の姿勢に在るにも拘らず(五七)へ引出したのは禍を招ぐ基である。穩に黒(五八)へ打たんには勝敗は兎も角、細い碁に收まるだらう。然るに玆に(五七)の惡手を重ね白に(五八)と打たるゝに至つては黒、上を助けんと欲すれば下、下を救はんと欲すれば上と所謂からみ攻めの苦境に陷り到底凌ぎ切れぬ形勢である。要するに本局黒の敗因は主として(三三)の遊手に在りと謂はねばならぬ。

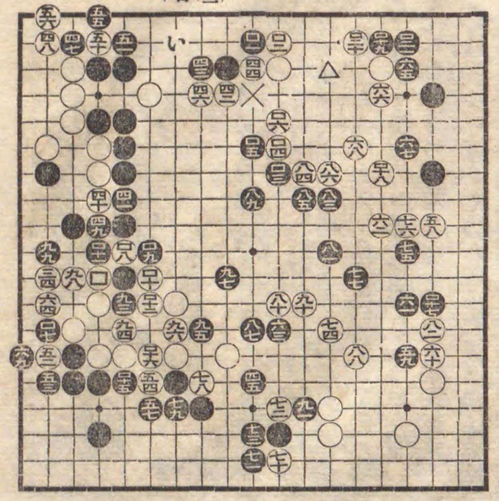
御城碁
將軍の御好み

（萬延元年申十二月八日於御城）

先番　阪口仙得
中押勝　碁聖秀策

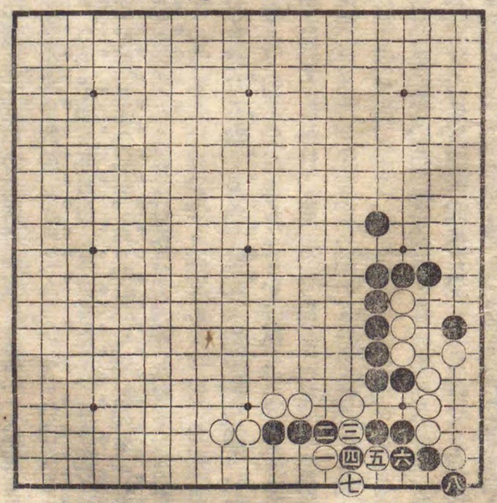
▲第一圖　黒白著子概評　黒五と挟んだからと云ふて敢て悪いと云ことはないけれども黒（十五）と明隅を占める趣向もある白（六）は所謂趣向で、若し之を棄置いて他の大場を占めると黒から直に（十）へ尖みつけられ、白（七）に延びた時（六）に煽られるのを嫌つて圖の如く掛けたので是れ又一策である。白（八）は（い）にはね込むが普通であるが、圖の如く白（八）へはねるのも亦一策で、黒（十三）迄は（ロ）に詰めるとせばドウか、（十三）との釣合上、甚だ位の低い姿となるではないか。よしんば棄てゝ置いたからとて黒から急に（ロ）若くは△印へ挟んで來る氣遣ひのない處である。勿論好い處には違ひないが、白（十六）に詰めたからとて敢て黒に響く譯ではなし、謂はゞ氣のない手だから急ぐに及ばぬのである。先づ此場合では白（は）に掛るか或は（十八）に締る方が利益である。假に白が（十八）に締るとすれば黒も亦（十七）に締る外あるまい。其時白が（に）若くは（ほ）の大場を占める手順になる。然るに白が（十六）に詰めた爲めに黒に（十七）に締られ、白（十九）に締つた時アベコベに黒に（十九）の大場へ先鞭を着けられて仕舞つた。換言すれば白（十六）の詰めと（に）若くは（ほ）の處を占領するとは何れが大きい手であるかと云へば無論（に）若くは（ほ）の方が大場である。故に曰く白（六）の手で（は）に掛るか或は（十八）に締る方が利益なりと。白（三）は黒の模樣を消す手段であるが、此手で×へ打つのも亦一手段である。それは黒（へ）に圍へば白は（三）につけるし又黒が（三）へ尖めば白は△印につけて打たうと云ふ趣向である。黒（十七）以下（三）までは詰り白の出路を止めると同時に（五）（三五）の黒を結束しやうと云ふに外ならぬ。然るに白が（三）に押へたのは自己を收めながら暗に※の出切りを狙つたのであらうけれども夫れが爲めに後手となつて黒に（三九）の大場を打たれては最早や碁が狹くなつて妙味が無くなつて仕舞ふ。故に白は（三）に押へる手で（三九）へ挟み黒（ト）尖んだ時（ち）に守つて居る方が碁は廣くなるのである。白（三六）のつけも亦自分を收めて而して暗に※印の出切を狙つたのであらうが、此手で矢張り（三九）に挟んで居る





方が面白い。然るに白（三六）へつけた爲めに黒は（三七）に自己の切りを防ぎ乍ら白を攻むる手段に出でた。サア斯うなつてから其儘棄置くと今度は（り）に跳ねられる。白（ぬ）に跳ねると黒は（三八）に延びる。さうなると黒の方が益〻厚くなる其反對に白の方が愈々薄くなるから此處ではイヤとも圖の如く（三八）に飛んで居なければならぬ。ソコで先手を取られて（三九）に打たれては先きに云つた通り碁が極つて仕舞ふ。詰り白（三三）の膨れが面白くないと云ふ譯になる。

▲第二圖　**白の敗因**　此場合白が（四三）へつけ黒（四三）に引いた時白（四四）に突當つたのは詰り黒の厚みを消しながら〳〵印の打込を浚いだ手で機宜の處置であるけれども此に於て黒に（四五）に圍はれるに至つては最早や黒の動かぬ碁になつた形勢である。黒が（四七）へはね白（四八）に押へた時黒（四九）にキッチリ粘いだのは（十三）（四三）の二目を助ける爲である。然るに白が（い）に飛んで強ひて（十三）（四三）の黒を取らうとすると甲圖の如く黒（五八）の跳ねとなつて振變られて仕舞ふと云ふ危險があるから、（四九）に粘がれた以上は（十三）（四三）の二目を取ることが出來ないのである。黒（六五）へ尖みつけ白（六六）に立つた時黒（六七）に尖んだのは如何にも堅固の打方で、最早や外に好い處がないから斯う打つ外はない。今度黒に（六八）へ飛ばれることになると（五八）（六三）の白が薄弱になるのみならず×印の切りを狙はれるから白は是非とも（六八）に守つて居なければならぬ。ソコで黒に（六九）へ跳ねらるゝに至つては大勢既に決す又如何とも挽回の策なしと云ふて宜い。之を要するに白の敗因は（十六）の詰めと（三）の押へに胚胎したので黒地は約六十目以上白地は五十何目と云ふ見當であるから結局十目以上の負け即ち黒の中押勝に歸着したのである。



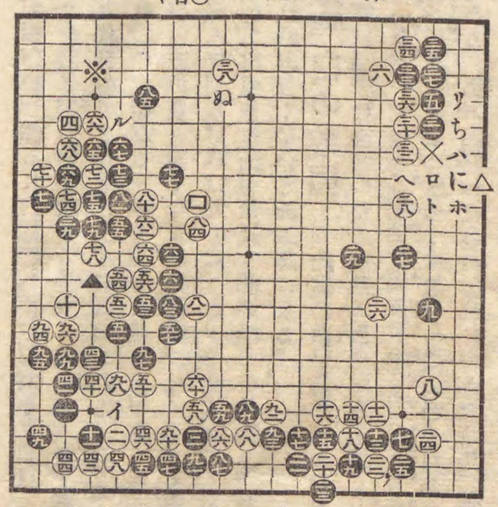
中押勝 **碁聖道策**

先 **安井知哲の決戰**

（元祿六年某日）

▲第一圖 **黑白著子概評** 黑(三)は別に惡いと云ふことはないが一言にして云へば古風の手であると云ふ外はない。黑(九)は大惡手であると斷言するを憚らぬ。無論(十二)に尖まなければならぬ處である。其譯は白から(十二)へ掛けられると位が低くなつて黑(三)の一子が凝形になるから宜しくないと云ふことは今日一般の定論である。抑も棋家が能く言ふ『コリ』と云ふのは詰り一手の効力が無くなると云ふ意味である。試に

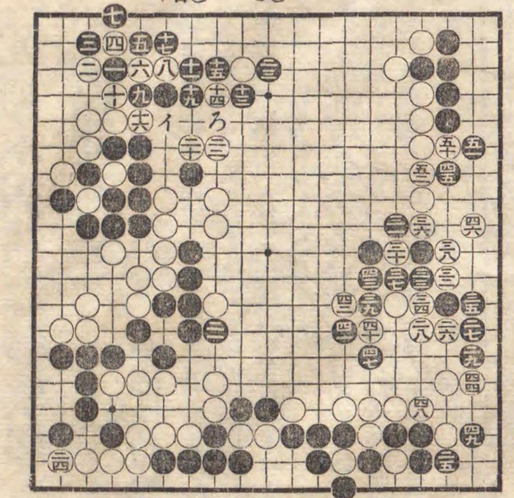
第一圖 白(十六)二目つぐ



本圖の如く白(十二)、黑(十三)、白(十四)、黑(十五)、白(十六)、黑(十七)、白(十八)、黑(十九)、白(二十)、黑(二一)、白(二二)、黑(二三)、白(二四)、黑(二五)となつた曉に今度黑が此方面に打つ必要ありとしてもヨモヤ(三)へ三間に開きはすまい。即ち知るべし黑(三)は打たないでも宜い處へ態々一子を費やした結果になるではないか。換言すれば黑(三)は一子の効力を殺がれる譯になるのである。加之ならず尙ほ此上に白から(三十)へ掛けて右下側の如く押付けられると黑(九)も亦た(三)と同じ運命に陷り双方共に位が低くなるに反し白に外勢を張られることになる。以て黑(九)の挾みの大惡手たる所以を了解するに足るであらう。然るに白が直ちに(十二)へ掛けずして轉じて(十)に挾んだのは益〻黑をして一方に凝らせやうと云ふ趣向である。實は夫程策を弄するにも及ばず直ちに白(十二)へ掛けても宜い處であるが蓋し相手を見て打つた手であらう。然るに黑が(十一)へ尖みつけたのは即ち白の術中に陷つたのである。此塲合ではマダ(イ)につける方が宜い。黑(二五)は事甚だ小である。斯くの如く一々白の意向に服從して居つては迚もたまらない。黑(二五)の手で無論(三〇)に尖んで居なければならぬ處である。併し白の手順も亦面白くない。白(十八)に突出す前に先づ(三十)へ掛け黑(三一)へ延び、白又(三二)に延び黑(ロ)に飛んだ時白が(十八)へ突出して打てば兩方を邊隅に凝らして仕舞ふことが出來るのである。黑(二七)も亦宜しくない。矢張(三十)に尖んで居なければならぬ。是れでは丸で敵の趣向通りに動いて居る譯になる。白(二八)は宜しくない。試に其手ほどきを言はんか。先づ白(三十)にかけ、黑(三二)、白(三二)、黑(三三)、白(三四)、黑(三五)、白(三六)にあて、黑(三七)に粘いだ時白は×印に曲るか或は上から塗る策に出づべく、ヨモヤ(二八)に飛びはすまい。或は又白(三〇)、黑(三一)、白(三二)の時、黑(三三)へ尖み着けずに(ロ)へ飛んだらば白は×印へ突出し黑(ハ)に押へ、白(に)を切り、黑(ホ)に抱へ、白(へ)に押し、黑(ト)に粘ぎ、白(ち)を切り、

黑△印に一目取り白(三七)へつけ、黑(り)の曲りとなるべく、斯うなると黑は非常の凝りではないか、白(二六)黑(二七)の交換がなくてすら凝形となるのに更に(二六)に打たれた時黑が(二七)に圍つたと云ふ譯になるから一層『コリ』が酷くなる譯である。然るに白が(三十)に掛けずして(二八)へ打ち黑(二九)と交換したのは白が非常の損である。と云ふのは黑(二九)の飛びは局面一體に響いて居るに反し白(二八)の手は何處にも響かぬ日蔭に居るからで、斯うなつては前の如く或は塗付け若くは十分凝らすことの出來る黑をして其形を立直らしめた譯である。白(三八)は※印へ締るのが普通のやうであるが此塲合に※印へ締ると黑に(三八)へ割打ちをされるのは見えて居るからソコで白が(三八)の大塲を占めたのである。或は此手で(ぬ)へ打つ趣向もないではない。白(四一)は少し無理の格好である。ナゼかと云ふに右側の黑は非常に堅くなつて居る。其處へ持つて來て(三九)へ打込まれて居る處であるから譜の如く黑に(四三)へはねられて上下聯絡を斷たれては白は

第二圖 白(三二)刧とる 白(八)三目つぐ



苦境に陷らざるを得ぬ。先づ(四三)に引くが穩當の手である。其時縱しや黑に(四八)へ跳ねて亘られたからと云つて一方の黑は凝つて居る處だから腹の立たぬ處である。黑(四五)の覗きは打たないで只▲印へ掛ける方が面白い。黑(四九)の尖みは時機尙早しと云はざるを得ない。矢張り▲印へ掛けて白の動靜を窺ふが宜くはないか。黑(五一)の尖みは一寸形のやうであるが併し白に(五二)へつけられると勢ひ黑(五三)に跳ねなければならぬ。自然白に調子を與へて(五四)へ延びられるのは面白くない。單に(九七)へつける方が面白からう。黑(六九)以下(七五)に絞つたのは此塲合では面白くない。損をした上に自分の眼が無くなつたのみならず中腹の白に向つては俗に謂ふ『アマリ』の姿で止めることが出來ない。先づ黑は此塲合(六九)へはねる手で(ル)へ曲る位のものであらう。

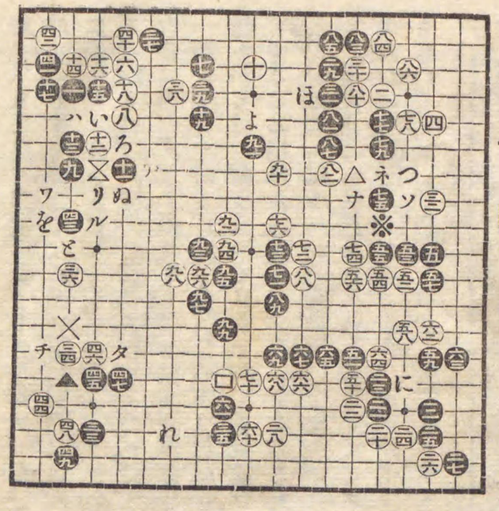
▲第二圖 **手嚴しい趣向** 白(二)へつけ黑(三)にはねた時白(四)と切たのは嚴しく面白い趣向である。黑(十七)に引いたのは何の意が颯ばり意味が分らない。斯うなると三目を粘ぐか或は(イ)に出でゝ上の黑を取るかは全く白の自由である。若し黑が上を棄てる積りならば單に(十七)へ引く手で刧を取らなければならぬ。又上の黑を活る積りならば矢張り(十七)へ引く手でキチンと(一九)に粘がなければならぬ。それでも下は矢張り刧である。然るに單に黑(十七)に引き白に三目を粘がれ、黑(十九)に粘いだ時、白に(二十)へつけられるに至つては損も亦甚だしい。或は白(十六)に突出した時黑が若し(イ)に押へたならば白は(ろ)に延びて居ても十分打てる形である。それは暫く措いて白に(二二)に取切られ次いで(二四)に押へて左下隅の白を活きらるゝに至つては最早や勝敗は確定した。

元祖本因坊算砂法印
對鹿鹽利玄

八段　本因坊秀哉謹評

算砂師は京都日蓮宗十六本寺の一ッ、寂光寺住職二世日海上人と云ひし人にて幼より碁を善くし閑居後碁所を創め本因坊算砂と稱す。實に本因坊家の鼻祖なり。本局は鹿鹽利玄先にて對局せしものなり

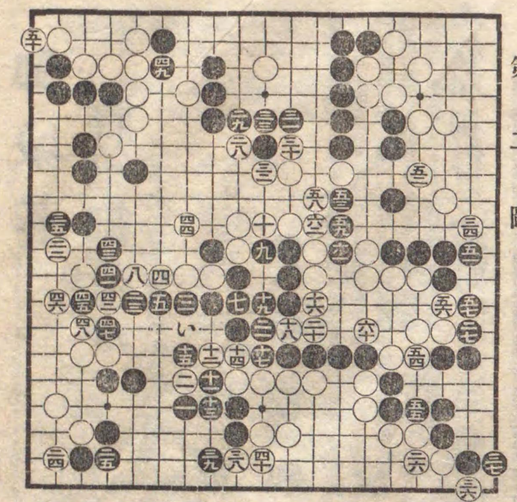
▲第一圖　天正時代の碁風



第一圖

黑(五)は不急の場所なれば左下隅の明隅に打つ方が利益である。白(六)は先づ(一〇)か(一二)にかかり先手を取て夫れから(六)の處へ懸る方が割合が宜い。從つて黑(七)は圖の如く二間に挾まずして(一三)の黑の締りを打つべき筈である。其の締り方は一間高締り小けいま大けいまの三通りである。何れに締るかは趣向に由るのである。白(八)の一間飛びは當時は打たぬことになつて居る。若し黑から(一八)とつけられるを嫌ふならば(い)へけいまに懸けるか、(ろ)へ二間飛ぶのが今日普通の打方である。黑(九)、此の交換は引合つて居るが夫れよりは(一二)へけいまする方が優つて居る。黑(十一)これも宜しくない。此手で黑(一三)の締りをするか、明隅へ打つか、左もなくば(一九)へ飛ぶ方が宜い。黑(一五)は(一二)へはねるが普通で、其時白(一五)へふくれゝば(八)につぐのである。黑(一二)は宜くない、(に)へこすむが普通である。白(一〇)へこすみつけ黑を(一一)に延ばして白(一三)と開いたのは如何にも呑氣な打方である。先づ此場合は(ほ)に懸ける位のものであらう。白(一〇)へこすみつけ黑を(一一)へ延ばした結果。左上隅の白が未だ全く收まつて居らぬ爲めに(一〇)の白を捌くことが困難になつて來た。因つて黑(一三)は(五)との調子を取つて△印へ大けいまに打つ方が面白からう。是れは白(一〇)の逃げ出しに備へる一方に(七八)へつける抔樣々の手段もあり又※印へ打つて一手で白の出路を塞ぐ手段もある。然るに白(一八)と低く搆へて居るのに黑(一三)と低く打つたのは宜しくない。此處へ打つならば(四五)と高く打つ方が宜い。白(一四)の懸りは此場合甚だ面白い、若し▲印へ懸かると黑に×印へ一間に挾まれる手があるので圖の如く懸かつて黑に打ちやうなからしめたのは誠に巧みな打方である。黑(一五)の詰めは甚だ宜しくない。白の備へてある處へアトから行く手であるから敵に利かぬ手である。此場合でも矢張△印へ大けいまに備へる方が確かである。白(一六)は緩い、×印の出切を狙つて(と)へ三間に詰める方が宜い。黑一七のけいまは時機尚ほ早し。黑(四五)に打ち白(四六)に押せば黑▲印に押へ白(四七)へはねれば黑(チ)にはねるが宜い。白も亦(一八)と覗き後ち(四〇)と押へたのは如何にも緩過ぎる。(一八)の手で×印へ突出し黑(り)、白(ぬ)、黑(ル)、白(を)、黑(ワ)にかけついだ時白(か)に一目を抱へて居るが宜い。さうすると今度(よ)の飛びが嚴しくなつて來る。黑(四三)はいらぬ手だ、矢張(四五)の處へ一間飛んで居るが宜い。白(四四)も緩い。此場合(よ)に飛出す方が面白からう。黑(四七)も緩い、(タ)にはねるが宜い。黑(五一)のはねもいらない。矢張△印に備へて置くが宜い。白(六〇)の突當りは惡手である。圖の如く黑に(六一)へ延びられると黑の方が固まる許りではない(れ)の打込がなくなつて了ふ。黑(七一)は緩い。(七二)にあほる方が宜い、隨分白は應手に困るだらう。黑(七五)も亦緩い。此場合は黑(ソ)、白(つ)、黑(ネ)、白(ナ)、と打つべき處である。黑(九五)もいかない。(九七)へ飛んで居る方が輕い。

▲第二圖　苦



第二圖

黑(一五)の切は惡い。夫れが爲めに白に(一六)へ押されて眼を失ひ而して(い)にはね込まれるやうな味が出來て來た。此手で(一六)へ曲つて居る方が安全である。白(一三)のこすみは(一四)に押へて(い)のはね込を狙つて居る方が宜しい。此碁は百六十二、手止りとしてあるが結局苦になつたと云ふ。

碁の歌（元和三年三月吉日）

本因坊算砂

石立は相手によりてうちかへよ
　さて劫つもり時の見合
番數を勝つほど後をしめて打て
　少も心ゆるしはしすな
他義法度かたく守らは其外も
　勘忍するは道のみちなり
作物ありとをり入り案すれば
　心にそまぬ手をや打らん
上手とて餘りの氣過恐るなよ
　又恐れぬも惡きなりけり
圍碁は只下手と打とも大事也
　少事と思ふ道のあしさよ
我藝を見かへる事は打忘れ
　人の曇りをいふそをかしき
身の上の負に成をは知ずして
　向はかりを見るぞ下手也
苟めも諸道の非難無益なり
　手前の義理を詮さくは良し
嗜はかけにて絕す勉むれば
　面白き手を見分けうつなり
智案先早きは惡しくこまやかに
　始末目算手打たてすな

御城碁

將軍御好み

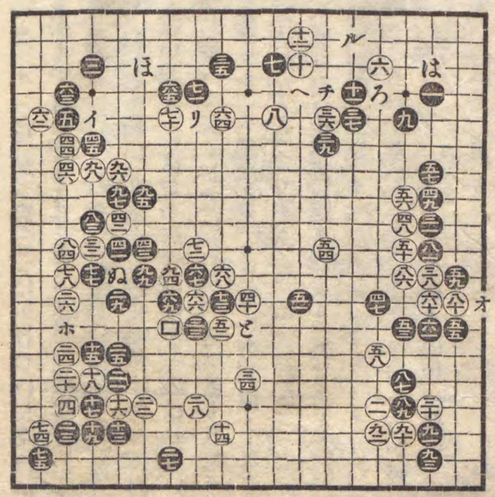
（嘉永三年庚戌於御城御前）

先番　三目勝　碁聖　秀策

伊藤松和

坊間に散在する古碁の棋書中には同一人にして彼れと此れと打方を異にせるあり或は手順を誤り甚だしきは白と黒とを取違ひたる物もありとか。御城碁五百有餘番の對局に就ては目下本因坊秀哉氏專心調査中に屬す。本譜は德川公爵家秘藏の棋譜に據れるものにて最も正確のものと信ずれども萬々一誤寫あるを發見せらるゝこともあらば謹で訂正すべし（編者識）

第一圖

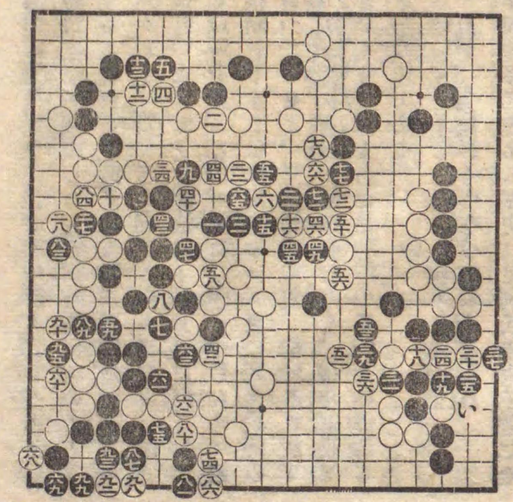


▲松和獨得の筆鋒　白(ほ)は所謂趣向であらうけれ共當時は(五)か(六)へ懸るのが普通となつて居る。黒(五)是れも當時は(イ)に締る方が宜いとなつて居る。それは白が(六)へ懸つた時(七)の處へ二間に挾む手が厚くなるからである。白(八)のボウシは(六)と懸る時から黒(七)と挾んだならば斯く打たうと云ふ趣向で打つたものと推測されるが蓋し損であると云ふことも承知の上で打つたのであらう。黒(十一)是れは當時の定石であるが今日では打たぬ方が宜いとなつて居る。それは圖の如く黒(十一)と白(十二)と交換した爲めに一は白(ろ)の出切と(は)につけて打たれる禍が殘るのみならず白の傷みをなほして了ふ結果を生ずるからである。黒(一五)も亦趣向であらうけれども黒としては(ホ)へ二間に挾み返し白(一八)に尖んだ時高く(三三)に備へる方が無事である。然るに黒が圖の如く(一五)と掛けたのは蓋し黒(二九)までの手を運び白が普通の如く(三三)に應じ黒(三三)に打ち白(三四)に打つた時黒戈を轉じて(九一)へ這入らうと云ふ趣向であつたらう。然るに白に(三三)の手を抜かれて(三〇)と締られたのは蓋し案外であつたらう。黒(三一)は(十一)の掛けに鑑みて餘程考へた手であらうが、如何にも位が低い。當時では星下即ち(八一)に打つのが普通となつて居る。黒(三五)の飛びは(ほ)の詰めを凌ぎながら(へ)のはね出しを狙つた手らしい。(四〇)は(と)へ一間に飛ぶのが普通である。ドウも二間に飛んでは何となく薄弱になるが、併し是れは松和先生獨得の筆鋒であらう。白(四一)とはねたのは蓋し黒が(四三)に延びた時(八三)の切り凌ぎ旁々(四四)へつけやうと云ふ心算であることは讀めて居るが、黒に(四三)へ延びられると左側の方では大分待をして居るが、左なきだに何となく薄弱な(四〇)の白が益々薄弱になる。夫故に白(四〇)へ飛ぶ趣意から謂へば此場合(四三)にはねずして單に(八三)へ延びて居れば自ら黒の形は薄くなりもし、又(ほ)の打込を狙ふ手段も生ずる。然るに圖の如く打つて黒に(四五)に跳ねらるゝに至つては最早

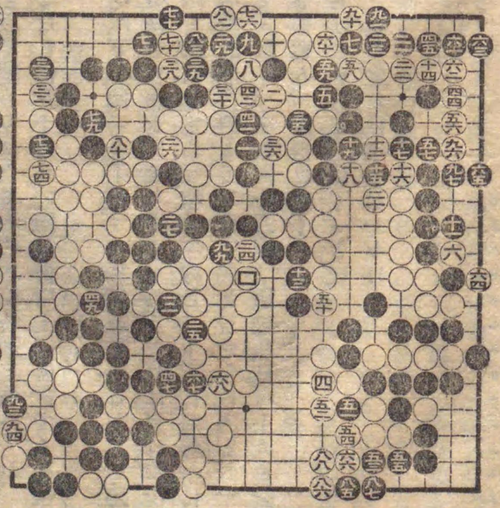
や(ほ)に打込む筋がなくなつて了ふ。黒(八七)は(オ)に亘つて居るのは緩いから一寸白の挨拶を聞く爲めに斯う打つたのである。ソコで白が(八九)に粘げば黒も亦(六六)の處に劫を粘ぐ趣向である。夫れから又黒が(一五)へ飛んだ眞意は其時若し白が(九九)へ出れば黒(チ)へ曲り、白(ヘ)の時黒(リ)へ突出し、白(ぬ)へ突込で切つた時黒(ル)に打つて棄てゝ打つ趣向であらうと思はれる。さうなると(五〇)(六〇)以下の一團と(八)以下の白が未だ收まつて居らぬから黒の方が優勢になる。黒が(三九)と切つ取つたのは蓋し白に(い)に劫立に出られたるのが辛い處からすつかり劫の始末を讀み切つて打つた手だらうと思はれる。

▲第三圖　黒(五二)のヨセは面白い。斯くして黒(五三)(五五)と粘いだのは一寸巧みだ。夫れから右上隅第四圖に於ける黒白の關係で

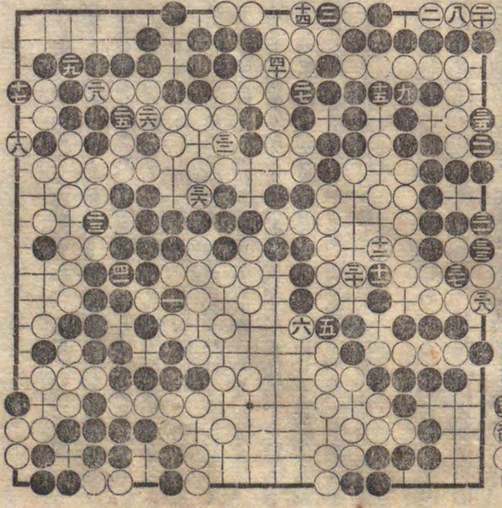
第二圖



第三圖



第四圖



あるが白(一四)は黒から(一五)とつけ越されぬ前に(一七)へ突出し黒(五七)に押へた時白(五八)へ突出して打つ抔此處にはいろ〳〵手段があるやうであるけれども此碁は非常に劫關係が多いから其得失は中々六ケしくて當局者に非ざる限りは容易に斷定は出來ない。殊に打つた當時より此邊のイキサツに就て何にも話の傳つて居らぬ所を見ると白が單に(一四)とつけたのが過ちであると云ふ推斷を下すことは出來ない。兎に角秀策師の配置に妙な處があつたにせよ、秀策師の末年、御城碁に於て黒白共に**十九番勝通し**の負けなし、後年碁聖と謠はれた秀策師を斯くまで惱ました松和師の手腕も亦偉なる哉と嘆美せざるを得ぬのである。

◉第一世本因坊算砂畧歷

我朝の碁道千餘年間幾多光輝ある歷史は足利氏の末造應仁の亂に由りて殆ど其跡を絕たんとするの秋に方り兀焉靈妙の技を揮つて斯道を中興し德川氏碁所三百年の基を開きたる偉人を本因坊一世算砂とす。算砂は俗姓加納、幼名與三郎、父を與祐と云ふ。永祿元巳歲五月京都長者町に生る。幼にして穎悟、永祿八年八歲にして父に請うて寂光寺の碩學一世日淵の門に入り永祿九年四月九歲にして落飾し法名を日海と稱し本行院と云ふ。

日海未だ壯ならずして宗法の蘊奧を究めざるはなく一宗仰望して吾山の法燈と尊崇し其名大に揚る。又常に想を碁將碁に馳せ切瑳琢磨海內又敵を見ざるに至る。初て織田信長の知遇を受けて碁道中興の端を啓き、次で豐臣秀吉に仕へて碁所を拜め德川家康の關東に下るに從うて創業全く成れり。左に掲ぐる一章は往年寂光寺より頒布したる一世算砂の小傳なりとす。

日海大僧都は寂光寺日淵上人の法弟なり本行院と云ふ。學德兼備の師也。傍ら碁道に達して天下類なし。依つて右大臣信長公も師を召して於御前爲軍法屢々圍碁を爲し豐公又軍事の爲めに召され、尙ほ家康公も師を召して南光坊天海僧正本因坊日海僧都を神君の兩軍僧となし置かれしなり。神君御一統後、明國より碁道の達人來朝して雌雄を決せんと請へり。依つて日海僧都台命に則りこと〴〵く勝を得たり。於之乎其の名稱世に顯はる。而後彼明人歸國し大いに感じて云ふ、吾れ碁に於て未だ敗を取りし事非ず、唯日本にあるのみと、感嘆の餘、依て彼の國に於て製したる碁器を贈り來る。時の天皇も是れを聞召し又師を召して圍碁を叡覽あり。時に大僧都法印に叙せらる。關白近衞公より唐桑の碁盤を下賜せらる。僧都又將棋も大橋宗桂と平手也。而後神君有台命、寂光寺を辭し關東に下向し名を算砂と改め祿三百石を賜ふ。是則ち本朝碁の達人本因坊元祖なり、云云。

前に掲げたる碁歌は算砂の直筆を以て認めたるものにて現時之を裝具し寂光寺の寶什として藏せらる。又此歌の始三首の別に算砂直筆を以て認められたるもの本因坊家に傳へられ、同家之を軸物となし毎月十六日の圍碁會席上に展覽するを恒例とせり。

是より先算砂は門下算碩（上手格）の技倆優秀なるを見て跡目と定め未だ相續せしむるに至らずして歿したれば更に算悅（法名日傳）を以て跡目と定め元和九年卯月二十三日病蓐中に在りて碁所を中村道碩に讓りて二世算悅を督せしめ同五月十六日東都に於て入寂す、享年六十五歲、法諡を日海上人と云ふ。京都寂光寺に葬る。辭世に曰く

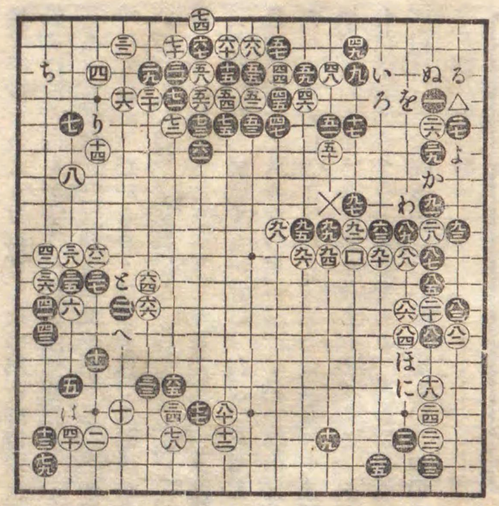
碁なりせば劫を打ても活くべきに
死る途には手もなかりけり

御城爭碁

先番二世 本因坊算悅（十一目勝）
二世 安井算知

（正保三年丙戌十一月二日於御城）

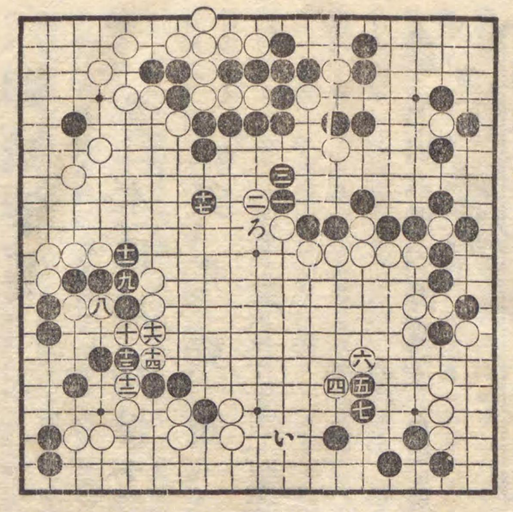
▲第一圖 黒白古風の陣立



第一圖 黒(六九)へつぐ 白(七九)同

白(四)は所謂古風の手である。今日では研究の結果白(い)か(十八)に掛る方が宜いと云ふことになつて居る。それは圖の如く白(四)と打つと黒に(ろ)へ締られて仕舞ふ。黒(ろ)の締りは白が(十八)の處へ懸つて來たらば黒は(八五)の處へ三間に挾まうと云ふ手段で、黒の陣立が最上の姿勢となつて仕舞ふからである。然るに黒が(五)の手で最上の要處即ち(ろ)の締りを棄てゝ圖の如く掛つたのは是れ又古風と評する外はない。既に黒が(ろ)に締らずして(五)と掛つたるこそ幸ひなれ、白(六)の手で(い)に掛るか(十八)に掛つて成べく戰局を廣くする趣向に出づべきである。然るに石(六)と二間に挾んだのは敢て惡いと云ふではないが、謂はゞ黒のお供をした姿である。黒(七)も亦た既に逃べた通りの理由で(ろ)に締るが宜いのである。白(八)また黒のお供、一言唯當時の碁風と云ふ外はない。黒(九)漸く今日の理想通り締つたのは至極宜いが、白(十)の尖みは甚だぬるい。蓋し此處で白が(は)へ尖みつけると黒は手を拔いて(に)へ締つて仕舞ふ。故に此の場合白は(三)の黒に對して何とか趣向をしなければならぬけれども、左りとて白(十八)に掛れば(八五)の處へ三間に挾まれるのは眼に見えて居るから高く(に)へ掛るとか(ほ)に掛るとかソコは所謂趣向で、何とか其の邊に著手すべきである。黒(十一)今度は黒の方で白のお供をした形である。手を拔いて黒(に)へ締ると即ち兩締りと事ふ好い姿になるのである。白(十二)は少しも黒に響かず何だか氣のない手である。此の場合は黒(十二)の尖みがあつて重くなつて居るからこゝを棄てゝ(三)の黒に掛る趣向は考慮を要する。先づ(は)に尖みつけて窘めるが宜からう。ソコで黒が(へ)に尖めば白は(と)に煽るべきである。白(十六)の尖みも亦ぬるい。是れでは七の黒一子を取切つたと云ふ譯にはいかない。(ち)に斜走されると所謂地中、手を生するから取切る積りならば(り)に押へて居なければならぬ。然らずんば(三一)へ二間に開くも亦一の趣向で、黒七を取切ることが出來ぬ代り白(五九)の打込みが嚴しくなつて來る。黒(十七)は五九の打込を

凌ぐ手段であらうけれども此の場合時機尚ほ早し。ナゼかと云ふに縦しや白が(五九)へ打込んで來た所が(十六)の白が緩んで居るから黒は(二九)へ開く餘地があつて(十五)の黒は一向苦まぬではないか。だからコ、は手を抜いて黒(三)の締りを爲すが宜い。黒十九は緩も亦甚だしと謂はざるを得ない。此場合は無論白(一八)の挟撃を加ふべきである。白(二十)も亦餘り挟ま過ぎる。(六七)か(二八)へ展開するが宜い。白(三三)のつけは一向詰らぬ。且つ黒(三三)とはねた時白が(三四)と粘いだのは甚だ重い手で、夫れが爲めに後に黒から(八一)とつけられて上下何れか一方を掻取られるやうな結果を生じたのである。夫れよりは此の場合白は△印へつくべき筋である。其の時黒若し(三七)に押へれば白は(ぬ)に跳るか(三六)の處を切るか二つの手筋がある。又黒が(る)に受ければ白(三六)へはね、黒(を)へ延びた時白(わ)に圍るを云ふ洒落れた手がある。或は黒(三七)にも押へず(る)にも受けずして(ぬ)に引けば白(三六)へはねる筋を見つゝ(か)に詰めるが宜い。然るに白此の手段に出でずして先づ(三三)へつけ(三四)と粘いで其の形を重くし、而して(三六)へつけたのは宜いが黒(三七)へはねた時手を抜いて(三八)と二間に開いたのは頗ばり働きのない手で、一向其の意味が解らない。既に白(三六)とつけた以上は黒(三七)へはねた時△印を切るか、(を)へはねるか但しは(よ)に押へるか此の三策中その一を擇ぶべきである。白(四四)と打込んだ結果白(六十)へはねて振替つたのは一向利益がない、寧ろ無謀である。夫れよりは白(四四)の手で(五三)の肩を衝く方が穩當である。黒(六五)の押しは一向詰らない。此の手で(七九)へ下つて實利を占めるが宜い。黒(八一)へつけた時白(八二)へはねて結局(三八)の一子を掻取られたのに前に言ふた通り白(三三)(三四)と粘いで重くなつて居るから白(十八)の方を助けなければならぬ爲めにコンナ不利の結果を來たしたのである。若し(三八)の一子を助けようとすると(十八)(三四)(三三)の三目を取られて仕舞ふ。白(九六)の押へは妙味がない、×印へ尖んで居る方が面白くはないか。



第二圖

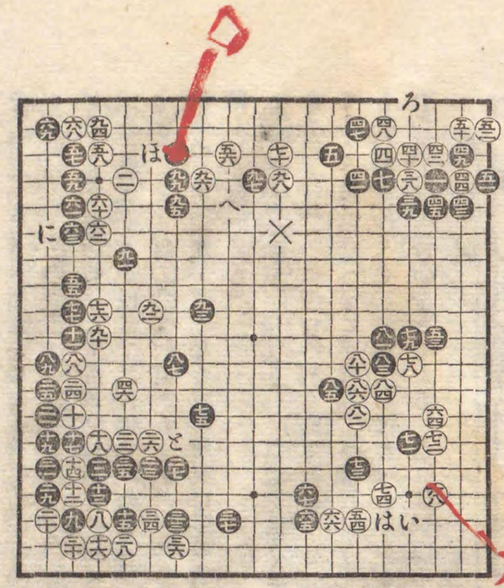
▲第二圖(三七)以下の蓍子省畧　黒(五)のつけは面白くない。(八)に詰めるか、(イ)に一子を取切るか或は(四一)に切つて一子を取込む位のものであらう。黒(十七)はドノ譜を見ても斯うなつて居るが何かの間違ひであらうと思はれる。本局は百五十一手で終局となつて居るが(十七)以下には大分間違ひが多いやうに思はれるから黒(十七)の手で(十四)と切り一子を取込んだものとして概算すると黒地は九十目餘、白地は八十目見當であるから黒の勝ちたることは明かである。

寛永年中

於禁裏

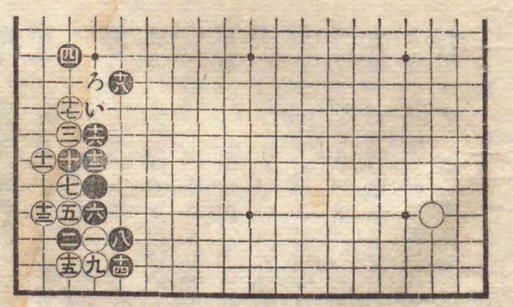
名人井上家一世　中村道碩

先二世井上因碩(一目勝)



第一圖　白(三)つぐ

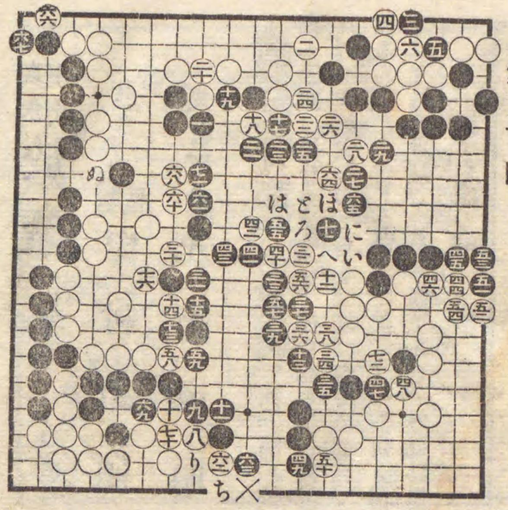
▲第一圖(十五)は隨一の要衝　黒(五)同じ挟むならば(ヰ)の處へ三間に挟む方が宜い。併し此の場合黒(五)は明隅即ち(い)に打つ方が宜いのである。是は當時の碁風で大分流行した時代もあるが、併し此の手で黒(十三)へ衝當り白(十五)に延びた時黒(二九)に懸け粘ぐのが普通である。然るに黒(十一)即ち(四)の處に挟み返へすと他の模樣によつては白に甲圖の如く打たれることがある是れは(四)の黒のない場合ならば無論白の方が悪いのであるけれども圖の如く黒が(四)と白に一向響かぬ堅い處へ詰めた結果となり且つ後手となつては黒の方が悪いのである。或は黒(十八)の手で(い)に押す手もあるがさうすると白は其の儘棄置いて後に(ろ)へはね出すと云ふ筋が殘るのである。斯う云ふ打方もあるのだから黒(四)即ち本圖黒(十一)の挟みは考慮を要すべきである。黒(四七)の尖みは暫く見合せて唯(四九)に一目を切取つて居る方が利益である。と云ふのは後に外の關係で、(ろ)に置く筋があるからである。黒(三)、コ、も好い處には違ひないが此の場合隨一の好點は黒白ともに(十五)の處である。然らずんば黒(三三)の手で(は)に掛るも亦一の趣向である。黒(五五)は甚だぬるい。矢張り(十五)へ斜走するが宜い。白から反對に此處へ來られると白の姿勢が整ふに反して黒は受身になるではないか。然るに此の好點を閑却して黒(五五)と一間飛んだのは何だか氣の抜けたやうの蓍子である。白(五六)も誠に好い處ではあるが黒が手を抜いて居るこそ幸なれ、何故に(十五)へ煽らぬのであらうか。黒(六一)の押しは敵の模樣を厚くする結果を生ずから單に(に)へ斜走する方が輕くして宜い。黒(六五)に詰めるよりは矢張(十五)へ煽る方が宜い。白(六八)のはねは蓋し(は)へ打込まれる筋があるから之を防ぐ爲めであらうが、此の場合黒が(六九)と受けたのは甚だぬるい手で詰り白に打込みの用心旁〻打得をされた譯である。黒(六九)の手



甲圖

で(へ)へ『ぼうし』に冠ぶせたい。白(十)も亦ぬるしと謂はざるを得ない。此の場合は(三)以下の黒は(六五)(六七)と一方に備へがあるから前の時とは大分形勢は違ふが白は自分の用心旁〻(七五)に斜走するか或は(と)に押すか此の二手の其の一を擇むべきである。白(七六)は如何あらうか。×印へ二間に飛ぶ方が自分の勢力範圍が厚くなる其の反對に黒の右側中腹の模樣が薄くなる譯である。

▲第二圖 **黒必勝に非ず**　白(十二)は筋違ひである。ナゼかと云ふに(ハ)に押しの利く處であるから(十三)へ斜走する筋である。黒(四九)へ下る手で(五一)へはねる方が宜い。從つて白も亦(五二)に押へずして(五三)へはねべきである。白(六四)とはねたのは一寸面白いやうであるが是れは損である。ナゼかと云ふに此の手で先づ(ろ)に突出し黒(は)に延びたとき白(に)につける筋がある、さうすると、黒(い)、白(ほ)、黒(へ)、白(と)、黒(六五)の切りとなるから圖の如く打つよりは餘程黒地が減る譯である。或は黒最初(ろ)に突出さずして(に)へ附越す筋もあるが結果は矢張り同じ事である。白(七二)の切りは後手四目の得に過ぎない。本局は黒が一目の勝ちと云ふのだから餘程大事の碁である。依つて白(七二)の手で×印にはねて居れば斯う云ふ處は黒から(ち)へはねらるれば白は必ず(り)に粘がねばならぬ處であるから『ヨセ』勘定の場合に於ては白×印のはねは先手三目と見るべきである。ソコで黒が(七一)の一子を粘げば白は(ぬ)に突出してヨセて行けば勝敗は分らぬ碁になつて仕舞ふのである。然るに結局白が一目の負けとなつたのは遺憾の極みである。

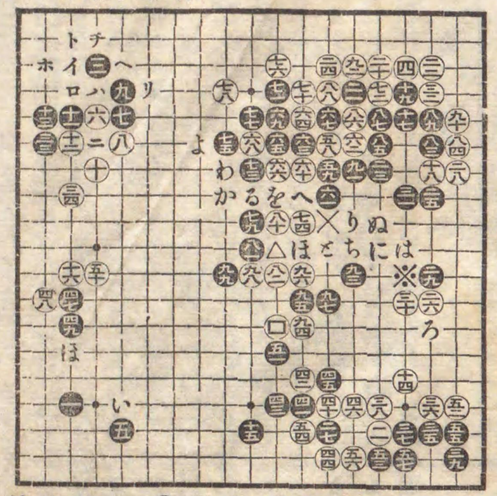


寶永の碁戰

名人五世 本因坊道智（二目勝）

名人四世 井上因碩（先番）

第一圖

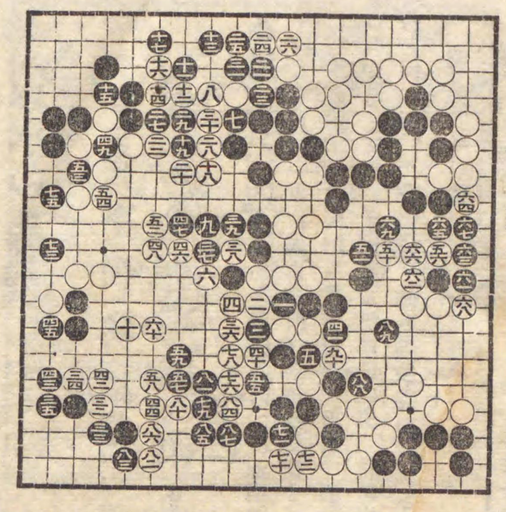


白(チ)の時黒(イ)つゞ

▲**黒、勝を逸す**　白(四)と打つは如何であらうか。斯く打つと碁が一方に偏して白は割合ひ負けする譯である。(五)に掛かるか(十一)に掛かるのが普通である。黒(五)と小桂馬に締つたからとて惡いと云ふことはないが、此の場合黒(三)との釣合を保つて(い)印に高く締る方が宜い。黒(十一)のつけは(五)の黒が(い)印に一間高締りの時であれば黒(十六)と打つ趣向もある。其の結果は白(イ)、黒(ロ)、白(ハ)、黒(十二)、白(ニ)、黒(ホ)、白(ヘ)、黒(ト)、白(チ)、黒(イ)につゞき、白(リ)となる。是れは黒が先づ隅で儲けて而して(三八)邊へつけて『シテウ』の當りを打つて嚴しく戰ふと云ふ手段である。黒(十五)は急ぐ處でない。最も(五)の黒が(い)に締つてあれば圖の如く打つ方が宜いけれども、(五)と低く締つてある時は白から詰めて來られても一向響かぬから黒(十五)の手で(十六)に打つ方が宜い。白(十六)は稍々狹きに失する。モウ一路進んで(四七)に打ちたい所である。黒(一九)は所謂趣向であるが先づ(八五)へ尖むのが普通である。其の時白(二一)に斜走すれば黒は(三一)に掛け白(八九)へつけ黒(二五)に約へ白(十九)へ突當り黒(ろ)に打つのである。或は黒(八五)へ尖む手で(三三)へつける手もあるが此の場合では面白くない。黒(二九)のつけは宜しくない。圖の如く(三〇)と延びられると隅が固まつて仕舞ふ、輕く(ぬ)へ飛ぶが普通であらう。次に黒が(三一)と引いたのは重い姿で(二九)へつけた以上は此場合矢張り輕く(に)へ斜走して居る方が宜い。白(二四)は辛抱し過ぎた、(ほ)へ詰めて居たい處である、白(十六)のはねは不可である。此の手で×印に押して居なければなるまい。然るに白(十六)へ跳ね黒(七七)に取つた時白(七八)に煽つたのは騎虎の勢ひ已むを得ぬのであらうが、コゝに嚴しい手がある。それは黒先づ(八七)に曲り白(八六)に突切つた時黒(八〇)とつける手である。(六〇)(六六)の二目を取られては最早や白に勝算がない。因つて白(へ)に粘ぐとすれば黒は先づ(九一)にあてる、白は(八八)に取る外なかるべく、ソコで黒(ほ)、白×印、黒(と)、白(り)、黒(ち)、白(ぬ)となつた時、黒※印に沿ふて白を擒にして仕舞ふ手段がある。其の時白(る)へはね出せば黒(を)に切り、白(わ)にあて、黒(六八)に粘ぎ、白(か)に粘いだ時黒は(よ)に延びて居る。ソコで白△印に切つた處が黒の二目は『シテウ』の當りがあるから取ることは出來ない。斯う云ふヒドイ手があるにも拘らず白が(七八)へ煽つたのは蓋し

(六〇)(六六)の二目を取られても負け、さりとて二目を助けて下の方を打たれる手順になつても負けと見たから二目を取られたら百年目と斯う度胸を据えて先づ(七六)にはね次で(七八)に煽つたのかも知れない。然るに黒は單に(七九)へ飛び白に(八〇)と竝ばれて勝を逸したのは遺憾の極みである。黒(五五)のつけは悪い。此の手で※印に押へて居なければならぬ處である。然るに黒(九五)とつけた爲めに白に(九六)と押され第二圖の如く白に(六)と跳ねられて模様を作る一方に黒が攻められる結果を來たしたのは不覺である。(第二圖)白(五八)の手にて先づ(六九)へ延びるが宜い、黒は何とか應手をせんければならぬ。ソコで白(五八)に延びるが宜い。左すれば第一圖に於ける黒(五九)の一子は北げることが出來ない。然るに白が(六九)の延びを打たなかつた爲めに終に(六一)と延び出されて取ることが出來なくなつた。要するに此の碁は黒の勝に歸すべき機會があつたのに、其の機を逸して遂に二目の敗となつたのは惜むべきである。

第二圖

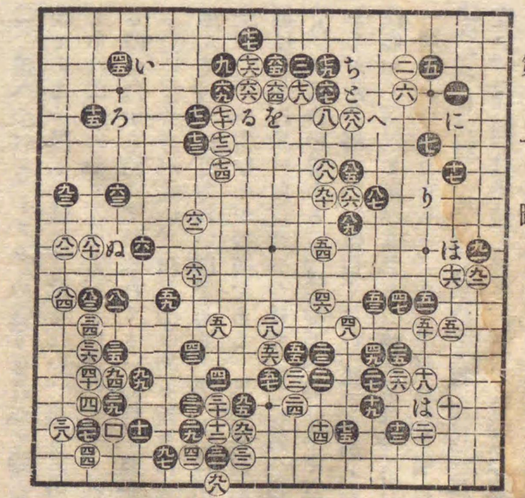


名人 本因坊道智（六目勝）
名人 井上因節（先番）
（寶永六年）

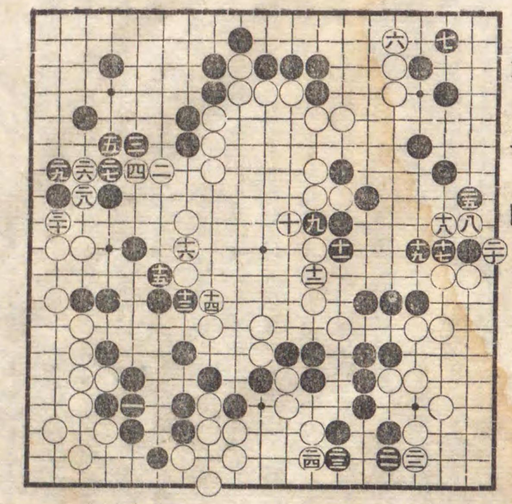
▲黒白の策戰

黒(三)と挾むも一策であるが、當今は黒(い)に打つのが普通になつて居る。白(四)は敢て悪いと云ふ程の事はないが、布石上縁が離れて居るのは面白くない。先づ左上隅(ろ)か(四五)に陣取るのが普通の形である。白(十)は如何であらうか、此の局面では(は)に打つ方が面白くはないか、左すれば黒が(十一)と掛つた時に二間若くは三間に挾む間合ひが好くなる。換言すれば圖の如く黒(十一)、白(十二)となるものとせんか、白(十三)は何處に打つが宜いかと云ふと(十)の處に非すして(は)の處である。黒(十五)も良い手であるが、此手で黒(五二)へ二間に挾み返し白(十八)に尖みたる時黒(ほ)へ開いて居る趣向もある。是れは白を一方に凝らせやうと云ふ戰略である。白(十六)は即ち自己の發展かたへ(に)の附越しを狙つたのであるが、其の時黒が(十七)と尖んだのは感心しない。黒先づ(へ)に掛け白(と)に應した時、古風であるが黒(五二)の肩を衝くも亦一策である。若し一手で(に)の附越しを凌ぐ積りなれば後手ではあるが黒先づ(ち)に一間飛ぶが宜い。白は(へ)に尖む外なかるべく其の時黒(り)に一間飛ぶのである。左すれば(二)以下の白を攻める場合に餘程強味がある。黒(十九)の尖みは時機尚ほ早し。此の場合黒(三四)に挾み返し、白(九四)に尖みたる時黒(ぬ)に陣して雄大の形勢を張り而して(十一)(十三)の黒は何れか一方を棄てゝ白を凝らして打つと云ふ方針を執るべきである。黒(二五)は面白くない。ドウも後手に甘んずる積りならば白が(三)とつけた時黒(三三)に延びずして單に(二六)へ尖みつけ白(二五)へはねた時黒(四九)へはねて居る方が形が好いではないか。白(二八)の煽り非なり。(十四)以下の白が薄弱の場合なれば圖の如く發展かた〳〵敵を攻むる意味に於て(二八)と斜走することもあるが(十三)以下の白が丈夫であるのに(二八)と煽るのは感心しない。此の場合は白㊀に尖みつけるが宜い。黒(三三)は敵の鐵壁に沿ふた形で一向響かない。因つて此の手で黒(八一)に打ち而して白㊀に尖みつけた時黒(九四)の肩に打つ趣向が面白からう。或は白㊀に尖みつけずして(九四)へ尖まんには黒は(四四)へ斜走して敵の根據を奪ふが宜い。黒(五五)へ出で、而して(五七)と切つたのは蓋し(十三)以下の黒の用心に備へたのであらうけれども、殆ど〻ダメを切つた姿である。之に反して白の形勢を見ると大分模様が厚くなつて來たから之を利用して(十三)以下の黒を攻めつゝ自然に地を作られる結果を生ずる。故に黒は(五五)の手で白の模様を消しながら自己の領域を擴げる趣向で(る)へ斜走するが宜からう。此の場合(を)に斜走するは面白くない。黒(六一)の趣向は感服しない。(十一)以下の黒は決して死ぬ氣遣ひはないから今度は(る)に斜走せずして單に(七)へ飛んで模様を消すべきである。黒(六三)の時も矢張り(七〇)へ飛ぶ方が宜いのである。然るに圖の如くなつては最早や恢復の道がない。

第一圖



第二圖



名人五世本因坊道知

道知本姓神谷氏江戸の人なり、父を十郎右衛門と云ひ母は大野氏世々本郷元町に住し御小人目付小頭役を勤む。道知性溫和にして沈毅、八歳甫めて碁に志し、十歳道策の門に入り、元祿十五年十三歳にして師家の箕裘を襲ひ五世本因坊となる。道知の始めて坊門に入るや道策一見池中のものに非ざるを知り深く鍾愛し常に左右を放たず敎授せり。是れ道策の意、道的、策元夭折し未だ跡目なきに依り道知を跡目に擬し只管碁品と年齢の進むを待てるなり。然るに人生の測る可からざる事浮雲朝露の譬喩に漏れず、道策齡耳順に達せず遽に歿するに臨み、道知を以て本因坊跡目と內定し高弟井上因碩（道節）を後見とせり。因碩遺命を奉じ專心道知の薰育に從ひしに道策の先見違はず、道知の碁品秀拔にして進步の速なる因碩も驚く許りなり。元祿十六年十一月二十日始めて御城碁を勤め安井仙角（四世）に對し定先（四段格）五目の勝を得たり。因碩之れを見て一層督勵の效空しからず碁品亦頗る進みたるを見今は仙角と互先六段となすも遜色なしと信じ書を仙角に送り今年の御城碁には道知互先たらん事を申し込みたりしに仙角之に應ぜず爭碁となりて寶永二年の御城碁より翌年に亘り道知先互先の手合三局を連勝し遂に仙角より願下を爲し事濟となれり道知十七歳の時道策の弟子にして先互先位の手合を定先となし之を試るに一局として敗を取りたる事なし茲に於て多くの門下は益々道策の識見と道知の技倆の超凡に心服せざるはなし。此歳寶永三年道知は後見因碩と定先十番の對局をなし正月より三月十五日に亘り終局せり。此勝負因碩六番勝、道知三番勝、一番芾あり、井上四世因碩歿後道知は始めて享保六年六月五日三十二歳を以て碁所となれり。

同十二日月番牧野因幡守より知伯の親類書を差出すべき旨注意を受け直ちに提出して同十八日跡目願聽濟となる。

同十二年二月四日京都より道悅死去の飛報來りしかば道知は其旨黑田豐後守に屆出づ。

同六月十八日晝八ッ時道知突然急病起り遂に逝く。依つて因碩朴入、長谷川知山等協議を遂げ翌十一日正午知仙は跡目知伯の代理人として月番寺社奉行小出信濃守役宅に出頭、本因坊道知死亡の屆けを差出せり。役人原九郎右衛門知仙を呼びて本因坊末期の書付遺しあるべく、入用に付取調べの上明五ッ時迄に差出すべしとの沙汰あり、翌日之を持參し始めて跡目知伯家督を許可せらる。道知享年三十八歳法諡を日深杲位と云ふ、本妙寺に葬る。道知は碁聖道策の先見に違はず其の進步の迅速なる其奧秘に精通せる古來多く比を見ざる所にして當時苟しくも道知の敵手たるべきもの三家の外に求むることを得ず、而も三家中にも亦道知に對し定先を支ふるものなかりしは明白の事實なりし。然れば古人道知を評して一生中全力を傾注して對局せしものは甚だ稀なるべしと蓋し空言に非ず寔に亞聖の大國手と謂つべきなり。

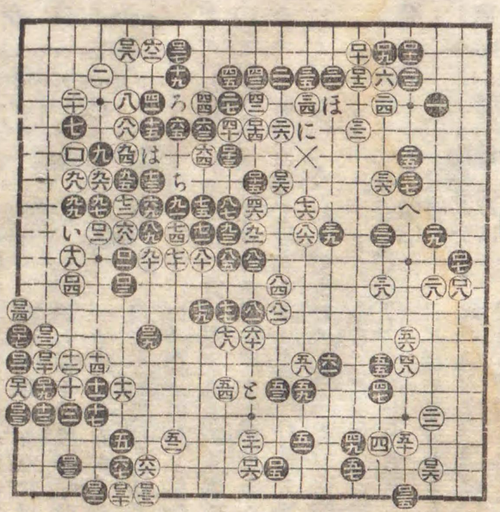
御城碁

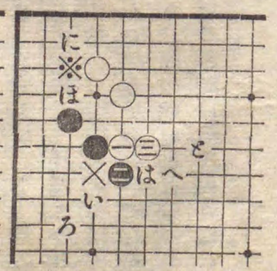
准名人　五世　安井仙角

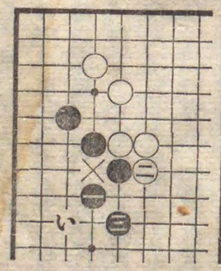
六段（先）六世　本因坊知伯　芾

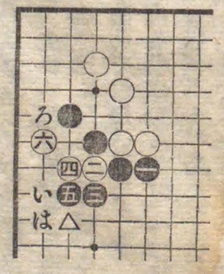
（享保十二年十一月十七日於御城御前）

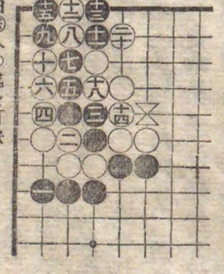
▲白（九四）つけの變化











白（八）の尖みはヌルイ、（い）に三間夾みをするのが普通である。黑（九）の尖みは秀甫以前までは相尖みと稱して流行したけれども割合ひが惡いので當今では殆ど打つ者がない。白（十）は所謂趣向であらうが、コヽには種々の手段がある。（ロ四）に割打をする手段もあり、又（九四）に著ける策もある。參考の爲め白（九四）に著ける結果はドウなるかと云ふと、是れにも種々の變化がある。即ち甲圖の如く白（三）と伸びた時、黑に於ては（い）に掛粘ぐ手（ろ）に斜走する手（は）に押す手と三通りある。假に黑（い）に掛粘ぐとせんか、乙圖の如くなるのが普通である。若し黑が（三）の手を拔くと白から（三）の處へ懸けられるから圖の如く打つべきである。第二黑（一）（乙圖）に掛粘がずして（い）に斜走すれば白は手を拔いて他に轉ずるか、或は（三）へ曲るかである。第三、黑乙圖の如く（一）にも掛粘がず（い）にも斜走せずして（三）と押さば如何。白は×印を切るべく其結果丙圖の如く白（六）へ尖む手順になる。左すれば黑は（い）に下るか、（ろ）に押へる外はない。ソコで黑若し（ろ）に押ふれば白（い）、黑（は）、白△印の切りとなる。左すれば黑は上下何れか二子を取られて脫けられて仕舞ふ。左りとて黑（ろ）に押へずして（い）に下れば丁圖の如く隅の黑は全部擒にされて仕舞ふ。因つて黑は丁圖の如く（一）にも下らず又丙圖の如く

第一圖

甲圖

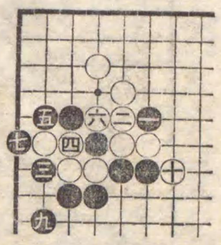
乙圖

丙圖

丁圖

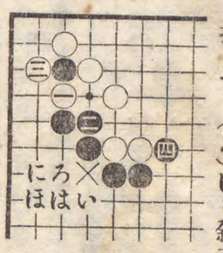
白（六）八の處を打缺く
黑（七）十二に一子を取る
黑（九）五目つぐ

戊圖 白(八)つゞ

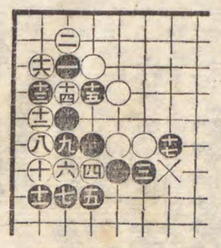


(ろ)にも押へずして☒印に奇手を弄した碁もあつた。其の結果は戊圖の如く、黒が絞つて亘つたのは一寸巧者なやうであるけれども、白に(十)と跳ねられては黒の方が惡い。斯くの如く何れに變化しても此の一局部丈けでは黒の方が損であるから大抵の場合、丙圖のやうに黒(一)と押す手は考慮を要するのである。尙ほ變化がある。甲圖に戻りて說明せんに、黒(い)にも掛粘がす、(は)にも押さず、(ろ)にも斜走せずして、先づ※印へつける手もある。ソコで白(に)へ跳ねた時黒(は)に押すのである。其の時白には二樣の手段がある。一は(ほ)に跳ね込む手、二は(へ)に跳ねる手である。假に白(へ)に跳ねるとせんか、黒(ほ)に粘ぎ白(と)の掛粘ぎとなるのが普通であるが、白(へ)に跳ねずして(ほ)へ跳ね込めば則ち癸圖の如くなる。ソコで白若し×印を切らば黒は(い)に跳ね、白(ろ)、黒(は)、白(に)、黒(ほ)と押切り三目を棄て先手を取るべきである。モ一ッ變化がある。夫れは庚圖の如く打つのである。斯うなつたらば黒は六目を棄てる方針で打つが宜い、併し劫の味が殘つて居るから白は中々旨く取切ることが出來ないと云ふのは黒(一)と白(三)の交換あるに拘らず、白が强引に(四)と切つたからである。白(四)の切りは考慮を要するのである。

癸圖



庚圖



前に言つた通り白(十四)へ跳ね込むか×印へ跳ねべきである。扨て黒(十五)の懸けは蓋し今說明した通り(九四)の著けを嫌つて先づ斯く懸け白が(ろ)に應じた時黒(十八)に詰めやうと云ふ心算であらう、然るに白に手を拔かれて、(十六)へ跳ねられたのは止むを得ないが、(十八)に開かれたのは黒の不利である。故に黒は單に(十八)に詰めて居るが宜い。其の時白先づ(十六)に跳ね、黒(十七に)粘ぎ白轉じて(九四)に著ければ黒(九五)に跳ね白(は)に伸びた時黒(二一)に夾む趣向もあるから差支ないのである。黒(二七)は感心しない。或は(に)印へつける手段がないでもないが、夫れは此の場合では面白くないから黒は單に(三三)に掛け、白(ほ)に飛んだ時(四一)に押へて(八八)の出切りと(四五)の打込を防いで居たい處である。黒(二九)へ詰める手で先づ(三一)に飛び白(三三)に尖んた時(へ)に一間飛んで居る手もある。邊側の方は損であるが斯く打方が(六)以下の白に嚴しくコタへるのである。黒(三九)は如何あらうか、先づ此手で一ッ×印に打つて白の應手を試みてる方が面白からう。然るに黒單に(三九)に飛び白(四十)以下(四六)に飛ばれるに至つては大分働かれた姿である。白(五二)と堅い方へ詰めたのは面白くない、單に(と)に一間飛んで居る方が輕くもあり、右邊の黒に對する響きも强い。白(八八)の突出しは旨い手だ。黒(九四)に押へれば白(九一)に突出さうと云ふ趣向で、其の時黒(□十三)に切れば白は(ち)へ突出して兩斷して仕舞ふソコで黒は止むを得ず(八九)に突出し(九一)に粘いで振變る趣向に打つたのであらう、此處では大分損をしたやうであるが併し先手を取つて右上隅に於ける黒(七)の尖みと(九)の跳ね粘ぎを打ち尙ほ其他の先手廻りをして芇(ヂコ)に打上げた手腕は敬服の外はない。

六世伯元の出世碁

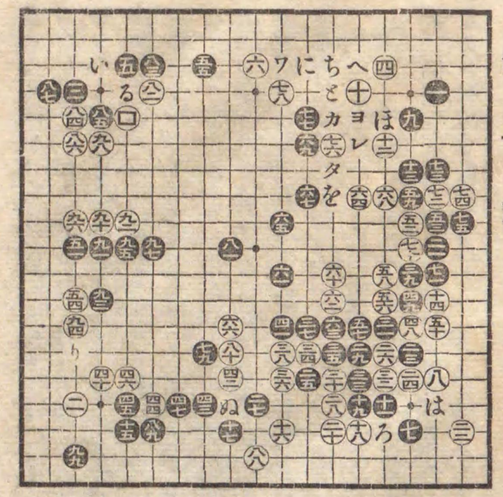
准名人 六世 井上因碩

六段 八世 本因坊伯元（三目勝）

（寶曆元未年十一月十七日於御城）

▲伯元の出世碁　白(三)は一向響きのない著子である。謂はゞ敵が北地を占領するならば我れは南地に據ると云ふ一向敵對行爲のない打方である。普通(い)か右下隅方面に打つべきである。黒(七)はヌルイ、此の場合(ろ)の目はづしが配置上の最要處である。若夫れ黒が(ろ)に據つて居らんには白は(は)に懸かることは出來ないのである。ナゼかと云ふに(は)の白が若し右側面へ開くか(一)の黒を夾むかすれば忽ち(二四)に懸けられて位を低くされて仕舞ふ。換言すれば(ろ)の黒は(は)の白を牽制して(一)の黒を攻むることの出來ぬやう暗に働いて居るのである。然らば白(二四)へ懸かれば宜いではないかと謂はんか、左すれば黒に(は)に打たれて右下隅を占領さるゝ損あるを如何にせん。然るに策茲に出でずして圖の如く黒(七)と打ち白に(八)と懸からるゝは黒の不利である。抑も此の(八)の白は右側面に發展し得る好地位に在り從つて(一)の黒が攻めらるゝ位地に陷るのである。白(十)は所謂相尖みで最早や今日に於ては廢れて仕舞つた。其の譯は假令ひ黒が(に)へ打込で來た所が白は(ほ)に著けて打つ趣向もあり、又黒(に)へ打込まずして(十)へ懸けて來れば白(へ)に匐ひ、黒(と)白(ち)と飽くまで匐つて差支ないのである。故に白は(十)の手で普通の如く(五三)に開くべきである。其他趣向に由つては一路控へてモクシタ或は三間乃至(十八)へ夾む場合もある。黒(十一)はヌルイ。ナゼかと云ふに斯くて黒(二三)に懸けても(五十)に飛んで逃げられて仕舞ふし、又(七一)へ三間に夾んでも白に如何やうにも應手の仕方があるのみならず、黒が(十一)と尖む前に(七一)へ二間に夾みたりとせよ、黒はヨモヤ(十一)に尖みはすまじ、必ず(は)へ尖みつけるであらう。然るに圖の如く打ちしは詰り黒は後手で(十一)と尖んだ譯になる。斯う打つ位ならば最初黒(七)の手で(ろ)に打ち白(は)に懸つた時(十六)へ三間に開いて居る方がマダ利益である。白(十六)は三間に夾むのが普通である、圖の如く打つも亦趣向である。黒(二一)と堅い處へ詰めて行くのはイカヌ、白の構へが低いから詰めて見た所で一向徹(とた)へぬではないか、此の場合左側(り)へ一間に夾擊すべきである、或は(九四)へ二間に

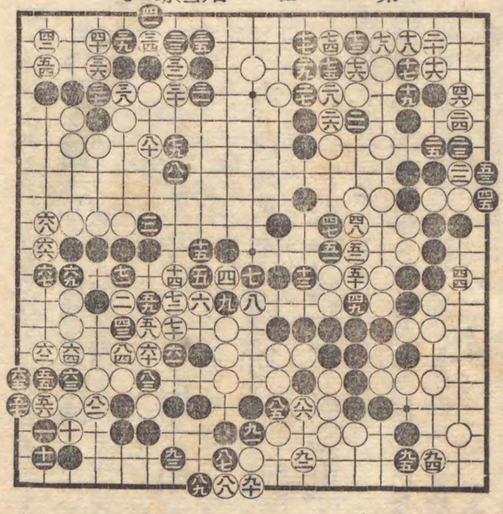
第一圖



夾んでも宜い。白(三六)は一考を要する、此の手で(ぬ)に著ける方が宜い。然るに圖の如く打つて白(三四)へハ子出す手順になつては聊か筋違ひの形である。黒(三九)は急いで打つに及ばぬ處である、(四一)に押して居る方が嚴しい。黒(五五)は(る)に一間高に締つて居る時ならば宜いが、低く小桂馬締りでは餘り狹過ぎはせぬか。此の場合(五七)に飛んで居る方が宜い。白(六四)と堅い方へ接近するは如何あらうか(を)へ二間に飛ぶ方が穩かである。黒(七七)は如何にも働きのない手である、先づ此手で(七八)の肩を衝き白(ワ)、黒(カ)、白(ヨ)、黒(タ)、白(レ)黒(に)へハ子て打つ方が働きであらう。

▲第二圖　黒(三五)は單に(四五)へハ子て三目を取る方が宜い、次に黒(三一)は單に(三三)に粘いで隅地を全うして白二目を助ける方が利益であらう。

第二圖　白(三)劫とる



▲關山仙太夫曰　黒打方大に面白し伯元此碁により六段になりしと聞く。

六世本因坊知伯略傳

享保七年四月知伯十三歳にして月番寺社奉行牧野因幡守に跡目願を差出し同六月大久保佐渡守役宅に於て閣屈の旨言渡さる。同十一年十二月より十人扶持を受け翌年六月十八歳の時道知の死去に依り同九月四日家督を相續して六世となる。此歳十一月十七日碁級六段を以て御城碁を勤む。

享保十八癸巳年八月二十日薄暮知伯卒倒す、家族大に驚き醫師正伯及び各碁院に急報したるも來集に先ちて瞑目せり、茲に於て仙角、因碩、門人及醫師正伯代理丹羽正因協議の上知伯の門人佐藤秀伯を以て家督と定めて願書を認め即時因碩をして月番寺社奉行松平玄蕃頭に差出し許可を得たり、知伯享年二十四歳、法名を日了呆位と云ふ、本妙寺に葬る。

五世安井仙角略傳

仙角は近江の人、父を小路權太夫と云ふ初め田中春哲と稱し後仙角と改む、古仙角門下にして手合准名人なり。

仙角は長谷川知仙の歿後古仙角の再跡目を襲いで安井家五世となり明和九辰年十一月十七日の御城碁に於て初めて門下より阪口仙徳を分家として推選し許可を得たり仙徳は碁品六段にして其の御城碁に列するを得たるは道策時代の八代の例に依るものなりしと云ふ、蓋し外家の御城碁に列するは稀なるを以てなり。

仙角安永四年(烈元時代)家を原仙哲に讓り元丈の世寛政元酉年十二月十六日老歿す行年七十九歳、法名を高石院仙角日慰信士と云ふ江戸深川淨心寺に葬る。

棋界に於ける

戰國時代の爭碁

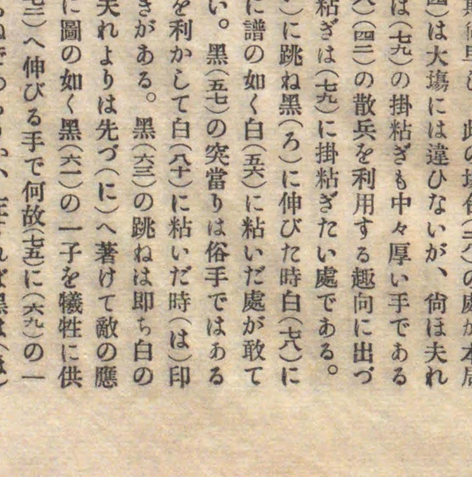
九世八段　本因坊察元
六世八段　井上因碩　共

（明和三戊年十一月十七日於御城）

古來本因坊察元と六世因碩の時代くらゐ縺れたことはない。本局は御城に於ける**兩雄必死の爭碁**十局中の第一局である。

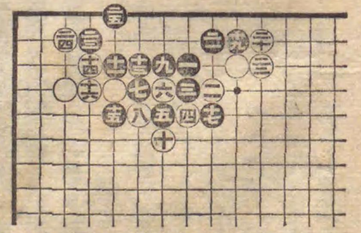
▲黒㊄の惡手と白の兩締り

爭碁（第一圖）　白(六)劫とる　黒(四)同



黒(五)と圖の如く白(四)と同地位に陣取り爲めに白に(六)と掛らるゝに至つては黒の不利や大なりである此の場合最上の打場は(六)の處か(十三)の處と知るべきである。白(八)は毎度言ふ通り相尖みと云つて昔時は專ら流行した定跡であるが、何分にも白の方が損であると云ふことが明白になつたので、最早や今日では殆ど打つ者がないと云つて宜い。黒㊈と割打をしたのは宜しくない。此の場合黒(三三)へつけ(十四)へ跳ねた時黒(十九)に伸びるも定跡であるが、

甲圖　白(三)劫とる　白(八)却をつぐ

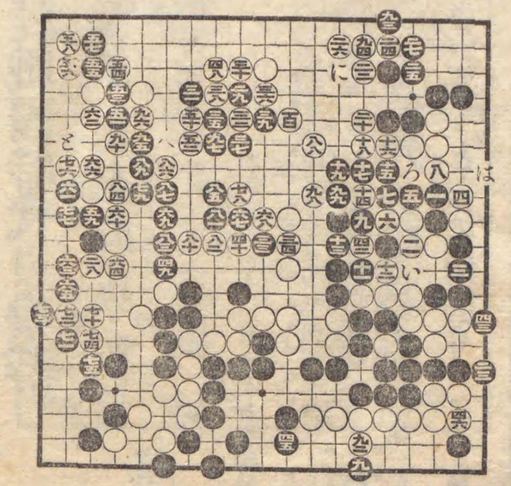


併し夫れよりは(三九)へ一間高に掛るか左なくば(十三)へ這入るが宜い。然るに黒㊈と割打をした爲めに先づ白に㊉と締られ、黒㊊に開いた時白に㊋と兩締りの機會を與へたのは黒の不利益である。黒㊋時期尚早し、此の場合(三八)の處が本局唯一の好點である。白(五四)は大場には違ひないが、尚ほ夫れより急なる處がある。或は(七九)の掛粘ぎも中々厚い手であるが、先づ(七八)に詰めて(十八)(四二)の散兵を利用する趣向に出づる方が宜い。又白(五六)の粘ぎは(七六)に掛粘ぎたい處である。黒若し(五八)を切らば白(い)に跳ね黒(ろ)に伸びた時白(七八)に詰める手段もある。然るに譜の如く白(五六)に粘いだ處が敢て右邊が地になる譯でもない。黒(五七)の突當りは俗手ではあるまいか、寧ろ(七九)の覗きを利かして白(八十)に粘いだ時(は)印に(二八)の肩を衝く方が趣きがある。黒(六三)の跳ねは即ち白の趣向に乘つた手である。夫れよりは先づ(に)へ著けて敵の應手を試みるが宜い。然るに圖の如く黒(六一)の一子を犧牲に供したのは面白くない。白(七二)へ伸びる手で何故(五九)に(六九)の一子を『してう』に懸けて取らぬであらうか、左すれば黒は(ほ)

に伸びる外なかるべく、白(七二)に押し、黒(九二)に突當つた時白(九三)に一ツ覗きを利かせ然る後白(七八)へ詰めて居る方が優勢ではないか、斯く謂はゞ或は言はん、左すれば『してう』の當りを打たるゝ不利があるではないかと、夫れは遠い話でソンナ取越し苦勞をすべき塲合でない。縱しんば後に黒が『してう』の當りを打つた時に手を拔くことが出來ずば應手をするも可なり。ソコで黒が『してう』の當りを利用して(六九)の一子を遁げ出したらば白は×印に懸けて絞つて而して復た先手を取る手段があるではないか、故に遠い後の『してう』の當り抔を氣遣ふに及ばぬと云ふのである。黒(八一)の跳ね出しは時期尙ほ早し。ナゼかと云ふに白からは何とも打ちやうの無い處であるから棄てゝ置いても一向差支ない。此の塲合※印に打込むべきである。然らば白は(へ)に尖むか(と)に尖む外ないのである白若し(へ)に尖まば黒は(ち)に飛出すべく又白(と)に尖まば黒は甲圖の如く活きて仕舞ふ。是は常用の手であるから初心者は能く覺えて置く必要がある。

爭碁(第二圖)

黒(四)劫とる
白(四)同
黒(四)同



▲第二圖 黒(四)の跳ねを逸す　白(六)へ曲る手で(七)に跳ねる手段もある。黒は無論(い)に跳ね込むべく白(ろ)に當てゝ三目を擒にし黒(十二)に粘いだ時白左側に轉じて(二八)に一子を抱へ込んではドウか、蓋し第一圖(六)以下即ち中央の白は未だ全く眼形を備ふるに至らず且つ黒三子を擒にした所で(は)に辷り込まれて眼を取られる恐れもあるから、譜の如く用心したのであらうけれども、双方共にマサカに死ぬ氣遣ひもあるまいとすれば今言ふた通り打つも亦た一策であらう。黒(二三)の下りは宜しくない。矢張り(九四)に跳ねべき所である。左すれば白は(四二)に刧を取るであらう。其時黒(四三)へ跳ねなば詰り白は手が戻つて(に)へ伸びて居ずばなるまい。ソコで黒が(二三)に下るのが手順で、(九四)に跳ねを利かした丈け得な譯ではあるまいか。然るに譜の如く白より反對に(二四)へ跳ねられ次いで(二六)に懸粘がれて儲けながら其の備へを丈夫にされた上に先手で(二八)の要處へ跳ねられたのは非常に黒の不利である。黒(四九)の跳ねはヌルイ。此の塲合黒(へ)に斜走して幾分白の摸樣を消しながら暗に中央の白を狙ふべきである。黒(七一)は先づ(七六)に押し白が(と)に押へた時黒(七二)にモウ一本押して居れば(八四)の切りが出來る丈け利益である。

寛政の碁戰

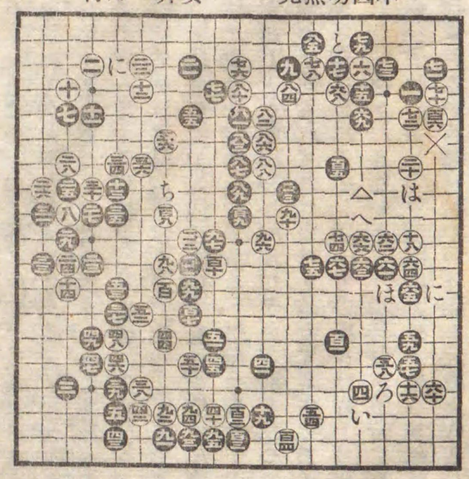
十世本因坊烈元(當時七段)

九目勝安井知得(當時六段)

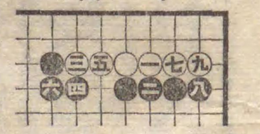
(寛政十一年五月二十五日)

▲白の敗因　黒(五)に締るよりは(五)の處へ締る方が結局打ち易い。ソコで白(五)の處へ掛つたらば黒は(四)に三間夾みをすべきである。何故に爾う云ふ陣取をするが宜いかと云ふに、三間に夾まれると白(四)の位地がマヅクなるからである。若し此(四)が(十六)の處に在れば則ち(い)に締ると云ふ好點がある、又星即ち(ろ)に在つても(二四)に締ると云ふ鈎合ひの好い手があるけれども譜の如く(四)に位ゐして居ては(十九)に詰める手は誠に狹い。言葉を換へて言へばマア詰める手がないと云つても宜い。だから黒(五)に締るよりは(五)に締る方が戰略上得策であると云ふのである。併し(五)と締つたからとて惡いと云ふ程のこともない。黒(五)のつけの時白(十六)に締るのは普通の陣立であるけれども此處には色々手段がある。假に右上隅に於ける一子の始末をする必要ありとせば則ち甲圖の如く隅地を占領して打つ手段もあり、又乙圖の如く白(一)と跳ね出して打つ趣向もある。其の幾變化は『手ぬきの卷』に詳しく說明してある。但し此の塲合甲乙二圖の如く打つが宜いと云ふのではない。夫れは當局者の趣向に在る事で玆で斯う打つのが宜いと斷定する譯にはイカない。唯參考までに一隅の成行を示すに過ぎない。黒(九)も好い處であるが。此の塲合に於ては(十八)に對し(は)に詰めるも亦た一ツの趣向で、誠に恰好な手である。其時白が(四)邊に打てば黒は(六)に逆擊を加ふべきである。黒(二)は一方の自分の備へが堅い處であるから聊か狹きに失する嫌ひがある。而已ならず(に)へ附越しのある處だから、譜の如く打つて其の附越しの缺陷を癒やして了ふのは惜い。此の塲合は黒先づ(六)の肩を衝くが宜い。其の時白(六)に押せば黒(六)、白(に)黒(六)の曲りとなるべく、又白(六)に押さずして(六)に押へなば黒(ほ)、白(へ)、黒(五)の飛びとなるのが普通である。然るに黒が敢て(二)に詰めたのは其後の成行から考ふるに譜の如く(三)までの運びをして振變らうと云ふ手段であつたことを知られる。斯うなつて見れば(二)の黒は大分働いた譯である。實は此塲合は(六)に跳ねて振變りの手段に出でずして尋常に(九)に粘いで黒の趣向を挫く方が宜か

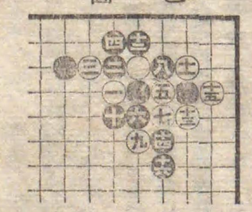
本因坊烈元　安井知得



甲圖



乙圖



つた。然るに白が圖の如く振變つた爲めに後に㊆の飛びを利かせられて㊇と圍はねばならぬ破目になつたのは全く黒の術中に陷り㊁の黒をして名を成さしめた所以である。白㊂は一ト先つ㊄へ跳ぬ込み黒が(と)に伸びた時㊂へハネて居る方が宜い。左すれば㊂、㊆二子の處がダメ詰りになる關係から『ヨセ』の場合に黒が×印に置いても旨い儲けが出來ぬと云ふ牽制的の働きを生ずるのである。黒㊈は即ち(ち)の附越しと㊂の附越しとを兩天秤に睨んだ手で、斯うなつては勢ひ㊆の一子を掻き取られて碁は負けと確定するのであるから白㊈に粘ぐ手で㊂に孕れて居れば一方の凌ぎは附くけれども爾うすると×印に置かれる筋がある。其時白が强情に㊈に粘ぐと黒は㊇の一子を利用して(△)印に尖む手やら其他色々上のアヤで趣向されるから㊈に粘ぐのは頗る危險で㊂の一子を棄てる外なしとすれば矢張り碁は白の負けである。要するに白の敗因は黒の術中に陷り㊄へ跳ねて振變つたからで而して結局㊁㊇と二ツ利かされる結果を生ずるに至り遂に之を挽回する能はずして九目の敗となつたのである。

十世八段 本因坊烈元畧傳

十世八段本因坊烈元は幕府數寄屋方組頭山本氏の男なり。

烈元幼より察元の嬉陶を受け、二十一歳の時棋品秀逸を以て跡目に拔擢せられ丈で天明八年一月二十三日師察元死去に因り翌二十四日土井大炊守より家督屆けの旨を達せらる。

烈元時代は方さに圍棋漸進の秋にして上下競ひて之を玩べり。就中高門顯家には井上家の門に京極周防守あり、安井家に仙石大和守、吉田土佐守等あり、皆な是れ段以上の棋なり。他松平、黒田、細川、戸田、堀田等の諸家は累世斯道に緣故深く、又中防河内守、小笠原若狹守、舟越駿河守、駒井但馬守、本庄甲斐守、本多伊豫守等は皆な是れ嗜好家にして各〻定日を設けて棋生を集む。其他諸侯旗下にして此の道に遊ぶるの枚擧に遑あらず。又當時此等の權家に招聘せられ名聲を擅にせる者は本因坊烈元、安井仙角を主として井上因碩、林門悅あり其門下には坊門に伊藏周助、永谷琢元。同琢順あり安井家に鈴木順清、同和清、石原是由あり。其他林寒入、河野元虎(六段)若山立寛、片山知的、服部因悅、青木元悅皆な之れ一世の俊傑なり。又將來の重鎭を以て目せられたる者には宮重樂山、中野知得、奥貫知策、林鐵元及び因碩跡目春策等あり。後年丈和の世に至り圍棋隆盛の絶頂に達したるは總て此等の士の漸次頭角を顯はし來りしに外ならざるなり。

寛政十午年七月二十日烈元は宮重樂山を以て跡目とせんと欲し之を月番の奉行松平右京亮に願出で同年八月二十七日聞屆の旨松平周防守より達せらる。翌九月朔日樂山始めて登城、向書院に於て扇子獻上、名披露の式と共に御目見仰付られ同年十月評定を得て元丈と改む。此年二月烈元、仙角と共に八段に進む

文化五辰年十月二十七日烈元病氣により隱居せんと欲し元丈を家督たらしむるの願書を認め元丈をして林門悅と共に松平右京亮に差出さしめしが其の未た許可に至らざるに同年十二月三日病革まりて俄に死す享年五十九歳法名を日實果住と云ふ本妙寺に葬る。然るに井上、安井、林三家は協議の上烈元の死を秘して發せず翌年御目見前三月二十九日に至り初めて井上因碩自ら松平右京亮役宅に至り烈元死去の屆を爲せりとなり。

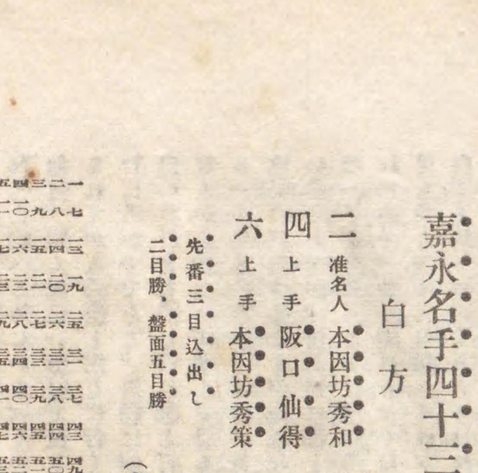
嘉永名手四十三段の連碁

白方　黒方

二 准名人 本因坊秀和　一 上手 安井算知
四 上手 阪口仙得　三 上手 伊藤松和
六 上手 本因坊秀策　五 上手 太田雄藏

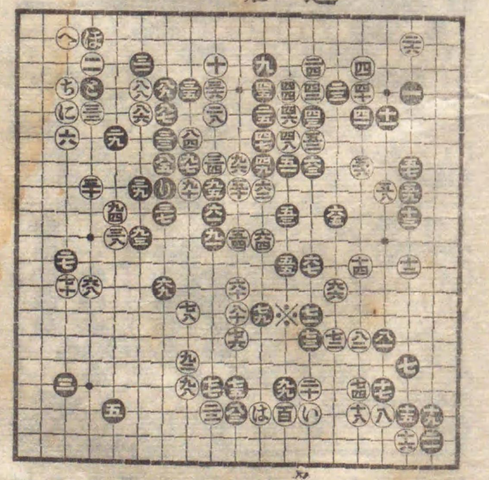
先番三目込出し
二目勝、盤面五目勝

（嘉永五壬子年二月十二日）



仙和知　仙得和松　仙藏雄　秀策　仙和知　仙得和松　仙藏雄　秀策

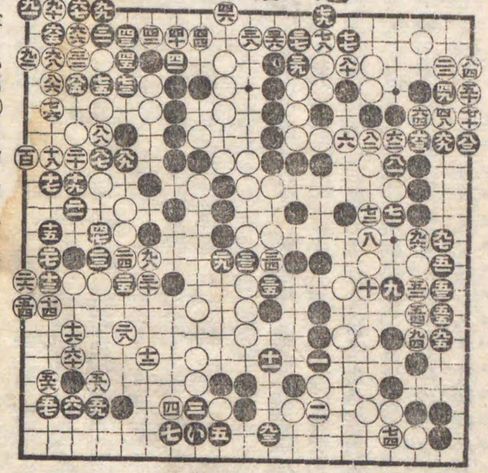
連碁（第一圖）



▲第一圖 連碁の苦心慘憺

黒㊄は太田雄藏さんの手か、勿論斯う締つたからとて決して惡いことはないが、右下城の明隅即ち㊅か㊆に陣取るも亦上策である。白㊅の締りは秀策さんだナ。是れは所謂趣向の手で、往々斯うやる事もあるが、右下城の明隅へ打つ手段もある。夫れはドコと云つて指定することは出來ない。此處にはいろ〳〵趣向のある處で、ドコへ打つても惡いとは謂はれない。㊆の頂は松和さんか、是れ又一策であるが黒㊀に夾み返へし白㊆に尖みたるとき黒㊇に高く備へて打つ手段もある。但し黒㊄の締りが㊂に在る時は㊆へ二間に引いて居るのが通形で、洵に恰好な姿である。詳言すれば白㊆の時黒㊇に詰め而して白をして㊆に飛ばしめて、此の交換に於て得をして居るのであるから、今言ふた通り黒㊀に夾み返へせば白は勢ひ㊆に尖まざるを得ない。とすれば黒㊇と㊀即ち双方から利手を打つて敵に應手を餘儀なくせしむる丈け利益を重ぬる譯である。黒㊁の曲りは松和さん、松和さんは嘉永の棋家中、名垂たる名手であるが㊁の曲りは多少ヌルイ氣味がありはせぬか。尤も白に㊁に約へられると黒は多少攻められ氣味にならぬでもない。且つ黒㊇と白㊆の交換に於て既に幾分の利益を得たる一方に㊅に詰めて白を窘めると云ふ狙ひあるので、斯く打つたのであらうけれども兎に角黒㊁と白㊂の交換は決して割合ひが好いとは謂はれない。黒㊇も松和さん。是れ又大場で頗る好い處ではあるが、併し黒㊇の飛びは左邊の白模樣を消さうと云ふ趣向

連碁（第二圖）

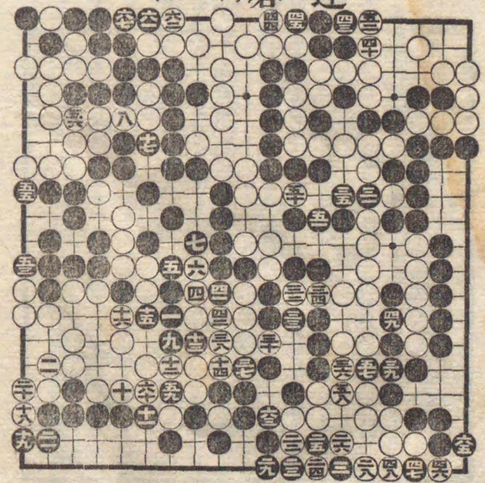


で、此の飛びあるが爲めに、白㊁と㊉との間が大分手薄になつて來た、此の機に乘じて黒㊂の手で㊂に打込むも亦た面白い手段である。ソコで白㊄に飛び出さんか、黒㊂に迫るべく、白㊀に約へなば裏手に廻つてほの脚下に殺到せよ、白㊇に約へる外なかるべく、黒㊈、白㊉の時黒㊇に飛びては如何。頗る面白い形勢ではないか。然るに白に一手㊄と用心されてから黒㊄と消しに行く位ならば寧ろ始めから㊂に打込むに若かずである。黒㊂は仙知さんか、極めて輕い手で、面白いけれども併し白に㊄と打たれては左右共に薄弱の姿勢になるからりに一間飛んで居る方が堅實ではあるまいか、其代り一歩出足の遲れる嫌ひがある。孰れも一得一失、其善惡は容易に判斷することが出來ない。白㊉は仙得さんで隨分大きい手であるが、併し黒に㊂と飛出された結果、㊇となつて㊂の一子を生擒（いけど）らるゝに至つては㊂の黒を取込んだ賠償を取られた姿で、餘り儲けもなくなつた譯である。故に白㊉の手で兎も角も※印に包圍してはドンナものか、何か考へがあつて白㊉と約へたのであらうけれどもドウも包んで置きたい處である。白㊇は流石に秀策さん丈けあッて洵に面白い手筋である。黒は一寸挨拶に困る。

▲第二圖 敗着の原因は白㊉

黒㊇は仙得さんで餘り大事を取り過ぎた嫌ひがある。若し左邊に㊉へ跳ねられて刼になると思へば碁が危いと氣が附く筈であるから大事を取つて㊇と聯絡して居る譯には行かない。因つて白㊇の手で㊉に覗いて切る味を含んでいに當てるのは隨分大きい手であるから兎に角さうやつて樣子を見る方が面白からう思ふ。白㊉も亦た仙得さんで此手は慥に敗着の原因であつた。單に損得の上から云つても㊉に打つよりは㊇に打つ方が遙に利益である。況して刼の味があるのだから尙更ら㊇に打つて黒㊉㊄と刼に打つ趣向を豫防せねばならぬ。左すれば三目のコミがあるから決して負ける氣遣ひはない。然るに白㊉と閑手を打ち爲めに㊉へ跳ねらるゝに至つては勝負は判らない。白㊂は流石に秀和さんで、是れは餘程考へた手だ。損得から云つても大きい許りではない。是れある以上は刼種が豊富になるから黒も悠々として居る譯に行かず刼爭ひを防いだのであらう。㊄は仙得さん、此頂け引きの活きは妙手だ。此處に斯う云ふ巧妙の活きがあるから猶更ら㊉の手で㊇に打つべきであるのに之を失したのは惜むべきであつた。併し白㊄の頂けは妙とは云ふものゝ黒に㊂と頂けられた時㊇に約へることが出來ずして㊂に忍んで㊄の頂け引きを保護せねばならぬ苦心は察せざるを得ない。是れでは白は颯ぱり儲かつて居らない。要するに黒に㊉と跳ねられて白の勢力範圍内に於て活きられた以上は最早や白に勝味はないのである。

連碁（第三圖）



われひとり得する事をねがひなば
やがて思はぬ損をまねかん。
敵石の中をへだつる我いしは
ひとつたりとも大切にせよ。
石すてゝあとの味ひよろしきは
眼に見ぬ得のあるものとしれ。

文化

雙龍爭珠

文化三寅年十一月十七日於御城

十一世本因坊元丈

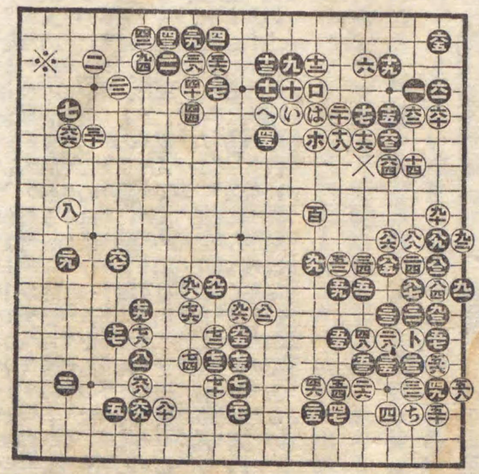
中野知得 芾

（仙太夫曰、此時元丈、知得共に既に名人の技あり白打方特に妙なり）

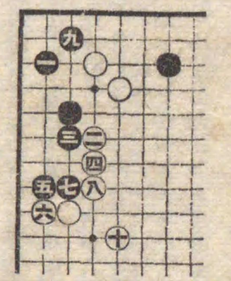
▲黑※印の斜走如何

九は別に申分のある譯ではないが、本局の如き石立に於ては彼此れの釣合を計つて十三の處へ三間に夾む手段もあり、又二の白に對して九四へ一間に夾むこともあり、又三六へ三間に夾み返す趣向もある。其の何れを採るべきやは當局者の方寸に在る事で、是非を言ふ限りでない。十四は古來の定跡であるが、併し黑に先手を取られて二と夾まれた姿を見ると、如何にも十一十三と二との間合が好く又二の白に對する七と二の黑も洵に釣合が好いから兵

第一圖

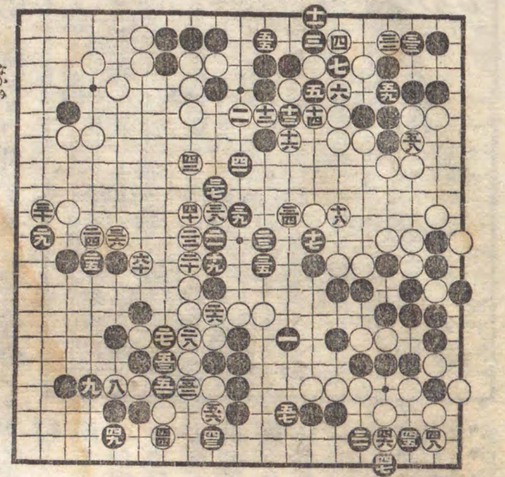


甲圖



の配置上に於ては幾分か白が割合ひ負けした形であると謂はねばならぬ。因つて白は常套に泥まず、十四に夾む手で、黑が將さに展開旁〻攻め掛らうと云ふ二の處へ開くはドンナものか、其時黑が十四へ二間に開くか或は十五に斜開すれば白いに行びて居ると云ふ手段もある。尤も黑に於ては十四若くは十五に打たずして劇く口に切る手段がないでもない。其時は又其時で、白にも十六に頂ける抔、種々の手段もあるが、兎に角本圖の如くなるよりは二へ開いて居る方が碁が廣くなりはせぬか。黑七是れ又古來定跡とする所であるけれども、是れは單に九へ尖みつけて居る方が宜いと云ふことは今日の定論である。ソコで白が黑から展開旁〻二の白を夾まれるのを嫌つて二へ先鞭を着けたらば黑いにはね、白七に約へた時黑十五に突出し白十四に約へ黑×印を切ると云ふ筋がある、けれども圖の如く黑七と白十六の交換があつては十五に出切りの味がなくなる丈け不利益である。前述の手順中黑いにはねずして直ちに十五へ出切りを試みても宜い。三十の約へは此の場合甚だ閑着である。矢張り二に開いて居るべき處である。其時黑若し三十に押出さば白はに約へ、黑ホを切つた時白へにはねて居る抔は甚だ面白い形ではあるまいか。次に三三に掛れば此の配置に於ては無論挾撃されるのは眼に見えて居るから此の場合一路控えてト印に打つ方が面白い。ソコで白が十五の邊に打てば黑は例の通りちへ頂けるが宜い。二四の夾みは少し緩みではあるまいか。十六十八の鐵柵を利用して尙ほ一路進んで十七へ夾みたい格好である。黑元は感服しない。何故に※印に斜走せぬのであらうか、其時白若し普通の如く三十に掛けるとすれば其結果甲圖の如くなるべく、ソコで黑轉じて三十に飛ばゞ如何、左すれば白は左上隅に於ては殆ど中實を喰はれ、右下隅も亦三三に飛んで活きらるゝ事になつては見渡す所、手を掛けた割合に地なしの姿になるのである。十六と掛粘いで十七と圍はれて了つたのは甚だ惜い。此處は白として何とか黑地を消す趣向をしたい處である。勿論ドコに打つが宜いと云ふことは斷定の出來ぬ處であるが、趣向をすべき餘地ありと云ふこと丈けは言ひ得るのである。此れから先は流石仙太夫の評言通り黑白共に善く戰ひ善く防ぎて遂に芾にまで漕ぎ着けたのは白の手柄であると謂はねばならぬ。

第二圖



○劫とる
○劫とる
○十二の處劫とる
○二目とる

算悅の遺訓

凡圍碁ををさめんとならば、先づ定石石立を能く習ひ得て、局に對し一手も粗略に打過ぐべからず。力を盡し專一位をとり、變に應じては定格をも離れ、つよくせり詰め、其所にて勝負を決する程の心にあらずんば、地に取後れ、位詰の負になる事あるべし。然れども本法の石立を以てあら〳〵しき手なり打にしくはなし。惣じて上手よりはつと勢を見せ、嵩にかゝりて打ちたりとも少しも騷がず石の位を以て自然に敵の勢を消す事と當に心得べし。又彼よりうたんとするに、敵はずと沈んで手を待つ事有り、ます〳〵つよく心許を以てうてば必ず過あるものなり。すべて勝負は十目勝つべきを八目に減じたりとも慥に危き事なきを勝の專一とす。勝なりとて心ゆるみ臆すれば思ひの外の負を取るべし。尙々其所の緩急善惡を能く考へて打つべし。又石を置いて打たんに先上手の碁勢の淺薄なる方を伺ひて後其斯よりせり詰め、位をけし我石をかたくしまりて少しも動ずる心なく、紛れざるやう輕く勢を持つ車一切の碁同意なり。敵より筋を離れて打つときは紛らはしく打來る共打つべき本手を以てうてば其心同じき故に一局の位を得てつひに勝を取る事を志すべし。

兩々對抗の姿勢

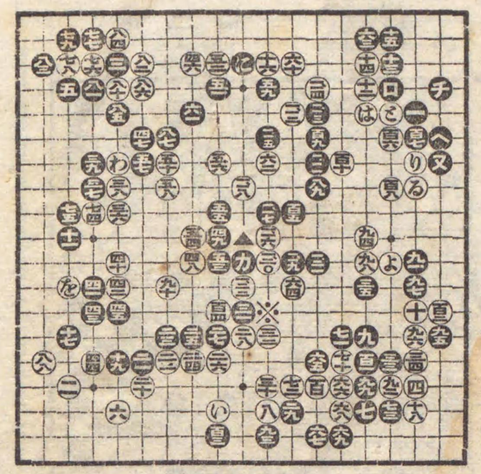
十三世 七段 本因坊丈策
七段 坂口仙得（先番）中押勝

（弘化三年十一月十七日於御城）

▲根本的布石の理法

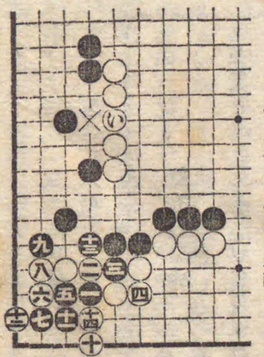
白四は普通に言へば右下隅㠯に陣取るべきであるが、蓋し黒の構へは兩隅とも「もくはづし」で、㠯若くは五、孰れに締つても、アトの權衡が悪いと示ふのを見越して、白も亦たソチラはソチラとして圖の如く四と左下隅と同位に構へたのであらうけれども、併し今言ふた通り㠯に陣取り、而して黒が五或は㠯ドチラに締つても㠯と一間高に締る方が割合ひが宜い。然るに白先づ四と構へ黒五、白六の締り締りになつては黒の注文通りになつた譯である。更に何故に四の處より㠯が宜いかと云ふに、

百二十三手



黒は成べく締り〳〵の對勢になることを望むのであるから五或は㠯何れかに締るべく、其時白若し六或は七、ドチラに締つてもアトの夾み工合がマヅクなるではないか。詳言すれば圖の如く七と掛られ八と夾む恰好は即ち六と八との對照が如何にも位、低く幅も亦た薄くなるからイカヌと斯う云ふ結論になる。其の反對に白先づ七に締り黒六に掛つた時白㈠に夾むも亦た同形である。茲に於て愈〳〵四と同位線に陳取るの不可なる所以を知るに足るであらう。五の下りは此の場合に於ては面白くない。夫れよりは黒口に引〆め、白はの時黒にに打つが宜い。ソコで白㠯に頂くれば黒へ、白と、黒チ、白り、黒又、白るとなるのが普通で、不斷は好まぬ形であるけれども四十の位置が低いから此場合に於ては黒は斯く打つて先手を取るに若くはない。六は緩着である。九に補ふのが普通であるが、或はをに打込むも亦た一策である。然るに黒から丸と煽らるゝに至つては黒の繩張りが厚くなるに反し白の構へが窮屈になつて了ふではないか。其結果遂に黒から丸と利かされる結果を生じたのは白に取つては隨分辛からう。けれども別に打ちやうもない。元々六と緩い手を打つた祟りで、斯うなるのは自業自得と云ふ外はない。㠯はドンナものか。コゝの黒三子は甚だ身輕で、白の側から云へば何とも捉へやうのない處だから寧ろ棄置くに若くはない。而して㠭邊へ雄大に構へる方が趣きがあるではないか。四緩し、此場合甲圖の如く一と頂け越して先手を取り、而して×印

甲圖



に覗かんは如何、白はに粘ぐ外なからう。ソコで右側に轉じて本圖㠭へ頂けるが宜いではないか。吳はドウか、わに押したい處である。然るに圖の如く打つて㠯と好點を占められたのは白の爲めに甚だ惜むべきであつた。㠯も亦た如何であらうか、圖の如く黒に㠯と嚴しく打たれた時白㠯に出で、黒力に約へ、白▲印に切ツて凌ぐ手がないとすれば則ち白は㠯の手で何とか他に趣向せねば碁にならぬではないか。六の尖みはドウモ感心せぬナ。六へボウシに冠ぶせる方が面白くはなからうか。何故かと云ふに次に右側㠭の好點を占めると云ふ狙ひと相待つて形勝の地點であるからである。六はよ印に打つて地を取りたいナ、左もなくチヤア益〻地が足らなくなツて了ふぢやないか。然るに圖の如く打つた爲めに黒に調子づかれて※印の出切を狙ひ旁々㠭と備へらるゝに至つては最早や大勢既に去つて又挽回の策なしと斷言して過りないのである。

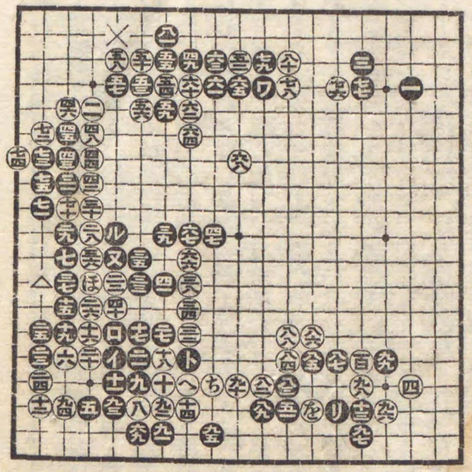
碁聖爭珠

十四代 准名人 本因坊秀和

上手 安田秀策

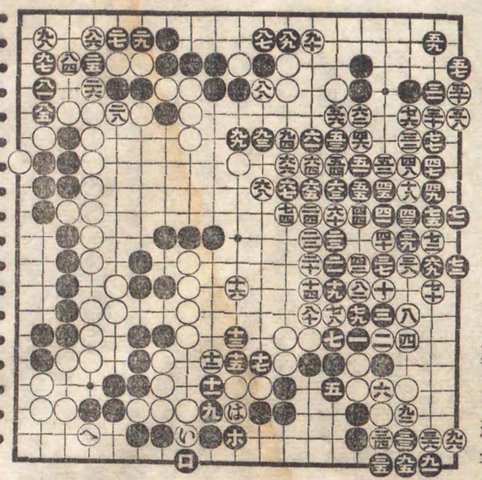
▲第一圖 雙龍、珠を爭ふの勢　九は十一に尖み、白九、黑イ、白二、黑ロとなるのが普通である。ソコで白がドウ打つかは即ち趣向で、右側方面に打つこともあり、或はほの肩に打つこともあり、又更に一本七に押し黑が四十に行びた時ほの挾間に打つこともある。圖の如く九へ頂け十一に引く手は昔から定跡としてあるが、併し白に十四に掛粘がれるのは黑の甚だ忌む所で、爲めに十一に引かずして二に行びる手段もある。然るに白は何故に十四に掛け粘がぬのであらうか、黑の嫌ふ處であるから掛粘いで善かりさうに思はれるが、圖の如く十一へ斜走したのは普通の手段に非ずして白の趣向と解釋する外はない。十三は十六へはね、白ヘ、黑ト、白ちの時黑リに掛る方が面白くはあるまいか。十五は十七に飛び白十五に飛んだ時八へ開いて居る趣向もある。斯うなれば至つて無事である。九にあてゝ而して二と粘いだのは甚だ面白い。然るに九の手でロに突當ると、夫れを機會に丁度よく二六へ行び出されて了ふ。三は一寸四四へ尖みさうな形であるが、斯くては出足が遅れる。ソコで三と飛んだのも面白い手だ。此時黑若し二六に出で、白四十に約へた時、黑ロに切る姿は如何にもマヅイ手で、二の一子が無駄になつて了ふ。要するに十五以下四八までの戰ひは頗る激戰で双龍、珠を爭ふの趣きがある。二六は十七の處へ詰めるも亦た一手段である。其時黑又に頂けなば白三五にはね、黑ルに行びた時ほのあてを凌ぐ爲め白△印に置くべく、黑は三七に粘ぐ外はない。ソコで四に掛粘いで居る手段もある。三十は宜い處であるが此場合をに夾んではドウ云ふものか、此處も中々宜い處だ。左すれば黑は無論二六に侵して來るであらうが、其時白が何とか趣向をする方が碁が廣くなりはせぬか。白二四へ跳ね出した結果十五に曲つて振變られたのは甚だ不利益であつた。と云ふのは左邊は殆ど萬里の長城に類する堅壁で、其處へ餘り多く手數を掛けて凝つた姿ではあるまいか。此場合二六に辛抱して居る方が得であらうと思ふ。黑が八と下つて活きたのは面白い。若し白が×印邊に打てば黑はワに粘いで活きつゝ敵を攻めやうと云ふ手段であらうと思はれる。

第一圖



▲第二圖 白十一約への得失　白が十一に受けずして十へ跳ねたのは如何であらうか。假に白が十一に約へるとすれば黑は無論十六の大塲を占むるに違ひない。其時に白が十へ跳ねる姿は一向詰らない。且つ後に圖の如く十三十七と打つて二目を取られて眼を奪はれるやうな手もあり又白の側から言へば事に依るといに突出し黑ロ、白は、黑ホとなつた時白へに跳ねる手順にならぬとも限らぬ。さう云ふ關係のある處だから白十一の約へは中々大きな處である。十三は時機尚早くはあるまいか、其儘棄て置いて十六の處に開いて居る方が宜いと思ふ。三五、斯くの如く跳ね出して寄せられる手が殘つた結果に見ても第一圖に於て白二四へ跳ね出して二目を取つた手が詰り損であつたと云ふことが分るだらうと思ふ。此碁はドウも白の負けと確定して了つたが、流石に秀和、秀策兩先生丈けあつて頗る見應への十五以下四八に至るまで互に息も繼がせぬ競合ひ、ある激戰であつた。

第二圖



白軍包圍計畫敗る

中押勝
五段 中川順節
五段 河喜田耕之助

弘化二年二月廿四日打掛二十五日打終

▲第一圖 (三)手順の相違 包圍計畫敗る

(三)、是れは昔は能く打つた手で決して惡い事はないが、當今では(十五)の處へ「もくはづし」に打つのが專ら流行して居る。夫れは白が(四)の手で(い)印に掛れば右上隅、左上隅共に同形になるのみならず黒(五)の手で(三)の處へ展開旁〻に三間に夾むと云ふ恰好の位置を占め得らるゝからである。(十六)の高締りは古來澤山打つてある手であるが、斯くては三々即ち(イ)に打込まれる隙あるのみか、黒から(九)と詰められた時圖の如く(二十)と受けて居る譯では迚も引合はない。(十六)の手で尋常に(ろ)に締るに若くはない。又(二十)にては(三)か或は(は)に軍を進むべき機會である。(二)、是れ又要處には相違ないが、併し白が今や將さに占領せんと期待しつゝある左側方面が最急の場所になつて居るから(ロ)の處へ高く陣取つて居たいのである。是れは詰り白が(に)の處へ詰めて來るのは低い手であるから、無論其儘棄て置くであらう、左すれば今度(ホ)印へ詰めて打込を狙はふと云ふ趣向である。(三)は可なり大きい處ではあるが、此の場合(へ)に詰めて居る方が更に大きい。(元)と粘いだのは如何にも働きがない。幻庵因碩先生の評の通り何故に(平)の處へ押出さぬのであらうか、ソコで白(ほ)印に約へなば黒(ト)印を截るべきである。(三)及び(三)の趣向は甚だ惡い。左下隅から左邊に亘る白模樣を消さうと云ふならば先づ自分の繩張りを擴張しながら徐々に敵壘に迫る行動に出づるを可とすべく、即ち(五)に打つに若くはない。(四)の泳ぎは無理である。尋常に(四)に抱へ、白(四)に切つた時黒(四)に粘ぐのが普通である。然るに(七)以下の三目を取られたのは黒の損である。併しながら白にも亦た手順を誤つて居る處がある。蓋し此の戰ひに於ける白の計畫は(六)以下の三子を棄て而して(と)の肩に迫つて(九)(三)の二子を攻めやうと云ふ手段であると推測すべき理由がある。果して然らば(三)へ跳ねる前に(六)に粘いだならば黒は是非とも(チ)印に跳ねなければならぬ。其時白(五)に跳ねなば如何、白の趣向通り(と)に攻め懸かる手順になるではないか。然るに此の手順を違へて先きに(三)へ跳ねたればこそ反對に黒に(七)以下の三目を棄てられて其の作戰計畫を挫かれ、(六)と後手で三目を取らねばならぬ事になつたのである。けれども黒は唯白の作戰計畫を挫いたと云ふ迄で黒の損たるや一見明白である。(七)是れ又洵に不働きの手である。

第一圖 (七)つゞ

斯くては(三)一隊の白に何の響きをも與へない。夫れよりは(り)に跳ね白(ち)に約へた時黒(又)に掛粘がんには(三)の白にも響くのみならず後に(い)印に覗く筋も出來るではないか。夫れから(九)と飛びて半死(九)(三)の復活を謀るは如何あらうか。最初黒が(七)と截つたのは即ち圖の如く(六)の一子を打拔て(五)以下一團の捌きを樂にする代りに(九)、(三)の二子は成行に任かせやうと云ふ、謂はゞ半棄てに棄てたのである。若し之を逃げる積りならば(七)と切り(十三)までの交換をせずして味方に障らぬやう(七)の手で單に(ル)に行びるが宜い。是は取りも直さず(九)(三)の二子を北げて居る手に當るのである。然るに(九)と半棄ての二子を北げ出すに於ては最初(七)と切つた手が惡化して了ふ譯である。夫れよりは徐に白軍の形勢を見るに左邊に於ける(三)以下の四子も未だ全く收まれるに非ず、又右上邊(二)以下の白も亦完全なる眼形を備へて居る譯でもない。且つ左上隅の白とても裾明の狀態に在るから此の場合×印邊に打つて三方睨みの攻勢を取る方が面白くはなからうか。(九)は穩かに(七)に行びて居る方が宜い。(七)、黒は何故に(オ)に粘かぬのであらうか。斯くて兎も角も(二)以下の白を攻める方が宜い。(七)の時でも矢張り(オ)に粘ぐべきである。然るに圖の如く何處までも(九)以下一隊の活路を求むるに執着した結果第二圖の如く白に(六)(八)と打たるゝに至つては最早や黒の敗勢を兆せりと云ふべきである。

▲第二圖 黒軍の敗因

(二十)は餘り慾が深過ぎる。左邊にも弱い味方があり中央の大軍迚も未だ充分に收まつて居る譯でもないから此際(四)に尖んで居て充分ではないか。左れば黒(三)と粘ぐ手で兎も角も(六)へ行びるが宜い。白は竹符(たけふ)に(い)に並ぶ位のものであらう。其時黒(ロ)に尖まば如何。假に白(三)に頂けんか、黒×印に跳ね、白(六)に行び、黒(ホ)にグズミ、白(は)に約へた時黒(ト)に尖み頂ける手があるから迚も此の鹿を取る所ではない、却て自分の方が危い位である。又黒(ロ)に尖まずして(ホ)に押し白(は)に跳ねた時黒(四)を切る手段もある。左すれば白は(ロ)に跳ねる外なかるべく、黒(チ)、白(り)、黒(又)、白(六)、と斯くの如く三目を餌にして(三)の粘ぎを略し而して左邊に轉じて(七)の急處を衝く手段もある。斯うなつては何分にも中原に於ける黒軍の形勢が張つて居るから白は到底活くる途はあるまい。然るに白の命令に服從して(三)と粘ぎ(四)(六)と打たるゝに至つては大勢既に決せり。黒の負けたることは明白である。之を要するに此の結果に徴すると(三)(三)の趣向が餘程惡かつたやうに思はれる。

第二圖 百九十四手以下略

幻庵評

(九)は(三)に押すべし

碁聖秀策百番碁（二）

四段　安田秀策（七目勝）

互先

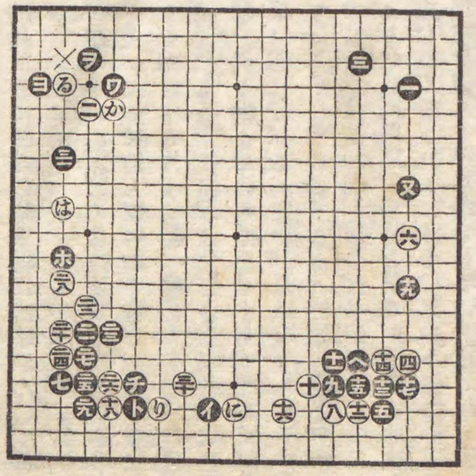
先番　四段　岸本左一郎

（天保十四癸卯閏九月二十七日）

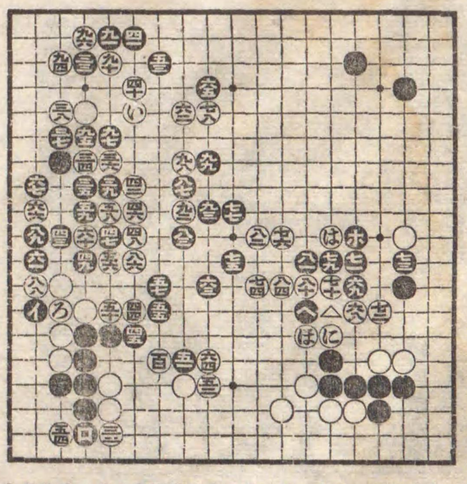
▲黒軍丸呑みの大計畫

本譜は天保時代秀策さんが未だ碁の妙境に達しない時代の碁であるが、嘉永時代には非常に強かつたもので御城碁十九局中曾て一番も負けたことがないと云ふ非凡の手腕を現はした偉人であるが病の爲め中道で殪れたのは遺憾の極みである。(五)の懸りは尚ほ早い。此の場合(七)の處に陣取り、白(六)に掛つた時黒(イ)に夾む方が割合が宜い。是れは次に(五)に高く掛り白(五)、黒(十二)と約へて彼此れ釣合ひを保つ形を豫想したのである。左もなくば(七)の反對に(元)に打ち白(二四)に掛つた時(ホ)に夾むも亦た可なりである。是れは白が(二)の一子を根據として(は)に詰めて來る手が甚だ釣合ひの惡い形になるから自然(は)の詰めを妨げて(ホ)の黒自身樂に要地を占めて上下の敵に當ると云ふ趣向である。(八)は趣向であらうけれども此の場合(六)に掛るのが常用手段である。左すれば黒は二間三間は勿論一間にも夾むことが出來ぬ。と云ふのは黒若し其の夾擊手段に出づれば白から直ちに(五)へ懸けられて位を低くされると云ふ不利の格好になるからである。又白(六)に掛つた時黒が掛けを嫌つて假に(五)に尖むとすれば(に)の處へ拆かうと云ふ趣向である、(九)の頂けは面白くない。單に(五)に尖み白(九)に押さば黒(へ)に行びて打つ普通手段に出づべきである。然るに(九)と頂け次に(十一)と行びたのは尚更ら惡い。矢張り(五)に引いて居る方が宜い。其時白が(十六)に掛粘いたらば左下隅(ト)に締つて居るのが定型である。圖の如くなつては(十一)の一子は殆ど遊び形である。(二)是れ又(モ)に尖むが宜い。然るに此處も亦た向きこそ違へ、右下隅同樣(三)と行びて同型に出でたのは如何にも面白くない。既に(二)と頂けた以上は(モ)に引き而して白(元)に掛粘いだ時黒(チ)に一つ壓迫を加へ、白(り)に飛んだ時、轉じて右側(又)印に詰める方が宜くはないか。(ヘ)の掛りは如何なものにや×印に打込むべき好機會である。而して白若し(る)に尖み頂けなば黒(ヲ)に行びるも可なり、或は又(ワ)印へ斜開しても好い。其時白若し(か)に押さば黒(ヨ)に跳ねて打つ方が好いと思ふ』。第二圖(三)の下りは時機尚ほ早くはあるまいか。先づ(モ)に尖み頂け、黒(二四)に引いた時白(い)印に飛んで攻むるも亦た一策である。或は又白(二四)に頂け黒(三)に跳ねた時白(モ)に約へて居る手段もある。(四)は甚だ緩着ではないか、兎も角も(イ)印に覗き白(ろ)印に粘いだ時黒(四)に打つて己れを收めながら敵を攻める方が急ではあるまいか。(四)と凹んで爲めに(平)と白の創を癒着せしめたのは感服しないか。此の手で先づ(五)に一擊を加へて左下隅の黒の針路に資し白(三)に引いた時(六)に行びて打つ方が優しである。(五)の尖みは如何あらうか、先づ左下隅の黒の始末をすべき場合であらう、即ち(ロ)印に約へて居る方が安全である。(六)は聊か緩手のやうに思はれる。モウ少し嚴しく(六)に煽つて敵の動靜を窺つては如何なものか。然るに黒に(六)と打たれてから(六)と曲つたのは黒の眼を奪つた手であるが、詰り斯う打たねばならぬ機(はつ)みになつたのは(六)の手が緩いからである。(六)是れ又一考を要す。寧ろ(六)に飛んで白の二子を擒にする一方に(六)一隊の味方に勢援を與ふる方が急務ではないか。是れは中々大きい手である。(七)と行びて(七)の突當りと交換したのは甚だ惜い。此の手で(元)に押し黒(ホ)に行びなば白尚ほ一本(は)に押し着くべく、又白が(元)に押して(八)と並ばれるよりは△印を切る方が宜い。ソコで白が(に)へ跳込んだらば(八)に出るのが手順ではないか。第三圖の(五)は大變な手である。此の手で(二)に約へるか、(三)へ尖んで居れば決して殺される氣遣ひはないのである。然るに見損じでもあらうけれども(十六)と跳ね殺されるに至つては最早や黒に勝算なしと確定した。之を要するに黒の重なる敗因は第二圖(五)の緩手に兆し第三圖(五)の手にて敗勢定まつた譯である。

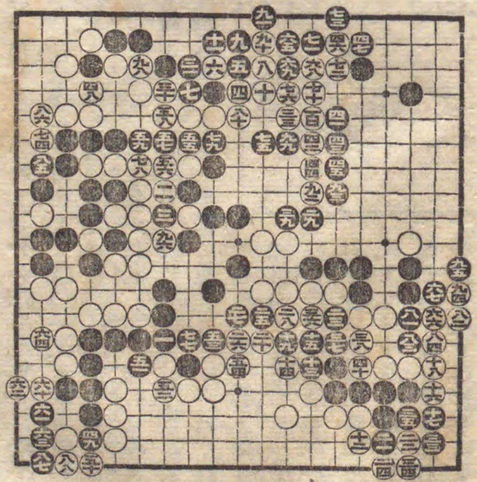
第一圖



第二圖



第三圖

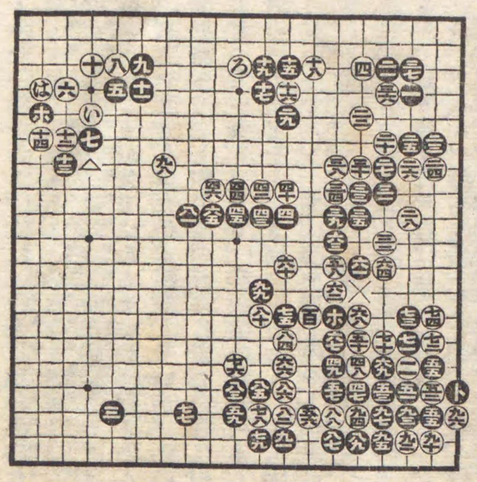


碁聖秀策白番碁（二）

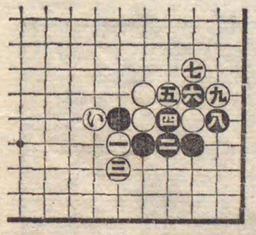
先番　四段　安田秀策（中押勝）
互先　四段　岸本左一郎
（天保十四癸卯十三日）

▲第一圖　**白敗因在二布石一**　㊹は此の場合左上隅の明隅を占領しなければ權衡を取ることが出來ない。然るに㊹と掛り黒に㊺と打たれた配置を見れば三隅共に黒に先鞭を着けられて、白の兵勢は一方に片寄つて居るから自ら局面が狹くなつて術策を施すの餘地が少なくなるのである。㊺は八の「もくはづし」へ打つのが普通である。夫れは白が㋥に掛れば黒六と打つは無論であるが、若し六の處に掛れば丸に展開旁々夾まうと云ふ趣向である。是れは謂ふまでもなく左右兩隅が對等の勢ひを成して居る場合に黒に丸と打たれた恰好だから白の割合ひが惡いことは一見明白である。七は考慮を要す。矢張り丸へ三間に夾むべきである。其の恰好は單に「もくはづし」に在ると一間高くあるとの相違に過ぎない。㊸と頂け㊹と後手を取つて㊺と詰められたのは白の不利や此の上もない。此の場合手を拔いて丸か或は一路進でろへ打つか、而して黒が水に懸つて來た時はに受けるのが當今流行の打方である。然るに圖の如く打つた爲めに却て七の黒が活き反つて來たではないか。ソコで白若し△印を切れば則ち黒は又手を拔いてへに頂くべきである。㊸と頂け㊹と跳ねたのは定跡であるが丸までの結果、兩翼既に堅實に中原雄飛の姿勢を備へられては白は如何にして此の頽勢を挽回するであらうか。左りとて㊸の手でドウ打つた所で急に旨い仕事は出來ない。㊺は㊷へ跳ね出して㊿の一子を取る手がないでもないけれども、併し其の利害は容易に斷定することは出來ない。㊺は甚だ惡い。㊺と粘がれ㊻と粘いだのは非常の凹みで如何にも位が低い。㊺の手で㊺に跳込み、黒㊸の時白㊷に粘ぐか、又は㊺へ跳込まずして毛に截つて甲圖の如く打つも亦た一策である。圖中六と截らずして九の處に置かば白はいに一子を抱へて居るのが常用の手段である。㊻、單騎敵の牙營に迫るは無謀ではないか。夫れよりは中原に浮ける毛以下の一聯隊を遠く望んで百に斜走して徐々に手段を施すに若くはない。㊽は如何にも氣の利かぬ手だ。之れが爲めに㊽の突出しを利かされ、尙ほ水の突當りをも利かされる創を殘したのは隨分酷い。故に㊽に引かずして×印に約へて居る方が味が宜い。㊾、是れは單にヒに飛んで居る方が宜い。左すればへの突當りは利かないのである。次に黒がヒと截つた目的は白が若しミに跳ねて來たらば先手でトの跳ねを利かさうと云ふ手段であるから白は夫れを嫌つて㊿、㋀と押したのである。執れにしても白の方が宜しくない。第二圖　必竟圖の如く黒に一三と聯絡されて而して白が四と繋がつて居なければならぬ事になつたのは第一圖に於て白が㊾と約へた結果で㊺と打たるゝに至つては最早や何としても白に勝算はない。結局白が中押敗となつた第一の原因は古風の定跡たる㊾㋁の手遲れに原因し第二の原因は右下隅の戰ひに於て㊻㊼の應手を誤つた爲めである。因に秀策さんは十八歲で七段の力があつた人であるが是れは十四歲位の時の打碁である。

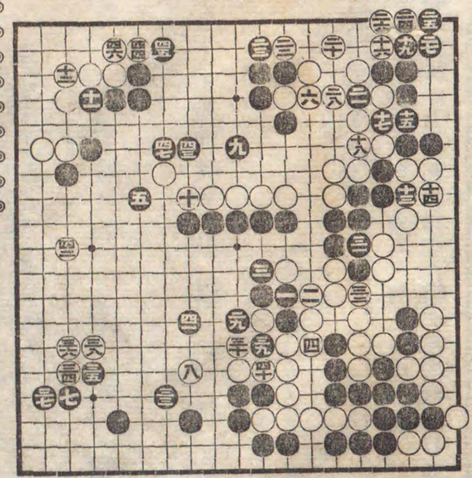
第一圖



甲圖



第二圖



碁聖秀策百番碁（三）

四段 安田秀策（六目勝）

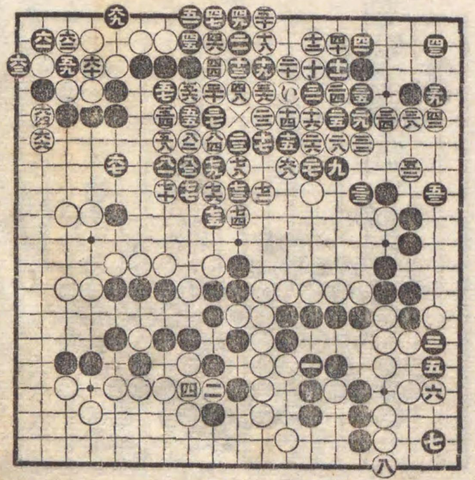
互先

先番 四段 鶴岡三郎助

（天保十四年八月二十三日）

▲黒平凡無事の負け

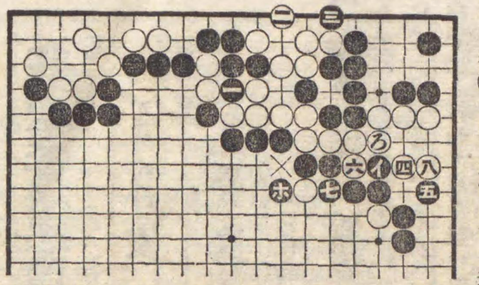
㊱は即ち趣向で、黒が㉟掛る手を封じたのである。若しも㉟へ懸らば白㊱、黒㊲、白㊳、黒㊴となつた時白亦た㉟と所謂兩懸けにして黒の位を低くしやうと云ふ手段であることは一見明白である。㉟は此の場合㊴に尖んで㊱の頂けを防ぐが最も肝要の手段である。㊵は單に㊷に引き白㊸に引かば黒㊴に尖んで居る方が宜い。然るに譜の如く㊴と引かれ㊸と飛ばれた結果は餘程黒の方が悪い。㊹は㊴に行び白㊶に斜走したる時黒×印に飛ぶも亦た一策である。㊺は㊼に懸粘ぎたい。左すれば白㊽へ、黒㊾、白㊿、黒(1)、白(2)、黒(3)、白(4)、黒(5)、白(6)、黒(7)、白(8)、黒(9)、白(10)、黒(11)、白(12)、黒(13)、白(14)、黒(15)、白(16)、黒(17)、白(18)、黒(19)、白(20)、黒(21)、白(22)、黒(23)、白(24)、黒(25)、白(26)、黒(27)、白(28)、黒(29)、白(30)、黒(31)、白(32)、黒(33)、白(34)、黒(35)、白(36)、黒(37)、白(38)、黒(39)、白(40)、黒(41)、白(42)、黒(43)、白(44)、黒(45)、白(46)、黒(47)、白(48)、黒(49)、白(50)、黒(51)、白(52)、黒(53)、白(54)、黒(55)、白(56)、黒(57)、白(58)、黒(59)、白(60)、黒(61)、白(62)、黒(63)、白(64)、黒(65)、白(66)、黒(67)、白(68)、黒(69)、白(70)、黒(71)、白(72)、黒(73)、白(74)、黒(75)、白(76)、黒(77)、白(78)、黒(79)、白(80)、黒(81)、白(82)、黒(83)、白(84)、黒(85)、白(86)、黒(87)、白(88)、黒(89)、白(90)、黒(91)、白(92)、黒(93)、白(94)、黒(95)、白(96)、黒(97)、白(98)、黒(99)、白(100)、黒(101)、白(102)、黒(103)、白(104)、黒(105)、白(106)、黒(107)、白(108)、黒(109)、白(110)、黒(111)、白(112)、黒(113)、白(114)、黒(115)、白(116)、黒(117)、白(118)、黒(119)、白(120)、黒(121)、白(122)、黒(123)、白(124)、黒(125)、白(126)、黒(127)、白(128)、黒(129)、白(130)、黒(131)、白(132)、黒(133)、白(134)、黒(135)、白(136)、黒(137)、白(138)、黒(139)、白(140)、黒(141)、白(142)、黒(143)、白(144)、黒(145)、白(146)、黒(147)、白(148)、黒(149)、白(150)、黒(151)、白(152)、黒(153)、白(154)、黒(155)、白(156)、黒(157)、白(158)、黒(159)、白(160)、黒(161)、白(162)、黒(163)、白(164)、黒(165)、白(166)、黒(167)、白(168)、黒(169)、白(170)、黒(171)、白(172)、黒(173)、白(174)、黒(175)、白(176)、黒(177)、白(178)、黒(179)、白(180)、黒(181)、白(182)、黒(183)、白(184)、黒(185)、白(186)、黒(187)、白(188)、黒(189)、白(190)、黒(191)、白(192)、黒(193)、白(194)、黒(195)、白(196)、黒(197)、白(198)、黒(199)、白(200)、黒(201)、白(202)、黒(203)、白(204)、黒(205)、白(206)、黒(207)、白(208)、黒(209)、白(210)、黒(211)、白(212)、黒(213)、白(214)、黒(215)、白(216)、黒(217)、白(218)、黒(219)、白(220)、黒(221)、白(222)、黒(223)、白(224)、黒(225)、白(226)、黒(227)、白(228)、黒(229)、白(230)、黒(231)、白(232)、黒(233)、白(234)、黒(235)、白(236)、黒(237)、白(238)、黒(239)、白(240)、黒(241)、白(242)、黒(243)、白(244)、黒(245)、白(246)、黒(247)、白(248)、黒(249)、白(250)、黒(251)、白(252)、黒(253)、白(254)、黒(255)、白(256)、黒(257)、白(258)、黒(259)、白(260)、黒(261)、白(262)、黒(263)、白(264)、黒(265)、白(266)、黒(267)、白(268)、黒(269)、白(270)、黒(271)、白(272)、黒(273)、白(274)、黒(275)、白(276)、黒(277)、白(278)、黒(279)、白(280)、黒(281)、白(282)、黒(283)、白(284)、黒(285)、白(286)、黒(287)、白(288)、黒(289)、白(290)、黒(291)、白(292)、黒(293)、白(294)、黒(295)、白(296)、黒(297)、白(298)、黒(299)、白(300)、黒(301)、白(302)、黒(303)、白(304)、黒(305)、白(306)、黒(307)、白(308)、黒(309)、白(310)、黒(311)、白(312)、黒(313)、白(314)、黒(315)、白(316)、黒(317)、白(318)、黒(319)、白(320)、黒(321)、白(322)、黒(323)、白(324)、黒(325)、白(326)、黒(327)、白(328)、黒(329)、白(330)、黒(331)、白(332)、黒(333)、白(334)、黒(335)、白(336)、黒(337)、白(338)、黒(339)、白(340)、黒(341)、白(342)、黒(343)、白(344)、黒(345)、白(346)、黒(347)、白(348)、黒(349)、白(350)、黒(351)、白(352)、黒(353)、白(354)、黒(355)、白(356)、黒(357)、白(358)、黒(359)、白(360)、黒(361)、白(362)、黒(363)、白(364)、黒(365)、白(366)、黒(367)、白(368)、黒(369)、白(370)、黒(371)、白(372)、黒(373)、白(374)、黒(375)、白(376)、黒(377)、白(378)、黒(379)、白(380)、黒(381)、白(382)、黒(383)、白(384)、黒(385)、白(386)、黒(387)、白(388)、黒(389)、白(390)、黒(391)、白(392)、黒(393)、白(394)、黒(395)、白(396)、黒(397)、白(398)、黒(399)、白(400)、黒(401)、白(402)、黒(403)、白(404)、黒(405)、白(406)、黒(407)、白(408)、黒(409)、白(410)、黒(411)、白(412)、黒(413)、白(414)、黒(415)、白(416)、黒(417)、白(418)、黒(419)、白(420)、黒(421)、白(422)、黒(423)、白(424)、黒(425)、白(426)、黒(427)、白(428)、黒(429)、白(430)、黒(431)、白(432)、黒(433)、白(434)、黒(435)、白(436)、黒(437)、白(438)、黒(439)、白(440)、黒(441)、白(442)、黒(443)、白(444)、黒(445)、白(446)、黒(447)、白(448)、黒(449)、白(450)、黒(451)、白(452)、黒(453)、白(454)、黒(455)、白(456)、黒(457)、白(458)、黒(459)、白(460)、黒(461)、白(462)、黒(463)、白(464)、黒(465)、白(466)、黒(467)、白(468)、黒(469)、白(470)、黒(471)、白(472)、黒(473)、白(474)、黒(475)、白(476)、黒(477)、白(478)、黒(479)、白(480)、黒(481)、白(482)、黒(483)、白(484)、黒(485)、白(486)、黒(487)、白(488)、黒(489)、白(490)、黒(491)、白(492)、黒(493)、白(494)、黒(495)、白(496)、黒(497)、白(498)、黒(499)、白(500)、黒(501)、白(502)、黒(503)、白(504)、黒(505)、白(506)、黒(507)、白(508)、黒(509)、白(510)、黒(511)、白(512)、黒(513)、白(514)、黒(515)、白(516)、黒(517)、白(518)、黒(519)、白(520)、黒(521)、白(522)、黒(523)、白(524)、黒(525)、白(526)、黒(527)、白(528)、黒(529)、白(530)、黒(531)、白(532)、黒(533)、白(534)、黒(535)、白(536)、黒(537)、白(538)、黒(539)、白(540)、黒(541)、白(542)、黒(543)、白(544)、黒(545)、白(546)、黒(547)、白(548)、黒(549)、白(550)、黒(551)、白(552)、黒(553)、白(554)、黒(555)、白(556)、黒(557)、白(558)、黒(559)、白(560)、黒(561)、白(562)、黒(563)、白(564)、黒(565)、白(566)、黒(567)、白(568)、黒(569)、白(570)、黒(571)、白(572)、黒(573)、白(574)、黒(575)、白(576)、黒(577)、白(578)、黒(579)、白(580)、黒(581)、白(582)、黒(583)、白(584)、黒(585)、白(586)、黒(587)、白(588)、黒(589)、白(590)、黒(591)、白(592)、黒(593)、白(594)、黒(595)、白(596)、黒(597)、白(598)、黒(599)、白(600)、黒(601)、白(602)、黒(603)、白(604)、黒(605)、白(606)、黒(607)、白(608)、黒(609)、白(610)、黒(611)、白(612)、黒(613)、白(614)、黒(615)、白(616)、黒(617)、白(618)、黒(619)、白(620)、黒(621)、白(622)、黒(623)、白(624)、黒(625)、白(626)、黒(627)、白(628)、黒(629)、白(630)、黒(631)、白(632)、黒(633)、白(634)、黒(635)、白(636)、黒(637)、白(638)、黒(639)、白(640)、黒(641)、白(642)、黒(643)、白(644)、黒(645)、白(646)、黒(647)、白(648)、黒(649)、白(650)、黒(651)、白(652)、黒(653)、白(654)、黒(655)、白(656)、黒(657)、白(658)、黒(659)、白(660)、黒(661)、白(662)、黒(663)、白(664)、黒(665)、白(666)、黒(667)、白(668)、黒(669)、白(670)、黒(671)、白(672)、黒(673)、白(674)、黒(675)、白(676)、黒(677)、白(678)、黒(679)、白(680)、黒(681)、白(682)、黒(683)、白(684)、黒(685)、白(686)、黒(687)、白(688)、黒(689)、白(690)、黒(691)、白(692)、黒(693)、白(694)、黒(695)、白(696)、黒(697)、白(698)、黒(699)、白(700)、黒(701)、白(702)、黒(703)、白(704)、黒(705)、白(706)、黒(707)、白(708)、黒(709)、白(710)、黒(711)、白(712)、黒(713)、白(714)、黒(715)、白(716)、黒(717)、白(718)、黒(719)、白(720)、黒(721)、白(722)、黒(723)、白(724)、黒(725)、白(726)、黒(727)、白(728)、黒(729)、白(730)、黒(731)、白(732)、黒(733)、白(734)、黒(735)、白(736)、黒(737)、白(738)、黒(739)、白(740)、黒(741)、白(742)、黒(743)、白(744)、黒(745)、白(746)、黒(747)、白(748)、黒(749)、白(750)、黒(751)、白(752)、黒(753)、白(754)、黒(755)、白(756)、黒(757)、白(758)、黒(759)、白(760)、黒(761)、白(762)、黒(763)、白(764)、黒(765)、白(766)、黒(767)、白(768)、黒(769)、白(770)、黒(771)、白(772)、黒(773)、白(774)、黒(775)、白(776)、黒(777)、白(778)、黒(779)、白(780)、黒(781)、白(782)、黒(783)、白(784)、黒(785)、白(786)、黒(787)、白(788)、黒(789)、白(790)、黒(791)、白(792)、黒(793)、白(794)、黒(795)、白(796)、黒(797)、白(798)、黒(799)、白(800)、黒(801)、白(802)、黒(803)、白(804)、黒(805)、白(806)、黒(807)、白(808)、黒(809)、白(810)、黒(811)、白(812)、黒(813)、白(814)、黒(815)、白(816)、黒(817)、白(818)、黒(819)、白(820)、黒(821)、白(822)、黒(823)、白(824)、黒(825)、白(826)、黒(827)、白(828)、黒(829)、白(830)、黒(831)、白(832)、黒(833)、白(834)、黒(835)、白(836)、黒(837)、白(838)、黒(839)、白(840)、黒(841)、白(842)、黒(843)、白(844)、黒(845)、白(846)、黒(847)、白(848)、黒(849)、白(850)、黒(851)、白(852)、黒(853)、白(854)、黒(855)、白(856)、黒(857)、白(858)、黒(859)、白(860)、黒(861)、白(862)、黒(863)、白(864)、黒(865)、白(866)、黒(867)、白(868)、黒(869)、白(870)、黒(871)、白(872)、黒(873)、白(874)、黒(875)、白(876)、黒(877)、白(878)、黒(879)、白(880)、黒(881)、白(882)、黒(883)、白(884)、黒(885)、白(886)、黒(887)、白(888)、黒(889)、白(890)、黒(891)、白(892)、黒(893)、白(894)、黒(895)、白(896)、黒(897)、白(898)、黒(899)、白(900)、黒(901)、白(902)、黒(903)、白(904)、黒(905)、白(906)、黒(907)、白(908)、黒(909)、白(910)、黒(911)、白(912)、黒(913)、白(914)、黒(915)、白(916)、黒(917)、白(918)、黒(919)、白(920)、黒(921)、白(922)、黒(923)、白(924)、黒(925)、白(926)、黒(927)、白(928)、黒(929)、白(930)、黒(931)、白(932)、黒(933)、白(934)、黒(935)、白(936)、黒(937)、白(938)、黒(939)、白(940)、黒(941)、白(942)、黒(943)、白(944)、黒(945)、白(946)、黒(947)、白(948)、黒(949)、白(950)、黒(951)、白(952)、黒(953)、白(954)、黒(955)、白(956)、黒(957)、白(958)、黒(959)、白(960)、黒(961)、白(962)、黒(963)、白(964)、黒(965)、白(966)、黒(967)、白(968)、黒(969)、白(970)、黒(971)、白(972)、黒(973)、白(974)、黒(975)、白(976)、黒(977)、白(978)、黒(979)、白(980)、黒(981)、白(982)、黒(983)、白(984)、黒(985)、白(986)、黒(987)、白(988)、黒(989)、白(990)、黒(991)、白(992)、黒(993)、白(994)、黒(995)、白(996)、黒(997)、白(998)、黒(999)、白(1000)、黒(1001)、白(1002)、黒(1003)、白(1004)、黒(1005)、白(1006)、黒(1007)、白(1008)、黒(1009)、白(1010)、黒(1011)、白(1012)、黒(1013)、白(1014)、黒(1015)、白(1016)、黒(1017)、白(1018)、黒(1019)、白(1020)、黒(1021)、白(1022)、黒(1023)、白(1024)、黒(1025)、白(1026)、黒(1027)、白(1028)、黒(1029)、白(1030)、黒(1031)、白(1032)、黒(1033)、白(1034)、黒(1035)、白(1036)、黒(1037)、白(1038)、黒(1039)、白(1040)、黒(1041)、白(1042)、黒(1043)、白(1044)、黒(1045)、白(1046)、黒(1047)、白(1048)、黒(1049)、白(1050)、黒(1051)、白(1052)、黒(1053)、白(1054)、黒(1055)、白(1056)、黒(1057)、白(1058)、黒(1059)、白(1060)、黒(1061)、白(1062)、黒(1063)、白(1064)、黒(1065)、白(1066)、黒(1067)、白(1068)、黒(1069)、白(1070)、黒(1071)、白(1072)、黒(1073)、白(1074)、黒(1075)、白(1076)、黒(1077)、白(1078)、黒(1079)、白(1080)、黒(1081)、白(1082)、黒(1083)、白(1084)、黒(1085)、白(1086)、黒(1087)、白(1088)、黒(1089)、白(1090)、黒(1091)、白(1092)、黒(1093)、白(1094)、黒(1095)、白(1096)、黒(1097)、白(1098)、黒(1099)、白(1100)、黒(1101)、白(1102)、黒(1103)、白(1104)、黒(1105)、白(1106)、黒(1107)、白(1108)、黒(1109)、白(1110)、黒(1111)、白(1112)、黒(1113)、白(1114)、黒(1115)、白(1116)、黒(1117)、白(1118)、黒(1119)、白(1120)、黒(1121)、白(1122)、黒(1123)、白(1124)、黒(1125)、白(1126)、黒(1127)、白(1128)、黒(1129)、白(1130)、黒(1131)、白(1132)、黒(1133)、白(1134)、黒(1135)、白(1136)、黒(1137)、白(1138)、黒(1139)、白(1140)、黒(1141)、白(1142)、黒(1143)、白(1144)、黒(1145)、白(1146)、黒(1147)、白(1148)、黒(1149)、白(1150)、黒(1151)、白(1152)、黒(1153)、白(1154)、黒(1155)、白(1156)、黒(1157)、白(1158)、黒(1159)、白(1160)、黒(1161)、白(1162)、黒(1163)、白(1164)、黒(1165)、白(1166)、黒(1167)、白(1168)、黒(1169)、白(1170)、黒(1171)、白(1172)、黒(1173)、白(1174)、黒(1175)、白(1176)、黒(1177)、白(1178)、黒(1179)、白(1180)、黒(1181)、白(1182)、黒(1183)、白(1184)、黒(1185)、白(1186)、黒(1187)、白(1188)、黒(1189)、白(1190)、黒(1191)、白(1192)、黒(1193)、白(1194)、黒(1195)、白(1196)、黒(1197)、白(1198)、黒(1199)、白(1200)、黒(1201)、白(1202)、黒(1203)、白(1204)、黒(1205)、白(1206)、黒(1207)、白(1208)、黒(1209)、白(1210)、黒(1211)、白(1212)、黒(1213)、白(1214)、黒(1215)、白(1216)、黒(1217)、白(1218)、黒(1219)、白(1220)、黒(1221)、白(1222)、黒(1223)、白(1224)、黒(1225)、白(1226)、黒(1227)、白(1228)、黒(1229)、白(1230)、黒(1231)、白(1232)、黒(1233)、白(1234)、黒(1235)、白(1236)、黒(1237)、白(1238)、黒(1239)、白(1240)、黒(1241)、白(1242)、黒(1243)、白(1244)、黒(1245)、白(1246)、黒(1247)、白(1248)、黒(1249)、白(1250)、黒(1251)、白(1252)、黒(1253)、白(1254)、黒(1255)、白(1256)、黒(1257)、白(1258)、黒(1259)、白(1260)、黒(1261)、白(1262)、黒(1263)、白(1264)、黒(1265)、白(1266)、黒(1267)、白(1268)、黒(1269)、白(1270)、黒(1271)、白(1272)、黒(1273)、白(1274)、黒(1275)、白(1276)、黒(1277)、白(1278)、黒(1279)、白(1280)、黒(1281)、白(1282)、黒(1283)、白(1284)、黒(1285)、白(1286)、黒(1287)、白(1288)、黒(1289)、白(1290)、黒(1291)、白(1292)、黒(1293)、白(1294)、黒(1295)、白(1296)、黒(1297)、白(1298)、黒(1299)、白(1300)、黒(1301)、白(1302)、黒(1303)、白(1304)、黒(1305)、白(1306)、黒(1307)、白(1308)、黒(1309)、白(1310)、黒(1311)、白(1312)、黒(1313)、白(1314)、黒(1315)、白(1316)、黒(1317)、白(1318)、黒(1319)、白(1320)、黒(1321)、白(1322)、黒(1323)、白(1324)、黒(1325)、白(1326)、黒(1327)、白(1328)、黒(1329)、白(1330)、黒(1331)、白(1332)、黒(1333)、白(1334)、黒(1335)、白(1336)、黒(1337)、白(1338)、黒(1339)、白(1340)、黒(1341)、白(1342)、黒(1343)、白(1344)、黒(1345)、白(1346)、黒(1347)、白(1348)、黒(1349)、白(1350)、黒(1351)、白(1352)、黒(1353)、白(1354)、黒(1355)、白(1356)、黒(1357)、白(1358)、黒(1359)、白(1360)、黒(1361)、白(1362)、黒(1363)、白(1364)、黒(1365)、白(1366)、黒(1367)、白(1368)、黒(1369)、白(1370)、黒(1371)、白(1372)、黒(1373)、白(1374)、黒(1375)、白(1376)、黒(1377)、白(1378)、黒(1379)、白(1380)、黒(1381)、白(1382)、黒(1383)、白(1384)、黒(1385)、白(1386)、黒(1387)、白(1388)、黒(1389)、白(1390)、黒(1391)、白(1392)、黒(1393)、白(1394)、黒(1395)、白(1396)、黒(1397)、白(1398)、黒(1399)、白(1400)、黒(1401)、白(1402)、黒(1403)、白(1404)、黒(1405)、白(1406)、黒(1407)、白(1408)、黒(1409)、白(1410)、黒(1411)、白(1412)、黒(1413)、白(1414)、黒(1415)、白(1416)、黒(1417)、白(1418)、黒(1419)、白(1420)、黒(1421)、白(1422)、黒(1423)、白(1424)、黒(1425)、白(1426)、黒(1427)、白(1428)、黒(1429)、白(1430)、黒(1431)、白(1432)、黒(1433)、白(1434)、黒(1435)、白(1436)、黒(1437)、白(1438)、黒(1439)、白(1440)、黒(1441)、白(1442)、黒(1443)、白(1444)、黒(1445)、白(1446)、黒(1447)、白(1448)、黒(1449)、白(1450)、黒(1451)、白(1452)、黒(1453)、白(1454)、黒(1455)、白(1456)、黒(1457)、白(1458)、黒(1459)、白(1460)、黒(1461)、白(1462)、黒(1463)、白(1464)、黒(1465)、白(1466)、黒(1467)、白(1468)、黒(1469)、白(1470)、黒(1471)、白(1472)、黒(1473)、白(1474)、黒(1475)、白(1476)、黒(1477)、白(1478)、黒(1479)、白(1480)、黒(1481)、白(1482)、黒(1483)、白(1484)、黒(1485)、白(1486)、黒(1487)、白(1488)、黒(1489)、白(1490)、黒(1491)、白(1492)、黒(1493)、白(1494)、黒(1495)、白(1496)、黒(1497)、白(1498)、黒(1499)、白(1500)、黒(1501)、白(1502)、黒(1503)、白(1504)、黒(1505)、白(1506)、黒(1507)、白(1508)、黒(1509)、白(1510)、黒(1511)、白(1512)、黒(1513)、白(1514)、黒(1515)、白(1516)、黒(1517)、白(1518)、黒(1519)、白(1520)、黒(1521)、白(1522)、黒(1523)、白(1524)、黒(1525)、白(1526)、黒(1527)、白(1528)、黒(1529)、白(1530)、黒(1531)、白(1532)、黒(1533)、白(1534)、黒(1535)、白(1536)、黒(1537)、白(1538)、黒(1539)、白(1540)、黒(1541)、白(1542)、黒(1543)、白(1544)、黒(1545)、白(1546)、黒(1547)、白(1548)、黒(1549)、白(1550)、黒(1551)、白(1552)、黒(1553)、白(1554)、黒(1555)、白(1556)、黒(1557)、白(1558)、黒(1559)、白(1560)、黒(1561)、白(1562)、黒(1563)、白(1564)、黒(1565)、白(1566)、黒(1567)、白(1568)、黒(1569)、白(1570)、黒(1571)、白(1572)、黒(1573)、白(1574)、黒(1575)、白(1576)、黒(1577)、白(1578)、黒(1579)、白(1580)、黒(1581)、白(1582)、黒(1583)、白(1584)、黒(1585)、白(1586)、黒(1587)、白(1588)、黒(1589)、白(1590)、黒(1591)、白(1592)、黒(1593)、白(1594)、黒(1595)、白(1596)、黒(1597)、白(1598)、黒(1599)、白(1600)、黒(1601)、白(1602)、黒(1603)、白(1604)、黒(1605)、白(1606)、黒(1607)、白(1608)、黒(1609)、白(1610)、黒(1611)、白(1612)、黒(1613)、白(1614)、黒(1615)、白(1616)、黒(1617)、白(1618)、黒(1619)、白(1620)、黒(1621)、白(1622)、黒(1623)、白(1624)、黒(1625)、白(1626)、黒(1627)、白(1628)、黒(1629)、白(1630)、黒(1631)、白(1632)、黒(1633)、白(1634)、黒(1635)、白(1636)、黒(1637)、白(1638)、黒(1639)、白(1640)、黒(1641)、白(1642)、黒(1643)、白(1644)、黒(1645)、白(1646)、黒(1647)、白(1648)、黒(1649)、白(1650)、黒(1651)、白(1652)、黒(1653)、白(1654)、黒(1655)、白(1656)、黒(1657)、白(1658)、黒(1659)、白(1660)、黒(1661)、白(1662)、黒(1663)、白(1664)、黒(1665)、白(1666)、黒(1667)、白(1668)、黒(1669)、白(1670)、黒(1671)、白(1672)、黒(1673)、白(1674)、黒(1675)、白(1676)、黒(1677)、白(1678)、黒(1679)、白(1680)、黒(1681)、白(1682)、黒(1683)、白(1684)、黒(1685)、白(1686)、黒(1687)、白(1688)、黒(1689)、白(1690)、黒(1691)、白(1692)、黒(1693)、白(1694)、黒(1695)、白(1696)、黒(1697)、白(1698)、黒(1699)、白(1700)、黒(1701)、白(1702)、黒(1703)、白(1704)、黒(1705)、白(1706)、黒(1707)、白(1708)、黒(1709)、白(1710)、黒(1711)、白(1712)、黒(1713)、白(1714)、黒(1715)、白(1716)、黒(1717)、白(1718)、黒(1719)、白(1720)、黒(1721)、白(1722)、黒(1723)、白(1724)、黒(1725)、白(1726)、黒(1727)、白(1728)、黒(1729)、白(1730)、黒(1731)、白(1732)、黒(1733)、白(1734)、黒(1735)、白(1736)、黒(1737)、白(1738)、黒(1739)、白(1740)、黒(1741)、白(1742)、黒(1743)、白(1744)、黒(1745)、白(1746)、黒(1747)、白(1748)、黒(1749)、白(1750)、黒(1751)、白(1752)、黒(1753)、白(1754)、黒(1755)、白(1756)、黒(1757)、白(1758)、黒(1759)、白(1760)、黒(1761)、白(1762)、黒(1763)、白(1764)、黒(1765)、白(1766)、黒(1767)、白(1768)、黒(1769)、白(1770)、黒(1771)、白(1772)、黒(1773)、白(1774)、黒(1775)、白(1776)、黒(1777)、白(1778)、黒(1779)、白(1780)、黒(1781)、白(1782)、黒(1783)、白(1784)、黒(1785)、白(1786)、黒(1787)、白(1788)、黒(1789)、白(1790)、黒(1791)、白(1792)、黒(1793)、白(1794)、黒(1795)、白(1796)、黒(1797)、白(1798)、黒(1799)、白(1800)、黒(1801)、白(1802)、黒(1803)、白(1804)、黒(1805)、白(1806)、黒(1807)、白(1808)、黒(1809)、白(1810)、黒(1811)、白(1812)、黒(1813)、白(1814)、黒(1815)、白(1816)、黒(1817)、白(1818)、黒(1819)、白(1820)、黒(1821)、白(1822)、黒(1823)、白(1824)、黒(1825)、白(1826)、黒(1827)、白(1828)、黒(1829)、白(1830)、黒(1831)、白(1832)、黒(1833)、白(1834)、黒(1835)、白(1836)、黒(1837)、白(1838)、黒(1839)、白(1840)、黒(1841)、白(1842)、黒(1843)、白(1844)、黒(1845)、白(1846)、黒(1847)、白(1848)、黒(1849)、白(1850)、黒(1851)、白(1852)、黒(1853)、白(1854)、黒(1855)、白(1856)、黒(1857)、白(1858)、黒(1859)、白(1860)、黒(1861)、白(1862)、黒(1863)、白(1864)、黒(1865)、白(1866)、黒(1867)、白(1868)、黒(1869)、白(1870)、黒(1871)、白(1872)、黒(1873)、白(1874)、黒(1875)、白(1876)、黒(1877)、白(1878)、黒(1879)、白(1880)、黒(1881)、白(1882)、黒(1883)、白(1884)、黒(1885)、白(1886)、黒(1887)、白(1888)、黒(1889)、白(1890)、黒(1891)、白(1892)、黒(1893)、白(1894)、黒(1895)、白(1896)、黒(1897)、白(1898)、黒(1899)、白(1900)、黒(1901)、白(1902)、黒(1903)、白(1904)、黒(1905)、白(1906)、黒(1907)、白(1908)、黒(1909)、白(1910)、黒(1911)、白(1912)、黒(1913)、白(1914)、黒(1915)、白(1916)、黒(1917)、白(1918)、黒(1919)、白(1920)、黒(1921)、白(1922)、黒(1923)、白(1924)、黒(1925)、白(1926)、黒(1927)、白(1928)、黒(1929)、白(1930)、黒(1931)、白(1932)、黒(1933)、白(1934)、黒(1935)、白(1936)、黒(1937)、白(1938)、黒(1939)、白(1940)、黒(1941)、白(1942)、黒(1943)、白(1944)、黒(1945)、白(1946)、黒(1947)、白(1948)、黒(1949)、白(1950)、黒(1951)、白(1952)、黒(1953)、白(1954)、黒(1955)、白(1956)、黒(1957)、白(1958)、黒(1959)、白(1960)、黒(1961)、白(1962)、黒(1963)、白(1964)、黒(1965)、白(1966)、黒(1967)、白(1968)、黒(1969)、白(1970)、黒(1971)、白(1972)、黒(1973)、白(1974)、黒(1975)、白(1976)、黒(1977)、白(1978)、黒(1979)、白(1980)、黒(1981)、白(1982)、黒(1983)、白(1984)、黒(1985)、白(1986)、黒(1987)、白(1988)、黒(1989)、白(1990)、黒(1991)、白(1992)、黒(1993)、白(1994)、黒(1995)、白(1996)、黒(1997)、白(1998)、黒(1999)、白(2000)、黒(2001)、白(2002)、黒(2003)、白(2004)、黒(2005)、白(2006)、黒(2007)、白(2008)、黒(2009)、白(2010)、黒(2011)、白(2012)、黒(2013)、白(2014)、黒(2015)、白(2016)、黒(2017)、白(2018)、黒(2019)、白(2020)、黒(2021)、白(2022)、黒(2023)、白(2024)、黒(2025)、白(2026)、黒(2027)、白(2028)、黒(2029)、白(2030)、黒(2031)、白(2032)、黒(2033)、白(2034)、黒(2035)、白(2036)、黒(2037)、白(2038)、黒(2039)、白(2040)、黒(2041)、白(2042)、黒(2043)、白(2044)、黒(2045)、白(2046)、黒(2047)、白(2048)、黒(2049)、白(2050)、黒(2051)、白(2052)、黒(2053)、白(2054)、黒(2055)、白(2056)、黒(2057)、白(2058)、黒(2059)、白(2060)、黒(2061)、白(2062)、黒(2063)、白(2064)、黒(2065)、白(2066)、黒(2067)、白(2068)、黒(2069)、白(2070)、黒(2071)、白(2072)、黒(2073)、白(2074)、黒(2075)、白(2076)、黒(2077)、白(2078)、黒(2079)、白(2080)、黒(2081)、白(2082)、黒(2083)、白(2084)、黒(2085)、白(2086)、黒(2087)、白(2088)、黒(2089)、白(2090)、黒(2091)、白(2092)、黒(2093)、白(2094)、黒(2095)、白(2096)、黒(2097)、白(2098)、黒(2099)、白(2100)、黒(2101)、白(2102)、黒(2103)、白(2104)、黒(2105)、白(2106)、黒(2107)、白(2108)、黒(2109)、白(2110)、黒(2111)、白(2112)、黒(2113)、白(2114)、黒(2115)、白(2116)、黒(2117)、白(2118)、黒(2119)、白(2120)、黒(2121)、白(2122)、黒(2123)、白(2124)、黒(2125)、白(2126)、黒(2127)、白(2128)、黒(2129)、白(2130)、黒(2131)、白(2132)、黒(2133)、白(2134)、黒(2135)、白(2136)、黒(2137)、白(2138)、黒(2139)、白(2140)、黒(2141)、白(2142)、黒(2143)、白(2144)、黒(2145)、白(2146)、黒(2147)、白(2148)、黒(2149)、白(2150)、黒(2151)、白(2152)、黒(2153)、白(2154)、黒(2155)、白(2156)、黒(2157)、白(2158)、黒(2159)、白(2160)、黒(2161)、白(2162)、黒(2163)、白(2164)、黒(2165)、白(2166)、黒(2167)、白(2168)、黒(2169)、白(2170)、黒(2171)、白(2172)、黒(2173)、白(2174)、黒(2175)、白(2176)、黒(2177)、白(2178)、黒(2179)、白(2180)、黒(2181)、白(2182)、黒(2183)、白(2184)、黒(2185)、白(2186)、黒(2187)、白(2188)、黒(2189)、白(2190)、黒(2191)、白(2192)、黒(2193)、白(2194)、黒(2195)、白(2196)、黒(2197)、白(2198)、黒(2199)、白(2200)、黒(2201)、白(2202)、黒(2203)、白(2204)、黒(2205)、白(2206)、黒(2207)、白(2208)、黒(2209)、白(2210)、黒(2211)、白(2212)、黒(2213)、白(2214)、黒(2215)、白(2216)、黒(2217)、白(2218)、黒(2219)、白(2220)、黒(2221)、白(2222)、黒(2223)、白(2224)、黒(2225)、白(2226)、黒(2227)、白(2228)、黒(2229)、白(2230)、黒(2231)、白(2232)、黒(2233)、白(2234)、黒(2235)、白(2236)、黒(2237)、白(2238)、黒(2239)、白(2240)、黒(2241)、白(2242)、黒(2243)、白(2244)、黒(2245)、白(2246)、黒(2247)、白(2248)、黒(2249)、白(2250)、黒(2251)、白(2252)、黒(2253)、白(2254)、黒(2255)、白(2256)、黒(2257)、白(2258)、黒(2259)、白(2260)、黒(2261)、白(2262)、黒(2263)、白(2264)、黒(2265)、白(2266)、黒(2267)、白(2268)、黒(2269)、白(2270)、黒(2271)、白(2272)、黒(2273)、白(2274)、黒(2275)、白(2276)、黒(2277)、白(2278)、黒(2279)、白(2280)、黒(2281)、白(2282)、黒(2283)、白(2284)、黒(2285)、白(2286)、黒(2287)、白(2288)、黒(2289)、白(2290)、黒(2291)、白(2292)、黒(2293)、白(2294)、黒(2295)、白(2296)、黒(2297)、白(2298)、黒(2299)、白(2300)、黒(2301)、白(2302)、黒(2303)、白(2304)、黒(2305)、白(2306)、黒(2307)、白(2308)、黒(2309)、白(2310)、黒(2311)、白(2312)、黒(2313)、白(2314)、黒(2315)、白(2316)、黒(2317)、白(2318)、黒(2319)、白(2320)、黒(2321)、白(2322)、黒(2323)、白(2324)、黒(2325)、白(2326)、黒(2327)、白(2328)、黒(2329)、白(2330)、黒(2331)、白(2332)、黒(2333)、白(2334)、黒(2335)、白(2336)、黒(2337)、白(2338)、黒(2339)、白(2340)、黒(2341)、白(2342)、黒(2343)、白(2344)、黒(2345)、白(2346)、黒(2347)、白(2348)、黒(2349)、白(2350)、黒(2351)、白(2352)、黒(2353)、白(2354)、黒(2355)、白(2356)、黒(2357)、白(2358)、黒(2359)、白(2360)、黒(2361)、白(2362)、黒(2363)、白(2364)、黒(2365)、白(2366)、黒(2367)、白(2368)、黒(2369)、白(2370)、黒(2371)、白(2372)、黒(2373)、白(2374)、黒(2375)、白(2376)、黒(2377)、白(2378)、黒(2379)、白(2380)、黒(2381)、白(2382)、黒(2383)、白(2384)、黒(2385)、白(2386)、黒(2387)、白(2388)、黒(2389)、白(2390)、黒(2391)、白(2392)、黒(2393)、白(2394)、黒(2395)、白(2396)、黒(2397)、白(2398)、黒(2399)、白(2400)、黒(2401)、白(2402)、黒(2403)、白(2404)、黒(2405)、白(2406)、黒(2407)、白(2408)、黒(2409)、白(2410)、黒(2411)、白(2412)、黒(2413)、白(2414)、黒(2415)、白(2416)、黒(2417)、白(2418)、黒(2419)、白(2420)、黒(2421)、白(2422)、黒(2423)、白(2424)、黒(2425)、白(2426)、黒(2427)、白(2428)、黒(2429)、白(2430)、黒(2431)、白(2432)、黒(2433)、白(2434)、黒(2435)、白(2436)、黒(2437)、白(2438)、黒(2439)、白(2440)、黒(2441)、白(2442)、黒(2443)、白(2444)、黒(2445)、白(2446)、黒(2447)、白(2448)、黒(2449)、白(2450)、黒(2451)、白(2452)、黒(2453)、白(2454)、黒(2455)、白(2456)、黒(2457)、白(2458)、黒(2459)、白(2460)、黒(2461)、白(2462)、黒(2463)、白(2464)、黒(2465)、白(2466)、黒(2467)、白(2468)、黒(2469)、白(2470)、黒(2471)、白(2472)、黒(2473)、白(2474)、黒(2475)、白(2476)、黒(2477)、白(2478)、黒(2479)、白(2480)、黒(2481)、白(2482)、黒(2483)、白(2484)、黒(2485)、白(2486)、黒(2487)、白(2488)、黒(2489)、白(2490)、黒(2491)、白(2492)、黒(2493)、白(2494)、黒(2495)、白(2496)、黒(2497)、白(2498)、黒(2499)、白(2500)、黒(2501)、白(2502)、黒(2503)、白(2504)、黒(2505)、白(2506)、黒(2507)、白(2508)、黒(2509)、白(2510)、黒(2511)、白(2512)、黒(2513)、白(2514)、黒(2515)、白(2516)、黒(2517)、白(2518)、黒(2519)、白(2520)、黒(2521)、白(2522)、黒(2523)、白(2524)、黒(2525)、白(2526)、黒(2527)、白(2528)、黒(2529)、白(2530)、黒(2531)、白(2532)、黒(2533)、白(2534)、黒(2535)、白(2536)、黒(2537)、白(2538)、黒(2539)、白(2540)、黒(2541)、白(2542)、黒(2543)、白(2544)、黒(2545)、白(2546)、黒(2547)、白(2548)、黒(2549)、白(2550)、黒(2551)、白(2552)、黒(2553)、白(2554)、黒(2555)、白(2556



㋐十七の三劫提
㋑十八の三粘
㋒十の八同

然らば白に㊉と打たれる手順になるだらう。ソコで㊄に亘らば如何。白が㊅にあやまれば善し、飽くまで劫を爭へば黑は自然㊉の白を攻めつゝ利益を得る成行になるであらう。

甲圖



㊀の手で㊂へ綽ね白㋑、黑㊀の行びとなれば細碁にはなるが勝敗は分らないから騎虎の勢ひ止むを得ず㊀と打ち㊄と頂けて飽迄戰ふ方針を執つたであらう。ソコで㊀と強硬に引かれては最早や地が足らないから㊁と引いて勝敗を一擧に決する外はない。㊃の押込みは實に面白い手筋である。若し此の手筋がなかつたならば白は外に活路なく確に全軍滅亡であつた。是れ又黑の意外であらう。扨て其時黑㊅に約へるとせんか、白×印に突當るべく、黑㊄に行びなば白㊅、黑㊃、白㊆の亘となつて活きられるし、又黑㊄に行びずして直ちに㊃に切るとせば則ち甲圖の如くなるのである。圖中黑㊄に尖まずして㋑印に出れば白㋒黑㋑に頂けた時白×印を切るべく、黑亦㋔に切らば白㋓に當てるが宜い。事茲に至つては黑は如何とも致方がなかるべく、投げる外はないのである。之を要するに黑は㊄㊅の失着に依つて殆ど先着の効力を失ひ最後に白に㊃と突出された、結果さん〴〵自己の領域を荒らされた敵全隊に活きられて中押負けと確定したのである。

家康の保護

碁打衆將棊衆扶持方給候事

一五十石五人扶持　本因坊
一五十石五人扶持　利賢
一五十石五人扶持　宗桂
一五十石　道碩
一五十石　春知
一二十石　仙重
一三十石　九藏
一二十石　算碩

可毎年京桝を以て相渡侍衆手形を取置き江戸勘定可致相定候以上

碁聖秀策百番碁（五）

四段　葛野忠左衛門

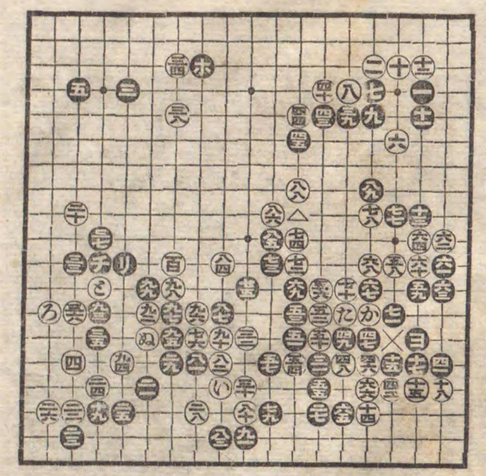
相先

先番　四段　安田秀策（二目勝）

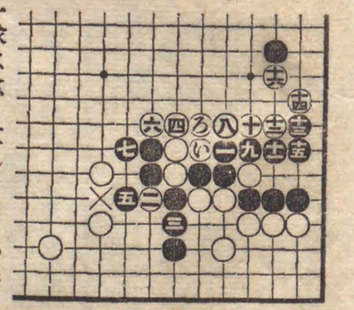
（天保十四年十月六日）

▲第一圖　㊂、顧みて他を言ふ　本局は黑白與に非常に身の入つた碁で龍驤虎搏、機に臨み變に應ずる非凡の手腕、眞に見應へある激戰である。㊅より㊀まで是れ亦一の趣向で、單に此一局部に就て云へば白の方が多少割が惡いのである。㊅は餘りに敵壘に接近し過ぎて居る。一路高く㋑に打つ方が無難である。㊂は打過ぎである。㊄に掛けて充分ではないか。其時白普通の如く㋒に應ずれば黑轉じて㋔の大塲を占むべく、先着の効力を發揮し得て餘りある形勢である。然

第一圖



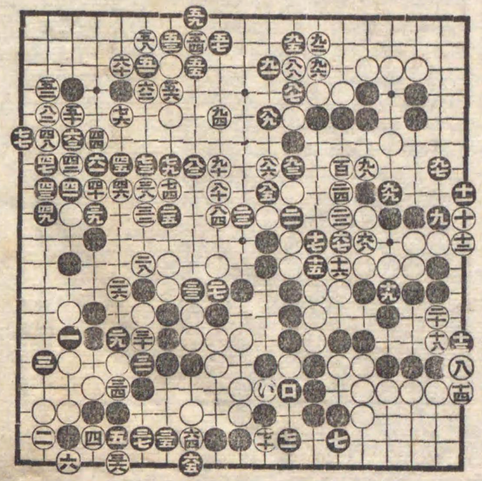
甲圖



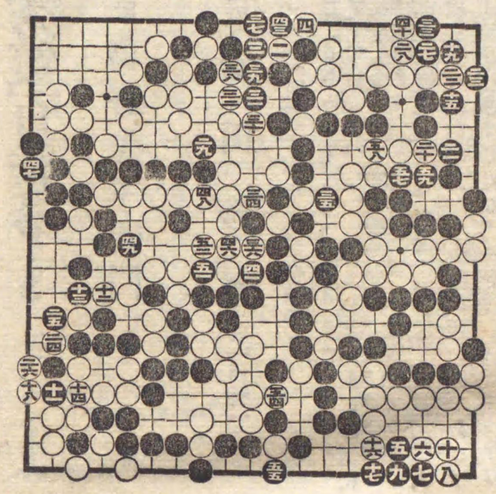
るに白が㊂の打込に應答せずして悠々㊂と顧みて他を言ふ態度に出たのは其意を得ない。今や左邊は事急なり、直ちに㋓に迫り黑㋖に押した時㋗に飛ぶべきである。黑は前後共に事、急になるではないか、萬一黑尙ほも㋐抔へ行びもせば白に㋙へ打たれて㋘以下一隊は愈〻忙しくなる。斯う云ふ成行になる處だから㊂の打込は打過ぎであると云つたのである。㊃は惡手で㊃と交換した爲めに碁勢が非常に急になつて來た。單に㊃に押すに若くはない。㊂、㊄の趣向は宜しくない。×印を切る方が宜い。其時黑㊀に一子を抱へるとせば則ち白㋕、黑㊁、白㋖と絞り黑×印に粘いだ時㊂を切るも善し、又㋗に飛んで㊂の切りと㊄に打つ手とを狙つても宜い。又黑㊀に一子を抱へずして㋕に行びるとせば則ち甲圖の如く白の方が甚だ優勢である。或は又甲圖の㋘にも抱へず㋑にも行びず㋒へ綽ねるとせんか、白㋑、黑㋑、白㋒となるべく、斯くては黑は上下共に缺陷だらけであるから如何に變化しても所謂「アマリ」の姿で黑の方が惡い、黑㋖の手で△印を切るも面白い。

▲第二圖　眼覺ましき激戰　㋓は止むを得ない。然らずば㋑に突出され黑㋐の時㋖の處を切られて眼がなくなる形だから斯く守つたであらう。以下實に眼覺しい戰ひで黑白與に善く攻めもし善く凌ぎもした痛快の碁であつた。

第二圖



第三圖



碁聖秀策百番碁（六）

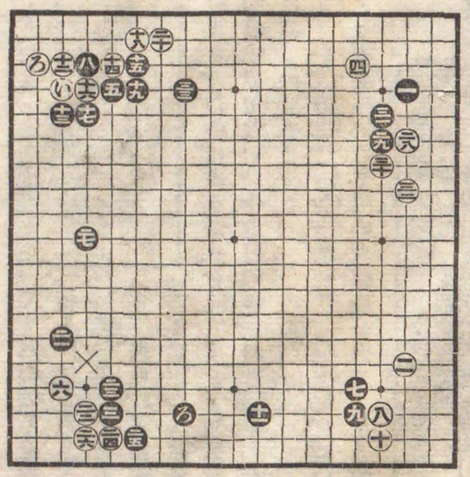
忠左衞門改

六段 水谷順策

先 安田秀策（十五目勝）

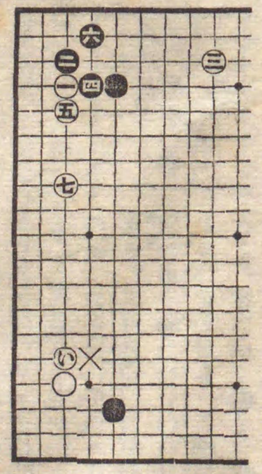
（弘化元年甲辰二月五日）

第一圖

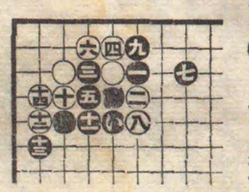


▲第一圖㊀は悪手　㊃と懸かるは往々見受ける處であるが、併し圖の如く㊄と打たれた形勢を看よ、黒は三隅の根據地に據れるに反し白は一隅に據り而して㊁と何等の聯絡もなく孤軍を以て右上隅に懸つて居ると云ふ有様ではないか。從つて碁勢が狹く趣向をする餘地が少くなるから此場合左上隅の明隅に據るのが布石の常道である。㊂此手でい印に這入ると察するに黒㊂、白ろ、黒㊇と頂け引かれて工合が悪いし、左りとて甲圖の如き定石に打つとせば黒から直ちに×印へ懸けられて㊈に匍はせられて㊂と這入つたのであらう。是又一の趣向には相違ないが、夫れよりは單に甲圖×印へ尖んで居る方が碁勢が廣い。㊂は昔時の定石であるが、今日に於ては悪手であると云ふ定論になつて居る。然らばドウ打つが善いかと云へば乙圖の如く打つに若くはない。又黒が㊂の手で單に㊈に立つ定石もあるけれども夫れは㊁の一子が「してう」で取れる場合に限るので、本局の如く「してう」の當りあるにも拘はらず漫然黒㊈杯に立たんには其結果は丙圖の如く㊂㊄と何處までも匍はせられては堪らない。要するに本局の如き場合に於て㊂と崖邊へ匍出し㊁と夾まれた結果を看れば黒㊂の夾みは㊂㊆等の堅壁と相俟つて間合ひ甚だ宜しく正々堂々の陣形を成せるに反し上邊に於ける㊂以下の白圖は海岸に密集し而して㊅の一子は兩方から攻められて居ると云ふ不利の形勢ではないか。殊に此場合㊂と籠城策を取つたのは益〻感服することが出來ない。是れも無い形ではないが、夫れはろ邊に黒の備へがあつて、外へ出ても利益がなく敵の姿が「コリ」になると云ふ場合に用ゆべき手段である。此場合に於ては㊂へ頂け

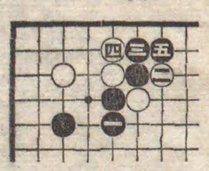
甲圖



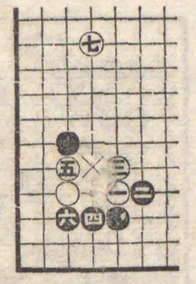
乙圖



丙圖



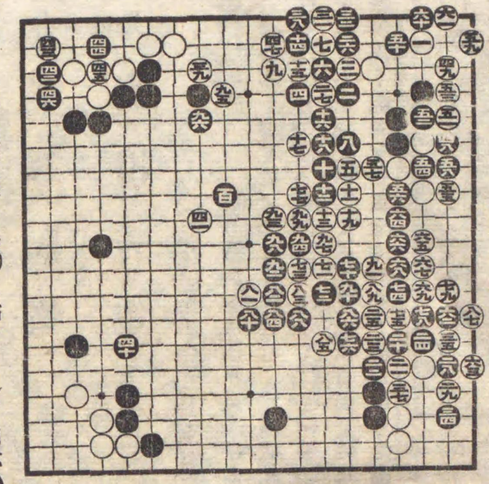
丁圖



て丁圖の如く交換して㊆と打つ杯も一策であらう。左もなくば×印へ尖んで居る方が優つて居る。然るに黒に本圖㊂と備へらるゝに至つては最早や戰局の形勢定まる。如何に神算奇謀を運らすとも頽勢を挽回することは容易の業でない。十五目の敗因は此兩隅の作戰計畫の非なるに基くのである。

▲第二圖 **大勢既に定まる** ㊀は甚だ低い手である。左邊より下邊へ掛けて黒の大模様が出來て居る場合であるから其釣合ひを取るべく、㊄に飛ぶ方が宜い。㊈と劫に受けたのは意味がある。此場合㊂に粘ぐのは㊈の處を截る意味でなければならぬ。處が假に黒㊂に粘ぐとして白亦㊁に粘ぎ、黒㊈に截つた時白に㊈の處を截られて凌がれる手段があるから黒は夫れを慮つて圖の如く㊈と劫に受けたのである。㊉は㊇に飛ふか然らずんば㊇に斜走する方が宜い。何れにしても

第二圖



●劫とる
同
同

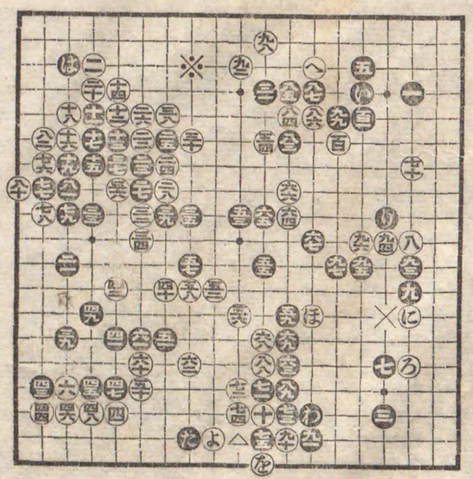
大勢は既に定まつて居るのだから互角の力量では到底挽回の望みはない。

碁聖秀策百番碁（七）

七段 太田雄藏
五段 安田秀策（先、三目勝）

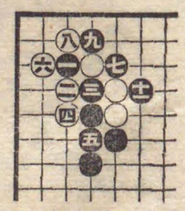
（天保十四癸卯閏九月十一日）

第一圖 ㊉以下畧（黒三目勝）

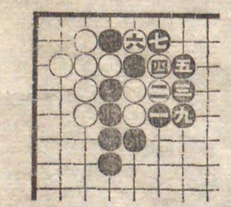


▲第一圖 ㊈は古風の定石 本圖の如く黒に㊄、㊆と兩締りをされたのは損である。㊍の手で、㊄に掛かるか或は㊋に掛かるか、孰れか一方に掛かるを普通としてあるが、蓋し趣向で打つたであらう。㊄は同じ事ならば㊋印に締る方が宜い。是れは毎度言ふた通り白が㊋印に掛つた時㊎に夾む手が釣合が好いからである。㊉は趣向でもあらうが、㊆に拆くが普通である。㊈、㊇は定石とは云ふものゝ古風である。圖の如く㊂までの定石になつては黒の方は收まつて樂になる。因つて㊈の手で㊂に打つのが當時流行の手である。其時黒㊌印に頂ければ即ち甲圖の如くなるのが普通である。斯くて㊂の手で第一圖×印に「してう」の當りを打つべく、左すれば黒は二目を取つて居なければならぬ。ソコで白㊋印に㊇の一子を約へ込むと云ふ手順になるのである。さうなつては白の方が割合ひがよい。勿論黒に於ては二目を「してう」に取らぬ打方もある。夫れは乙圖の如く打つのであるが、左すれば白が先手で㊆の處に拆くと云ふ手順になる。㊂以下㊆まで時機尚ほ早し、矢張り㊆に拆くが宜いと思ふ。㊎は如何であらうか。夫れが爲めに㊎と煽られて茲に手厚い封域を作られたのは白の不利であらう。此手で㊌印に飛んで形勢を張つては如何。蓋し黒は㊎に飛ぶ位のものであらう。ソコで白㊆に拆いて居る方がよくはあるまいか。㊎は厚い手ではあるが、併し此場合㊎、㊏と煽つた其の勢力を利用して、㊆に詰めて㊇の白を攻むるも亦た良策である。㊐と引き㊎と變つたのは甚だ面白くない。斯くては稍々黒地が固まる氣味がある。因つて㊐の手で上下の聯絡を保つやう、先づ㊐に覗き黒㊑に粘いだ時、㊆に拆いて居る方が、黒地の上の方が明放しになつて居る丈け面白くはないか。㊑は約十五目位に當る手で、大きいけれども此の場合㊇に打込んで黒の應手を試るは確に一策である。左れば黒㊎に頂けばなるまい。其の結果丙圖の如く打つて先手を取る手段もある。此手順中白㊂の手で

甲圖 ㊂つゞき

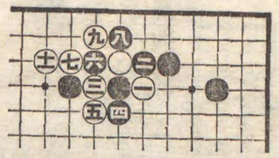


乙圖 ㊅四目つゞき



丙圖

丁圖 ㋐つぐ



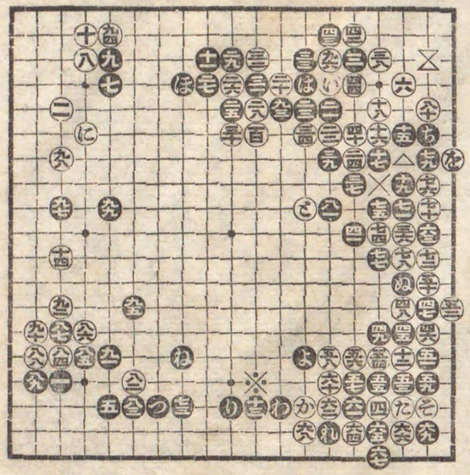
い印抔へ綽ね出すは俗手である。參考の爲め其の成行を示せば丁圖の如くなる。斯うなつては先手は黑の手に歸するから第一圖△印に泳いで然る後或はり印に打つて白を窘める抔種々の手段がある。何れにしても白の方が宜くない。㋩のアテは辛い處である。實は白は△印に唯約へて居たいのである。其時黑はマサカに㋘に粘ぐ譯にも行かないから、結局白㋘、黑㋙、白をとなつて跡にわ印の截りが殘る處だから、さうしたいのは山々であるが、併し此際白が△印に約へるとすれば黑は手を拔いて※印に打つは必定である。是れも又辛い。左りとて△印に約へずして㋙の方に打てば黑は△印に泳いで來る。白よに約へれば黑たに夾むは必然である。是れも白に取つては甚だ辛い。彼此れ已むことを得ず。㋩とアテ㋘と切つて△印に泳いで來る手を防いで置いて轉じて㋙と打つた譯であるが白に勝算のない碁勢である。

碁聖秀策百番碁（八）

七段 太田雄藏
（先）五段 安田秀策 芾

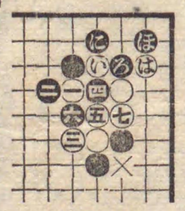
（弘化元年申辰三月十三日）

第一圖 ㋓つぐ



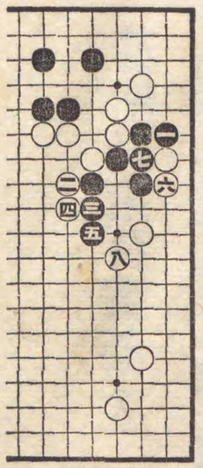
▲第一圖 白㋕に覗く趣向 「㋓ノ拆キハ一得一失ナリ」敢て惡いと云ふ譯ではないが、左すれば白は㋔に尖むであらう。斯くて黑が若し手を拔かんか、白より忽ち㋑印へ懸けられべく、ソコで黑㋓に飛ぶとあつては如何にも位が低くなるから、黑は多くの場合はに受けて居なければならぬ。即ち白に先手で㋔の尖みを利かされる不利がある。然らば㋓の手で㋓に拆いたならばドウか。是れならば㋔の尖みは利かない（黑は手を拔いても差支ない）其の代り白に印に、尖まば如何。黑はマサカには印に圍つて居る譯にも行くまい（是れは如何にもヌルイ手だから）因つて手を拔いて㋓の大場へ拆くとすれば、白が直ぐに遣るかドウかは解らないが、兎に角㋓へ打込まれる不利あるを免かれない。各々一得一失で、ドチラが宜いとも斷言は出來ないが、此場合㋓へ拆くも亦た一策である「㋓ハ須ラク考慮ヲ要スベシ」此手で㋔へ尖むのが普通である。左すれば今言つた通りいの懸けも利けば又㋙との釣合ひも甚だ好い。然るに㋓と締つた爲めに黑㋓、白㋓と交換するや、直ちに㋕と夾まれて、白は甚だ應手に窮して、㋓と頂けたのは兎も角も「㋔一段ノ工夫ヲ要ス」黑に㋕と懸粘がれたのは面白くない。或は㋕の手ではに受けられても白の方が惡い。因つて㋔の手で㋙に頂けてはドウか。其の結果は甲圖の如く振變りとなつて凌ぎ易かるべく、圖中注意すべきはい印のアテである。是れは此場合當てぬ方が宜い。何故かと云ふに若し然らば黑㋑、白㋒の時黑は直ちにろに截り白はの時黑にに印に一目を打拔かれてほの綽ねを含まれる。斯くては白の方が宜しくないから圖の如く單に㋒に粘ぐに若くはない。又黑㋓の手でいへ行びれば白は×印に約へて充分である「㋓ハ筋違ヒナリ」此の場合㋓に打つのが手筋である。時に白㋓に飛ばゞ黑はに押すべく、又白い印の挾間抔に來る手はないが、若し其處へ來るとせば黑はは、㋓とドコまでも突出して宜い「㋓ハ氣拔ケノ手ナリ」此手で㋕に覗いて黑の應手を試みては如何。黑若し△印に粘がば白又㋓に覗くべく、是れが抑も自慢の手で、黑は×印に粘ぐ外はある

甲圖

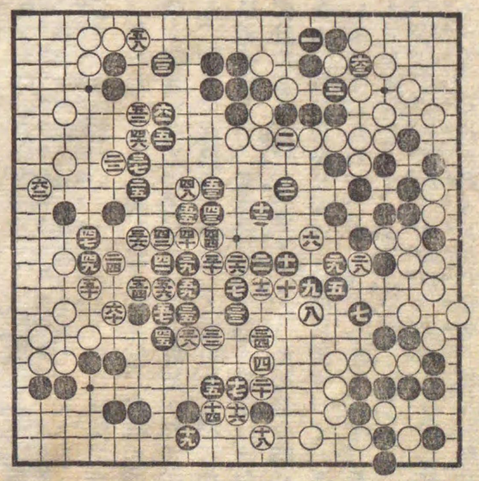


まい。ソコデ白(と)印に掛けてはドウか。又黒△印に粘がずして先づ(元)に當て白(四十)の時黒若し(十六)の方から約へたらば白△印に突込み黒×印に粘いだ時(ち)に曲つて(五)の一子を擒にすべし。斯かれば黒は蓋し(十六)に頂ける位のものであらう。其儘棄置いてピタリと※印に頂けるのが臨機の處置である。其時黒若し(り)印へ引きもせば茲に「してう」の當りが出來る。因つて白は踵(きびす)を回へして(十四)に引くが宜い。黒は(十五)に綽ねる外なかるべく、白(十七)へ綽ね込まば如何。黒(十二)に截らんか、白(十三)に截つて次いで(ぬ)印に(十六)の黒を「してう」に擒にすべく、又黒(十二)に截らずして(十三)に粘ぎもせば白(を)印に亘つて前後に切斷すると云ふ恐るべき手がある。若夫れ黒が此の魂膽を悟つて白が※印に頂けた時(わ)に逆進すれば白は又茲に趣向をすると云ふ計略である。或は又黒△印にも粘がず(十六)にも約へずして(ち)印の方から約へたらば則ち乙圖の如く(八)と尖むのが是れ又頗る洒落れた手である。然るに(三六)と尖み頂けた爲めに(元)、(四)と打たれては最早や急に此黒を攻めることは出來ない。「(四三)ハ一考ヲ要ス」蓋し這は☒印の置き亘りを防ぐ爲めであらうが、若し然らば(元)に覗く手もあり旁々餘り大きい處でないから暫く棄置いて(か)に詰めるが宜い「(四三)ハ良手ニ非ズ」此の場合(六三)へ詰めるに若くはない。左すれば白は(ぬ)に備へるであらう。ソコで左邊に轉じて(九二)へ詰めては如何。今度(九六)の打込みが嚴しくなるではないか「(元)ハ非ナリ」何故にモウ一本(六十)に押さぬのか。ソコで白若し(元)

乙圖



第二圖　百六十三手以下畧(芾)



に截らば(よ)に綽ねて居る方が遙に優つて居る。此邊から碁が段々細かになつて來た。「(六六)ノ掛粘ギハ見合ハスベシ」夫れはドウ云ふ譯かと云ふに、假に白が(十三)の一子を擒にして、此方面が堅くなつた曉は次いで白は(た)に粘ぎ黒(れ)に截つた時(そ)印に約へて劫にする手段があるではないか「(十七)ハ感服セズ」此處は(十四)へ突當るのが形である。左すれば黒は(十五)に備へる外はあるまい。ソコで白(つ)に打込む方が面白くはないか「(十三)考慮ヲ要ス」是れは(九二)へ詰める方が宜い。白若し(十三)へ打込み來らば(ね)印へ「ボウシ」に冠して戰ふ方が面白からう。要するに此碁は實は黒の一目勝に歸すべき碁であつたか、兎に角斯く細碁になつたのは第一圖(元)を最大原因として(十三)の手も亦た幾分の責任を負はねばなるまい。

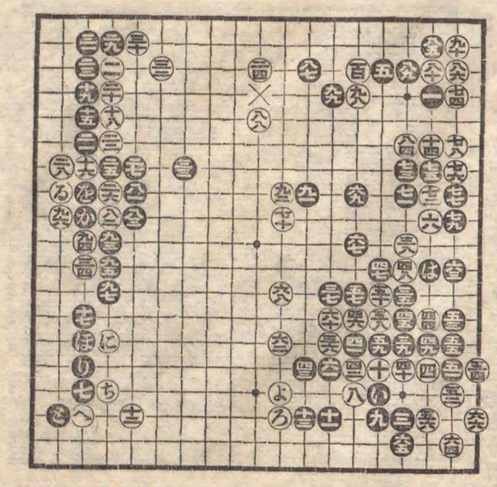
碁聖秀策百番碁（九）

七段　安井算知

五段　安田秀策（先、中押勝）

（天保十四年閏九月十四日）

第一圖



▲第一圖　(十三)と(ろ)の詰め　「(七)ノ變化」是れは普通の手であるが、此の手で先づ(い)印に尖んで白が(四三)に備へた時に(七)に打つも亦た定石である「(九)ハ古風の定石ナリ」昔時は定石として能く行はれたものであるが、今日では(四十)へ頂けて甲圖の如く打つ方が宜いと云ふ定論になつて居る。と云ふのは(十)の白が(い)に在れば(十一)と飛んで差支ないが、一路緩んで居る丈け働かれた姿である。加之ならず(十二)と掛られた結果(ろ)印へ詰められると云ふ嫌な手が生れて來たので、ドウしても(十三)と竝んで居なければならぬ事になつた。乃ち低い處へ幾手も掛けたと云ふのは大變割合ひが惡い譯である。

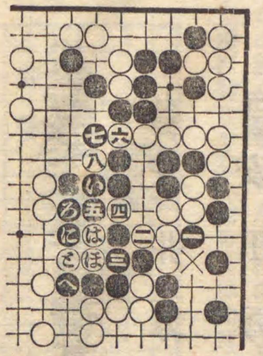
甲圖

(十四)の手で(十六)邊に締るのも大塲であるが、さうすると(は)印へ打込まれるから其の用心かた〴〵圖の如く詰めたのである。「(二四)機宜ニ適ス」、此の隅丈けの定石とすれば(二四)の手で(三六)に掛粘ぐのが普通であるが、併し此の塲合では左下隅には既に(十七)の拆きがあるから(三六)に掛粘いた所が左側方面には最早や發展の餘地が乏しい。且つ黒から×印邊に打たれると此の方面にも亦た發展を妨げられる勘定になるから圖の如く(二四)と拆いたのは白の態度として斯くあるべき事である。併しモ一つ手段がある。夫れは(二四)の手で先づ白(に)、黒(は)、白(へ)、黒(と)、白(ち)、黒(り)と交換し轉じて(元)に下る手段である。左すれば黒(三六)、白(る)黒(を)、白(三五)、黒(九六)、白(三六)、黒(か)の時(二四)に拆くも亦た一の趣向である。其の利害如何と云へば白は(る)の一子を犧牲に供した代りに黒を低く凝らしたから得、失を償つて餘りある形勢である。「(三六)ノ尖ミハ如何」、黒が(四)と頂けて(四三)に粘がせて(八)の一目を愚にし、さうして(四三)と覗いたのは面白い。斯くの如く黒に働かれたのは必竟(三六)の手に原因するのであるから此の手で(四三)の手筋を無くするやう(よ)に打つ方が面白い。

▲第二圖　黒白の見損じ　「(八)ハ見損ジナラン」黒は(九)の手で(元)に當てゝ居れば何でもない。其の時白(ろ)に當てんか、黒(は)、白(十)、黒(に)と後ろから追擊する手あるに非ずや。又白(ろ)に當てずして單に(十)へ綽ね込まんか、黒(四三)に綽ね込むべく是れ又手なしだ。蓋し白が(八)とグズンだのは黒若し手を拔け

第二圖（百六九迄）

甲圖



ば白㋑に綽ね込み黒㋺に亘つた時白㋩印に突張つて劫にする手があるから黒は必ず其の劫の禦ぎをするであらう。因つて白は第一圖㊂㊂㊂のダメ詰まりを利用して逃げ出す手があると見違へたやうに思はれる。黒㋔も亦た同様見損じであらう。何故かと云ふに㋔に突當つてほに雙關（にでうつぎ）されると云ふことは黒の損であるから㋩のグズミに因つて果して脱け出す手段がないとすれば何も㋔と損を先きにして防禦線を張る必要はない。扨て其の見損じ問題は別として黒が㋔と突當つた意味はドウかと云ふに、甲圖㊄の手で×印に當てれば何も手はないのであるが、夫れは初めから見損じて居つたので、圖の如く㊄と外から約へれば㋩と突出して㋩と截られる手があると斯う推量したのではあるまいか。果して然りとすれば黒は㊄と約へずして㋑に緩めなければならぬ。ソコで白がニウッと㊄の處へ出で來た時に黒㋒、白㋭、黒㋩、白㋭、白㋬、白㋮となつて六目を取られて了ふから其の凌ぎをする爲めに㋔と突當つたものと思はれる。次に黒が㋓と取つたのは隨分大膽な手で夫れが爲めに㋓と綽ね㋓と行びられて黒の大部隊は包圍の裡に陷つたけれども巧みに之を凌いだのは鮮かな手際であつた。

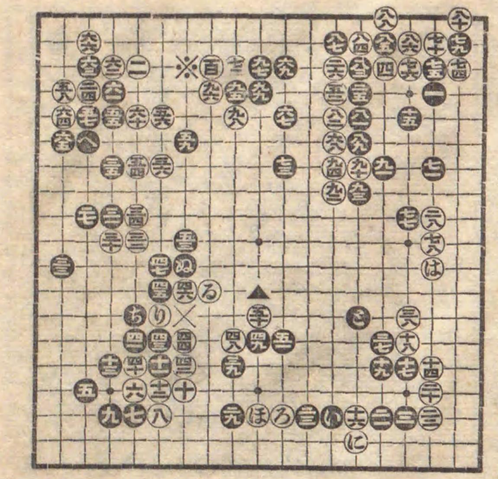
碁聖秀策百番碁（十）

先番　安田秀策（中押勝）

七段　服部正徹

（弘化元年申辰五月八日）

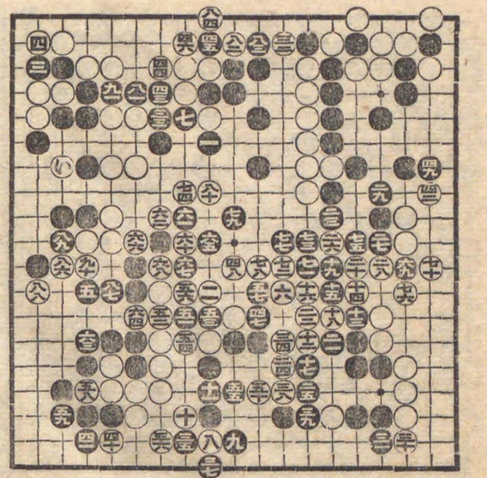
第一圖



▲第一圖　▲印の突撃　「㊄考慮ヲ要ス」是れは普通の手で敢て惡いと云ふではないが、此の場合左下隅に於ける㋩以下㋓までの白に注意を拂はねばならぬ。此の形に於ては白はドウしても㊂の黒を一間、二間、三間、何れに夾むかは當局者の趣向であるが、兎に角之を夾撃かた〴〵下邊に廣く模様を構えねばならぬ恰好である。左れば黒に於ては圖の如く㊄と尖むよりは㋑に二間に拆いて敵の繩張りを妨げる方が急務であらう「㊂ハ如何」圖の如く㊂と隅に實利を占めたとは云ふものゝ、夫れが爲めに㊂と打たれては㋓の一子が殆ど立腐れになるのみか、㋩以下の四子が凝形になつて勢力範圍の大半を失つた姿ではあるまいか。此の場合㊂の手で㋒に拆き黒が㊂に約へた時㋭に拆いては如何。左すれば機を見て㋩へ下る手もあるから其の方が面白くはないかと思ふ「㊄尚早シ」白からほに詰めて來るのは狹くて詰らぬ處であるから㊄は急ぐには及ばぬ。此の場合㋬の大場に詰めて居るに若くはない「㊅惜ムベシ」㊅と押して㊄と行ばしたのは惜い。寧ろ㋮に斜走する方が働きがある。今度黒に㊄へ頂けられては黒の形が益々厚くなる反對に白の位が低くなるから白は矢張り㊄に並んで居ずばなるまい。ソコで黒が㊄に飛んで居る方が面白くはあるまいか「㊃ハ已ムヲ得ズ」此の手で㊃に截らんか、黒に㋮へ行ぶべく、ソコで白りに沿へば黒に㊃へ綽ねられるから白は夫れを嫌つて㊃と押したのは止むを得ない「㊃是レ又已ムヲ得ズ」此手で若しも㋬に綽ねんか、白が㋒へ行びて呉れゝば誂（あつら）へ向きであるが、さうは問屋がおろさない。×印へ棒に粘いで黒㊃に粘いた時りの出截りを狙はれるから圖の如く㊃と行びる外はない。「㊄ハ味消シナリ」此處はいろ〳〵味のある處（一例を擧ぐれば※印へ打つ筋もあり、其他種々の手段がある）だからソッとして置いて▲印に頂けて白の挨拶を聞くが宜い。

▲第二圖　㊄、乾坤一擲の壯擧　「㋩非ナリ」此の場合無論㋮の處に粘いで黒の應手を問ふべきであつた。是れは自家の方の味を無くすると同時に黒の眼を奪ふ手で、中々大きいのである。然るに黒に㋮に截取られたのは惜むべきであつた。

第二圖　㊇㊅の處つゞ　百九十一手



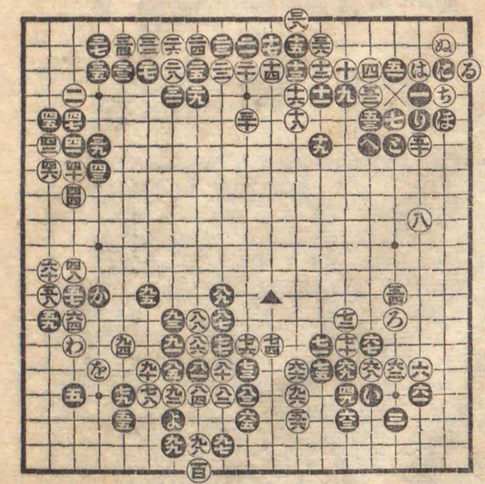
「㊆ハ六ケシ」此の邊が白の最も考慮を要する所である。單に㊂に尖む手段もあるべく、或は又㋑に頂ける手がないでもない。這は即ち棄石で周圍を締付けて㊇の綽ねや其他の味を消さうと云ふ手段で好い手であるが、併し是れは他に種々複雜な關係があるから容易に其利害得失を斷定することは出來ない「㊁惡シ」是れは自らをダメ詰まりにする手で甚だ宜しくない。此の當てさへなからんには白が㊃へ綽ねて來た時に㊂と截ることも出來るのである。單に㊂へ行びて居る方が宜い「㊅乾坤一擲の著子」蓋し全局の形勢を目算するに、㊅の手で㊇に引いて居れば黑に於て㊇㊈の二子を擔ぎ出す手はないが、夫れでは碁が足らぬと見たから㊅と突出して乾坤一擲の壯擧を試みたであらう。果然白は何れか一方を取られることになつて大敗になつたのは蓋し覺悟の前ならん。

碁聖秀策百番碁（十二）

八段　本因坊秀和
先　安田秀策（芾）

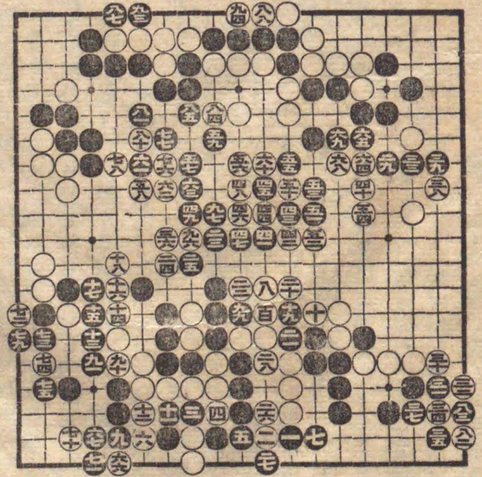
（弘化元年二月十九日）

第一圖

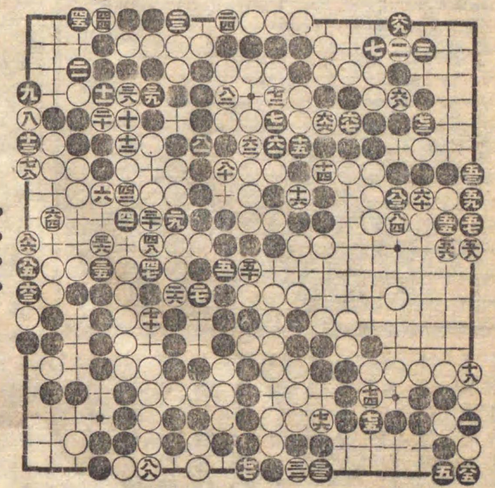


▲第一圖　㊇、白の術中に陷る　「㊂の變化」㊂は固より惡いと云ふではないが、㊀と㊁と同姿勢に在るからは㊂に締るか、或は㊉に、締るか、左もなくば㊂に掛かるか、孰れにしても先きへ手を着ける丈け利益ある道理で、圖の如く㊃と掛られては多少碁勢が廣くなる丈け黑の利益でない。「㊈急ガズ」㊈の掛けは打たぬでも差支ない。單に㋑に尖むか㊉へ斜走するのが普通である。ソコで白が㋑の尖みに對しては㋒又㊉の桂馬に對しては㊂に備へたならば黑は轉じて㊂に掛るのが普通の手順である「㊈ハ趣向ナラン」是れは是非を云ふ限りでないが先づ㊂に約へるのが普通である。其結果白は、黑に、白㊂、黑㊉の綽ねとなるべく、ソコで白が×印へ刺込むとすれば黑に於ては㋩に掛粘ぐか㋐に掛粘ぐか兩樣の手段がある。假に黑㋩に掛粘ぐとすれば白㊂、黑㋑の行びとなつて三目を棄てる事となるべく、又㋐に掛粘げば白㋒、黑㋑、白㋷、黑㋩、白㋐となるのである「㊉ハいかゞ」評者の考へでは㊂に掛りたい。ソコで白が若しも㊉に尖んで㊁の一子を取込めば白は黑の位を低くすべく㋐に掛ける手段に出づべく、又黑㊉に打たずして㋐に尖まば其時こそ白㊉に打たば如何であらうか、其結果圖の如く㊉までの運びとなるとせば白の方が面白いではないか「㊇ハいかゞ」圖の如く㊆、㊇と嚴しく利かされる手があるから㊇に掛るよりは㋐に詰めて居たい「㊅は如何」好い處には違

第二圖　㊅二ノ十七劫提　㊅同　㊆同　㊇同　㊈同



第三圖



一 劫提　二 同　三 同　四 同　五 同　六 同　七 同　八 同　九 同　十 同　十一 同　十二 同　十三 同　十四 同　十五 同　十六 同　十七 同　十八 同　十九 同　二十 同　二十一 同　二十二 同　二十三 同　二十四 劫粘　二十五 十九ノ五粘　二十六 十九ノ十三同

ないが、自分は㋕に行びて居たい「㊄ハ如何」圖の如く㊅を截られた結果㊅と突出されたのは恰も白の趣向に陷つた姿ではあるまいか。自分は此手で㊅へ行びて居る方が打ち宜いと思ふ「㊇ハ損ニ非ザルカ」㊂以下の三目は㋘に覗いて亘る手があるから此際㊇㊈の二目を棄てゝ▲印に飛んで㊄以下の五子を擒にする方が利益であらう。左すれば白が如何に巧に寄せるも芾にされる氣遣ひはないと思ふ。以下は流石に屈指の名手丈けあつて黒白共に寸分の隙もなく打ちつ打たれつ、芾となつた腕前は敬服の外はない。

碁聖秀策百番碁（十二）

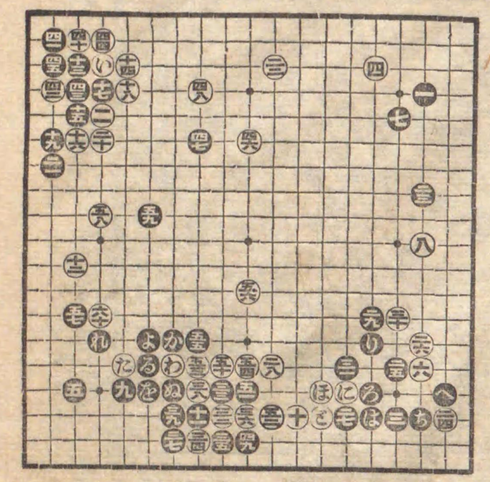
八段 本因坊秀和

先 安田秀策（中押勝）

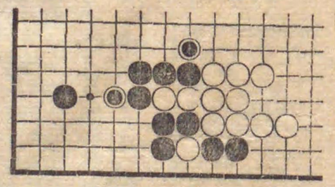
（弘化三年丙午十月二十一日）

▲第一圖 ㊂、應手に窮す「㊉、趣向ナラン」普通㋑に締るを常とすれども、わざと定法を避けて㊉と夾んだものと思はれる「㊏、善シ」㋐に尖むはドウかと云ふに、圖の如く㊏と打つたのは詰り白をして㋐に掛けさせやうと云ふ戰略である。ソコで白若し㋐に掛けんか、黒㋺、白㋑、黒㋓、白㋺、黒㋩と打つべく、又白㋺に緩めずして㋛に突當らば黒は㋚に並ふと云ふ趣向で、是れ又一策である。㊂の手で、×印の肩を衝く抔は素人の遣る手で、決して好い結果を見られない。夫れよりは圖の如く㊂と實利を占めるに若くはない。

第一圖

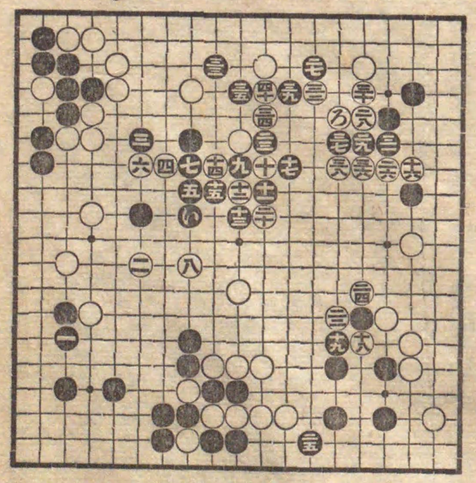


參考圖



「㊃、苦シ」㋐に掛ければ前述の加く應答されて中身を喰はれて了ふし、他にヨリ以上の打場もない。苦心慘憺の結果㊃と打つた苦衷を察せざるを得ない「㊂、働キアリ」此手で㋑に引くは普通であるが、夫れでは働かない。圖の如く㊂と打つたのは如何にも働いて居る「㊄、善シ」此手には流石の秀和先生も應手に窮したであらう「㊅、善シ」此手で㋷抔に取るは凡手である。念の爲め注意して置きたいのは後に白が㋷に㊄の一子を行び出したらばドウかと云ふに、其時黒が㋐抔に掛けて絞る趣向に出づるは往々見受ける處であるが夫れは宜しくない。ナゼかと云ふに絞る結果は參考圖の如くなるべく試に其の形を視よ。●●二子が丸で瘤になつて了ふではないか故に斯う云ふ處は石の無駄にならぬやう黒㋛、白㋔、黒㋕、白㋐、黒㋘、白㋖、黒㋙と打つて形よく絞ると同時に外の方に堅壁を築く心得が肝腎である。

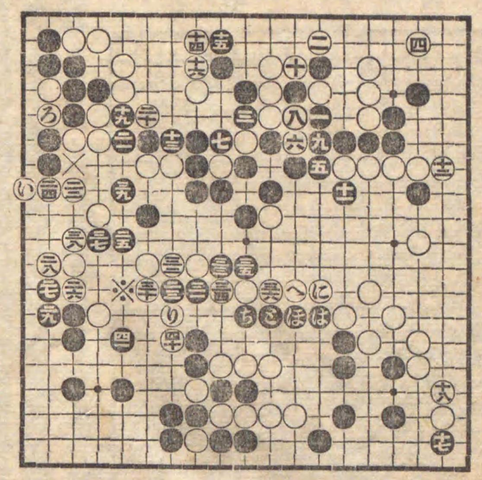
第二圖 ㊂ 劫とる



▲第二圖第三圖 (三六)の變化

第二圖「(三一)ハ如何」圖の如く(七)までの結果は黒が悪い。單に(い)に飛んで居れば無事である。「(三十)ハ如何」(三三)の打込があるから(三十)の手で(ろ)へ行び黒(三)、(三九)白と尖んで(三三)の打込に備へる方が宜い。第三圖(三六)の手で(三七)に約へて居れば活きである。夫は×印の約へが利いて居るからで、其時黒が(三九)抔に尖めば白(い)に下つて(ろ)の截りを狙ふ筋があるから迚も取れない。其代り黒に(は)へ綽ねられ白(に)、黒(は)、白(へ)、黒(さ)、白(三六)、黒(ち)と下の白七目を擒にされる。夫れから(四三)の手で(り)へ綽ね込んで二目を取れば黒に※印へ頂けて斷ち截られて了ふ。兩方を一時に凌ぐ手段はないから投げたのは當然である。

第三圖　四十一手迄



碁聖秀策百番碁（十三）

八段　本因坊秀和

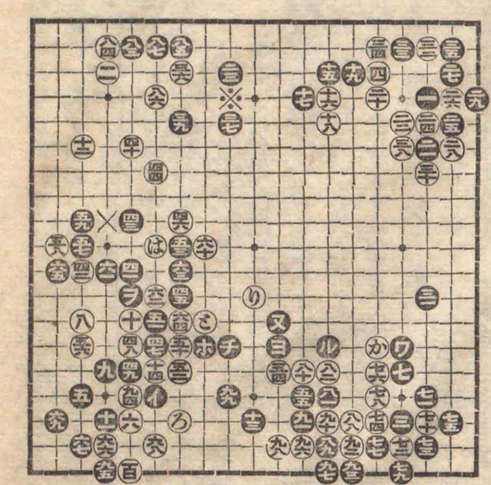
先　安田秀策（六目勝）

（弘化三年十月二十三日）

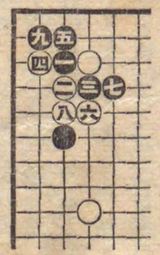
▲第一圖 (四七)と分水嶺

「(十一)ノ變化」本圖の如く打つは即ち定石であるが、(十一)の手で(イ)に懸け、白(ろ)に飛んだ時、白の將さに締らんとしつゝある(十一)へ掛かるも亦た一の趣向である。其時白(十一)の手で×印に打つた碁もある。要するに黒が(十一)と打つたのは甲圖の如く(一)と頂けて振變るのが目的である。「(十四)ノ意味」是れは包圍と謂はんよりは若し之を棄置くと黒から(四七)へ打たれて益々勢力範圍を擴張されるから其の發動を妨ぐる爲めに(十四)と打つたのである。併し此の手で(三)へ懸け黒(二四)、白(三六)、黒(三十)、白※と大規模に構える趣向もある「(四六)ノ狙ヒ」(四五)までの形勢では確に黒の方が優勢である。此處白として誠に打塲のない碁で、苦心慘憺の餘り、(四六)と追隨しては印の覬きを狙つたのであらう。「(四七)、大膽不敵の頂越し」隨分思ひ切つた手である。何故かと云ふに白若し(三十)の手で(三五)へ曲らば黒(三十)、白(六四)、黒(ホ)、白(と)、黒(チ)、白(り)となるものと豫想し而して此處に一大分水嶺を劃し以て未だ生々して居る(四一)、(四三)、(四五)の三子を敵に與へて(又)に打つか或は(ル)邊に構ふかは分らないが、兎に角早く戰局を確定しやうと云ふ策戰で隨分思ひ切つた頂越しである。白もさう遣られては到底勝算がないと目算したから圖の如く(三十)と綽ねたのであらう。尚ほ(四七)の手で(三十)に飛び、白(四七)に添ふた時黒(ヲ)に突當つて居るも好い形であるが、輕く(チ)に飛ぶも亦た趣向であらう。夫れでも矢張り黒の方が優勢である。初心者の注意までに(四一)、(四三)の二子は白が(は)印に覬いてからでなくては之を切離すことは出來ない。夫れから(六四)の粘ぎであるが、是れ又參考の爲めに(六四)に粘いだらばドウかと云ふに、若し然らば乙圖の如くなつて外部の黒全隊を擒にされる。夫故に圖の如く二目を棄てゝ(六五)と振變られた結

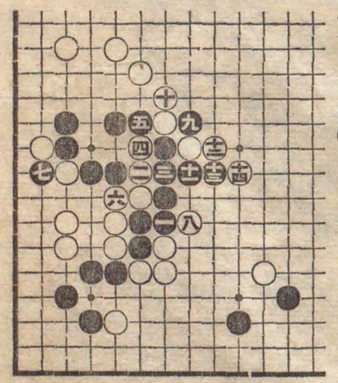
第一圖



甲圖



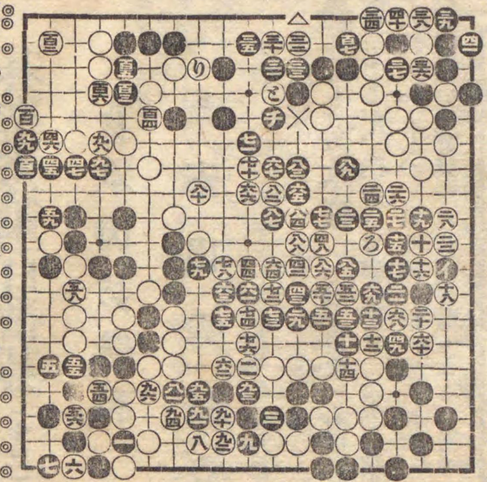
乙圖



果白(五四)の一子が遊んで了つた。詰り(六六)の手で必要のない處に(五四)と打つて(五五)と交換した割合で、此別れは白の方が面白くない「(七七)ハ如何」此手で(八十)に押して白の様子を見る方が宜くはあるまいか。ソコで白(七六)に粘げば黑は(ウ)に行ぶべく、又白(七六)に粘がずして(か)に行びなば(ヨ)に綽ねる方が優つて居る「(九六)ハ見損ジナラン」蓋し白は(九七)と尖まれる手を見損じたであらう。左もなくば(九六)と持込む道理はない。

▲第二圖 (三十)の變化 「(五五)ハ如何」(六六)までの結果大分黑は損をした。是で作り碁になつたであらう。因て單に(六六)に引いて居れば圖の如くなるよりは優つて居る「(三十)ノ變化」圖の如く(三十)、(三二)と並ぶ結果後に黑に(三七)に約へて取られる手順になる。夫れは八目の手で小さくはない。此際(三)に置いてはドウか。白は無論(三)に粘がずばなるまい。白(と)に押さば如何。黑(チ)なれば白(三十)に下つて×印の截りと△印の盤りを狙ふべく、又黑(チ)に綽ねず(三十)に綽ねなば白(三五)、黑△印、白(り)と突當る手がある。黑は如何に應手するか、一寸窮するであらう。

第二圖 (四)劫とる



碁聖秀策百番碁（十四）

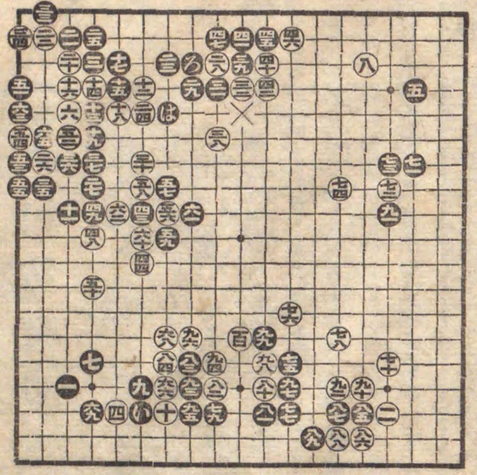
八段 本因坊秀和

先 碁聖秀策（四目勝）

（嘉永四年十月二十二日）

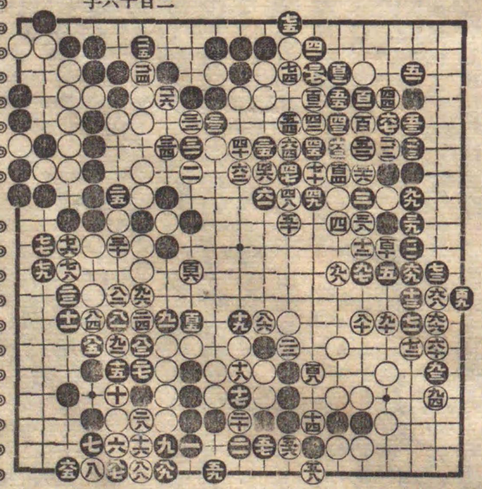
▲第一圖 (五二)振變りの得失 「(九)ハ如何」單に(十一)へ夾むのが近時の型である。併し圖の如く掛けたからとて決して惡いと云ふではないが、或は白に手を拔かれて(十一)の處へ析かれ黑(ハ)の時白に(十)に締る抔其他種々の趣向をされることを豫想せねばならぬ「(六)ノ變化」此手で黑(三)へ綽ね、白(五四)、黑(ろ)、白(三)、黑(は)と頂けて打つ趣向もある。是れならば下の方に何の味もなくなつて了ふ「(五)ハ如何」圖の如く(五)と打つた結果(五六)と封鎖されたのは感心しない。黑は(六六)以下の白十目を取つたとは云ふものゝ、詰り(五五)、(六六)、(六五)の三手掛りであるから此振變りは決して利益とは謂はれない。評者は(五)の手で單に(六)へ飛んで×印の綽ね出しと(六六)の壓迫を睨みたい。即ち黑が(六)に飛ぶとすれば白は(三)に粘いで完全に活きて居ずばなるまい。ソコで黑(六六)に壓付け白(六五)、黑(六五)と壓付けなば如何。(四四)以下の三子は孤軍、敵地深く彷徨ふ姿となるのみか、×印の綽ね出しが愈々嚴しくなるではないか。

第一圖 (六四)劫とる



▲第二圖 (十四)、勝敗の決 「(十四)ハ如何」此の手で(三)に約へて居るのは非常に大きい。然らずんば白(三六)に截り黑(九六)に取つた時白(三)へ行びて居れば白の方が慥に優勢である味の宜い處ではあるが(十四)と取つたのは感服しない。以下黑白の手練毫も間然する所なく、さすがに嘉永年間の名手、敬服の外はない。

第二圖 (三十六の十九つぐ 二百十六手)



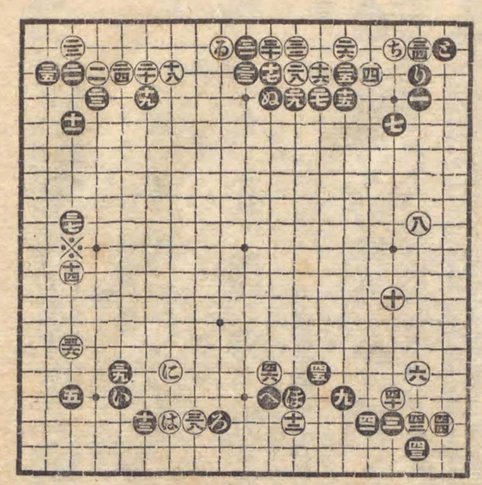
碁聖秀策百番碁（十五）

八段 本因坊秀和

先 碁聖秀策（三目勝）

（嘉永四年十月二十八日打掛
同五年三月二十五日終局）

第一圖



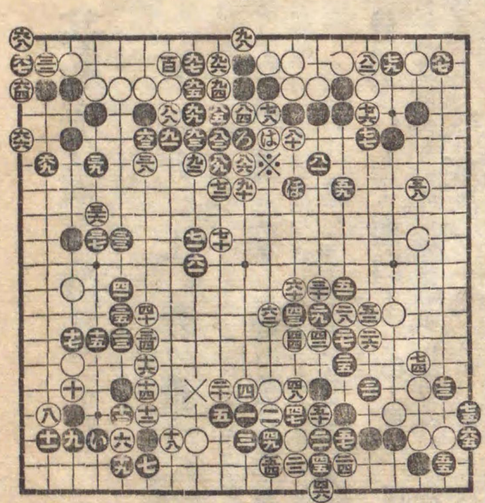
▲第一圖 **黒㊂の大疑問** 「黒㊂ノ變化」圖の如く締るのは普通であるが、此手で高くゐに締る趣向もある。左すれば今度ろの詰めが最急の大場となるから白は何とか處置をしなければならぬ。假に白はへ一ぱいに詰めるとせば黒は直ちにろに打込むべく、白にへ飛び出せば黒ほに頂けるかへに引ッ掛けるか、兎に角此處で白を攻立てるのである。又白はへ詰めずして、ろへ二間に拆くとすれば黒は手を拔いて※印邊へ拆くのである。其の何れに出づるかは當局其人の趣向である。

▲第二圖 **黒㊀の英斷** 「黒㊀の深慮」此處で秀策さんも大いに考へたであらう。奮勵一番㊀と敵陣を衝いて行つたのは愼思熟慮、神算定まつた結果と推測される「七ノ變化」此手で㊂へ突當ると白七、黒ゐ、白×印と打つ筋がある。夫故に黒は七と下つたのであらう。黒五までの結果を見ると白地を荒らされた上に黒地が出來さうになつて來たから白は何とか趣向をせねばならぬ。乃ち六、八と強襲を試みて振替る手段に出たのは頗る巧妙なる手段であつた。一三五の持込みもヒドイが七と取切られたも隨分ヒドイ「黒㊂ノ變化」此手でろに突出し白はの時黒ほに尖みを利かせる手がある。ソコで白㊃を截れば黒㊄に曲るべく、白※印に粘いだ時黒㊂に一子を打拔いて活きる手があるから云ふ理詰めの處であるから此場合黒が㊂と突出してりの突當りを失ふ譯がない。云ふことは明に推測される以下白㊇までの形勢を見ると黒㊂の損失が少からぬので殆ど釣合つて來た碁になつた。

第二圖

劫と
なる

同

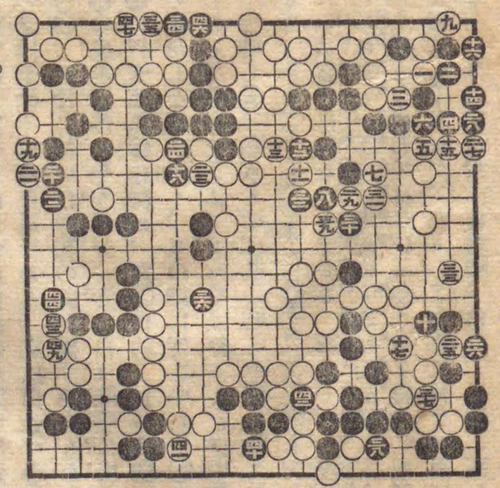


第三圖 非凡の手腕

「四の劫」此劫には黒が勝つたけれども此の變りは殆ど損益がないと云つて宜い。ドチラにしても白の負けたることは明白である。㊂の損失をしたに拘はらず勝を全うした手腕は非凡と謂はねばならぬ。

第三圖

五十手
此



白㊃に截る能はずして※印に粘がねばならぬ。即ち黒ほに尖みを利かせる丈け大分得になる譯である。

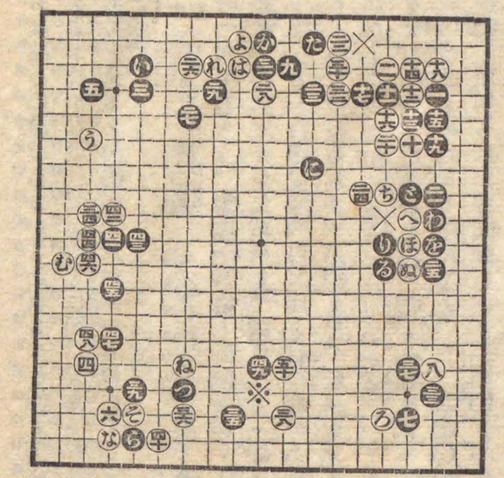
碁聖秀策百番碁（十六）

六段 井上秀徹

先々先 碁聖秀策（十一目勝）
先番

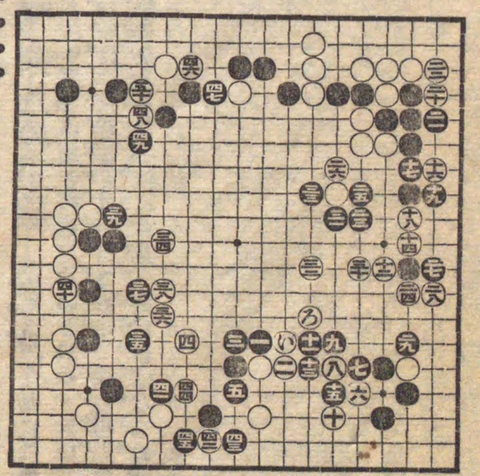
（弘化三年丙午十月十七日）

第一圖



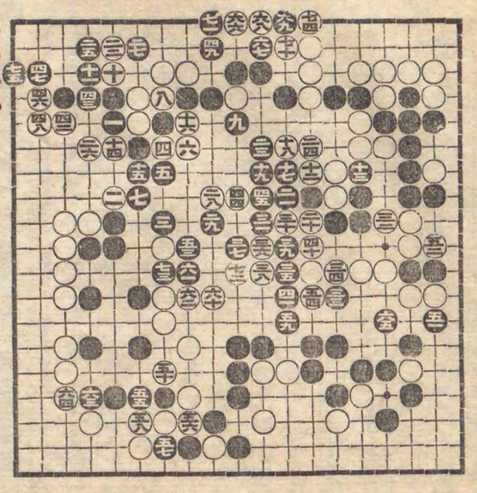
▲第一圖 元、俗にして面白し 「三ノ變化」圖の如く打つも亦た一策であるが併し普通ハ印に打つのが一番釣合の好い布石である「六ハ趣向」でもあらうが、斯くては紛れなく黒に先着の利益を留保されるから碁を廣くする意味に於てろに據るか、左もなくばはに拆くのが普通である「三ノ變化」圖の如く飛ぶのも普通であるが、此の場合ほへ飛ぶ手段もある。其の時白若しほに打たんか黒×印の挾間を衝くべく、白へならば黒とに截つて戰ふべきである。竿頭一歩を進めて云へば其の時白ちに截らば黒り、白ぬ、黒るとに赴すべきである。ドウ變化しても黒の不利に歸する筈はない。

第二圖



「三ハ如何」モと冠せられた爲めに白甚だ窮屈な姿である。單に六の急處を衝くのが普通である。或は白先づほに打ち、黒を、白と、黒わに粘いだ時六の處を衝く趣向もある「手の手段」元の尖みは俗のやうだが、實は白は應手に困つた、手の手で三に押せば黒ゐに綽ね、白よに約えた時黒たに掛粘いで×印の頂越しを狙ふべく、又白三に押さずしてれに押せば黒は三に押して截つて了ふ。ソコで止むことを得ず手と並んだので、黒若し三に粘ぎもせば其の時こそ三に約え付けやうと云ふ手段である。黒も其の手には乗らない。三と押して二目を棄てたのは當さに然るべきである。斯くて黒に三と尖み頂けられたのは嚴しい手で、本局の大勢は此時既に定まる所ありと云ふも決して過言ではない「竿止ムヲ得ズ」如何にも姑息な手で好ましくないが、左りとて白そに押せば黒につへ頂けられるし、又白ねに飛べば黒そ、白な、黒らと斷ち截られて了ふから止むことを得ず、竿と尖んだであらう。

第三圖 七十五手止



「ハ如何」此の場合※印に尖む手段もある。其の時黒ヰに約えたらば白うへ二間に拆いて居る方が面白くはないか。然るに策竝に出でずして ヰと煽られるに至つては大勢愈〻確定の姿である。

▲第二圖 黒、平穩に勝つ 「四ハ如何」斯くて五と行びられては窮屈になるからいに曲るが本手であらう「八モ如何」勝敗は兎も角も輕くろに斜走する方が捌き宜い。四の手で三に約すれば黒は唯七に下つて居るから迚も右邊の黒を取る抔いふ譯には行かぬ。「三ハ如何」單に七に打つて白を薄くして置く方が味がありはせぬか。要するに本局は白の趣向奇拔ならずして尋常に黒の勝ちに歸した碁である。

碁聖秀策百番碁（十七）

六段　井上秀徹

先　碁聖秀策

（弘化三年丙午十月二十九日）

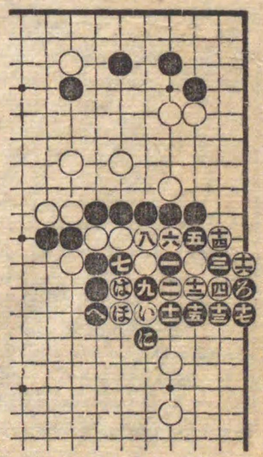
▲龍攘虎搏の大激戰

▲第一圖×印の强硬手段　「九ノ變化」圖の如く九と掛かるも一策であるが、併し此の手で七と挾んだ意匠を繼續して直ちに十一に尖みつけて白十二へ行びた時い印に煽るは常用の趣向である「五ノ手段」是れは言ふまでもなく十と十四の間は二間開きの挾い處で殆ど打込む餘地のない處だから如何に堅くなつても差支ないと云ふ見地から五、七の趣向に

第一圖

甲圖

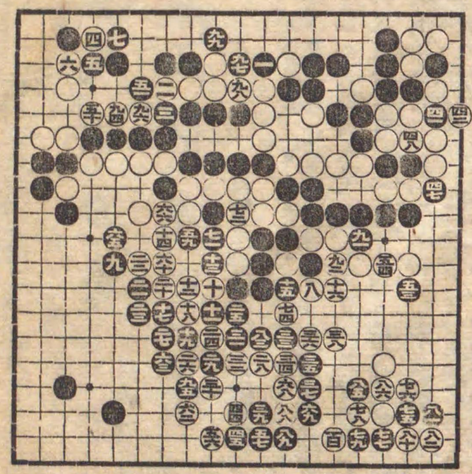
十つぐ

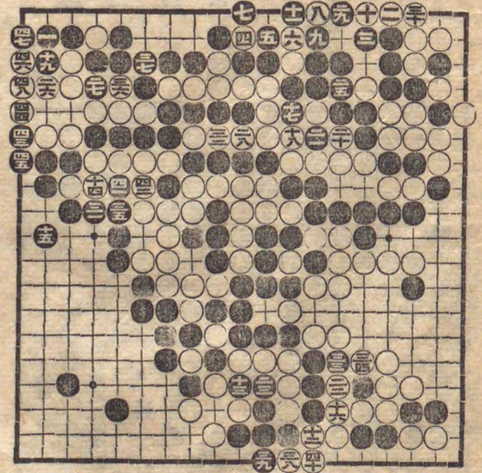


出られたのであらう。是れ又一策たるを失はぬけれども此の場合六へ、二間挾みするも亦た常用手段である。其の結果白ろ、黑はと有りふれた形になるが、夫れでも打てぬ事はない「五ノ變化」此の手で×印へ行びる手段もある。其の時白三に截らんか、黑元に行ぶべく、ソコで白若し四に沿うて五の跳ね込みを防ぐとすれば黑に印へ跳ね込むが宜い、白はほに約ふる外なかるべく、黑への頂けとなつて樂々と活きて了ふ。然るに白に於て萬一こ印抔に約えやうものならば夫れこそ黑に甲圖の如く全部生擒（いけど）られて了ふ。右の手順中白十四の手でいに截るとせば黑ろ、白は、黑五、白九、黑に、白ほ、黑へと「してう」で取られて了ふ。夫故に黑から三と狹まれたからは四と約へる手段はないのである。本譜に戻り黑五に行びた時白に於て甲圖の如く一、三と狹まれるのを嫌つてちに用心すれば五に跳ね込み白四、黑五に粘ぐべく、寧ろ白の方が截れ〳〵の姿になつて了ふ。玆で初心者の爲めに聊か注意して置きたいのは五の手にては圖の如く打つか又は前述の如く×印に行びるか、其他にも妙手段があるかは知らぬが、四に掛粘いだり、元へ行びたりするのは俗筋であると了解すべきである「三ハ面白キ手筋ナリ」黑苦しいに粘ぎもせんには白り、黑ぬ、白る、黑四、白をと引いて戰はん手段で、さう遣られては險呑（けんのん）であるから黑は七と突張つて出截りを防いだであらう。

「四ハ如何」三までの結果は黑の方が損をした譯である。此手で四へ頂ける筋もある。蓋し白はわ印へ突張るであらう。黑四、白五、黑六と引くのが面白い手筋である。左すれば白はかに斷ち截る外なかるべく、ソコで黑三へ跳ね込まば如何。優に凌ぐ路があるではないか。夫れから又右の手順中白五に截つた時黑六へ引かずして三へ跳ね込む筋もある「六ハ止ムヲ得ズ」此の手で萬一※印を截りもせば白は九に行ぶべく、左すれば黑は七元の捕獲を免かるべく、六に行びねばならぬ。其の結果白六、黑よ、白いの約えとなつて三の四子に聯絡されて却て七以下の一隊が包圍裡に陷つて了ふから六の行びは止むを得ない、「九ノ截リ」圖の如く白から九と截られては最早や十四以下の三子を取ることは出來ない。勿論六の手で九に約へて居れば下の四目は取れるけれども夫れでは碁が足らぬと見たから六と截つて飽くまで戰ふ手段を取られたであらう。けれども百までの結果大勢既に定まれりと云つて宜い。以下

第二圖





第三圖

黑白の敵戰は花火を散らすの勢で、寸毫の隙もなく目覺ましい大激戰であつた。

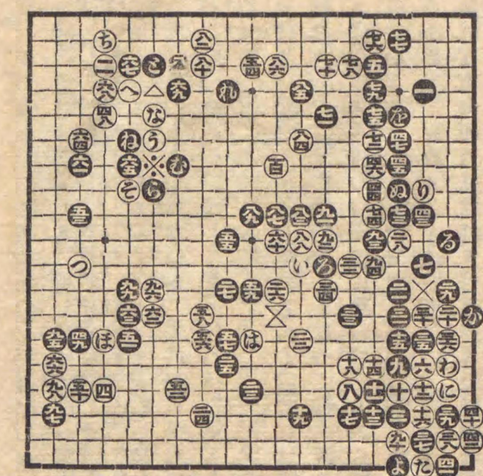
碁聖秀策百番碁（十八）

六段　井上秀徹
先番　碁聖秀策（十目勝）

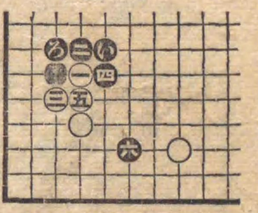
（弘化三年十二月晦日）

▲第一圖　黒㊀の隱謀　「白㊃普通ニ非ズ」㊃の手で㊄に掛るか、㊅に掛るのが普通である。圖の如く黒に㊄と締られ斯くて白㊅と掛つた時恰も好し黒に㊆と挾まれて好姿勢を得られたのは白の不利である。「㊄㊅ハ形ニ非ズ」蓋し趣向であらうが何だか變な形で、此の場合㋑印に飛ぶのが本形である。「黒㊆ノ着點」㊆の手で自分は×印に頂ける味を含んで㋐印に打ちたい。㊂に打つのが形のやうにも見えるが、左すれば白にはに備えられて形を整えられるから面白くない。「㊂ハ如何」評者は單に㊃に飛んで居る方が宜いと信ずる。ナゼかと云ふに中の方は機を見て㊇に打つて白を威嚇する筋がある。然るに内側から㊂と打ち㊂と交換して味を消して了つたのは惜い。換言すれば白は同じく㊂に應ずるものとすれば㊂に在ると㊇に在ると孰れが働きあるかは一見明白である。「㊃㊃已ムヲ得ズ」此手で㋑に約えると黒㊃、白㊃、黒㊃と劫に打たれるから圖の如く打つ外はない「參㊄ノ變化」白㊄の手でほに頂けて甲黒圖の如く打つ手段もないではないか、併し場合が場合だからいにも粘かずろにも粘かずして㊅と打込まれる手抔もあるか

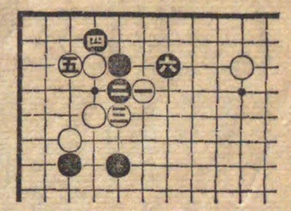
第一圖



甲圖

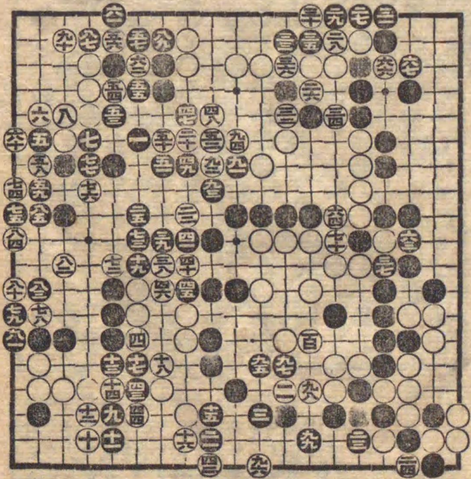


乙圖

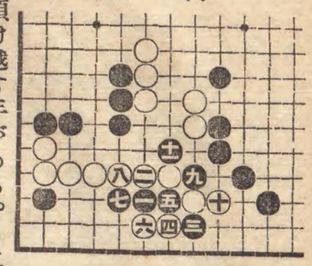


第二圖

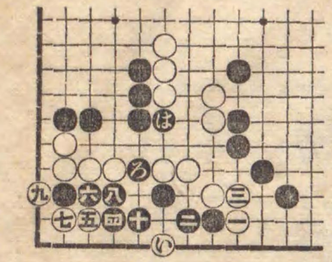
㊄十五の三劫提
㊅同
㊅四の十粘
㊆十五の三劫提
㊅同
㊇二目粘



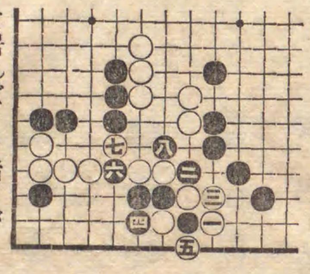
丙圖



戊圖



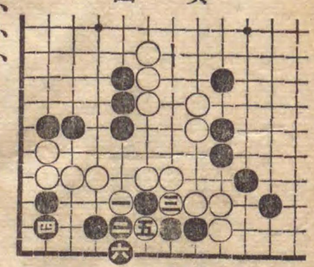
丁圖



ら白は圖の如く打たれたであらう「參㊅ノ變化」㊅の手で普通の如く㋑に約えると黒㋑、白㋒、黒㋓となるべく、又白㋑に約えずして△に掛ける手もあるが、左すれば乙圖の如く㊅と飛んで下で活きられて了ふ。故に白は單に㊅と粘いだであらう「參㊆ハ如何」此の手でりに頂け越す手があるやうに見えるが、左すれば黒㋔、白㊂の時黒にるに掛粘がれる。ソコで白㊆に一本押しを利かせて黒をして㊂に行びることを餘儀なくさせる處は旨いけれども、其の代り㊅以下の白が劫になつて了ふ。即ち黒㋑、白わ、黒かに綽ねた時白㊅に切り黒よ、白たと此處に劫爭ひが起る。此處は何時の場合でも×印に突込んで㊄の一子を取る睨みが利いて居ればこそ活きがあるので、前述の如くるに掛粘がれて×印の突込みが利かなくなつては一大事だ。併し圖のやうに㊆と押して此處の味を消したのは遺憾である。此の手で※印に頂けて見たい。其の時黒若しれに飛べば白そに綽ねてつの打込みを狙ふべく又ねに行びれば白なに打つべく、或は黒ねに行びずしてらに綽ねれば白ね、黒むの時白うに粘いで差支へない。「㊀ノ狙ヒ」是れは㊁に尖んで㊀の截りを狙ひ、因つて以て㊅以下隅の白を劫にしやうと云ふ隱謀を含んで居る手だから油斷はならぬ。

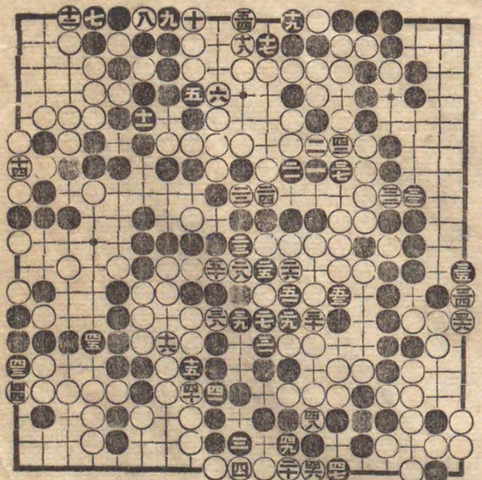
▲第二圖　白㊃の遠慮　「白㊃ノ遠慮」㊃の手で㊄に行びたいやうであるが、さうすると黒から㊂に打込まれる。其の結果は白の打ち方に依つて甲乙二圖の如く上下を切り離す手段もあり、又丙圖の如く十と打ち白いの時るに眺ね込んで劫にする手もあり、又黒十の手でほに曲る手もある。或は丁圖の如く隅で活きて了ふ手抔、種々手段の存する所だから白㊃と隱忍したであらう。「白㊂以下㊅見損ジカ」是れは全く持込みだ。㊂の手で單に劫を取つて居たならば四目位の負けで濟んだであらう。

癸圖



第三圖

㊆三目粘
㊂九の十一粘



精華堂法帖店
東京神田

大正六年三月五日印刷
大正六年三月十日發行

著作權所有

講評兼編輯者　本因坊秀哉

發行者　濱井松之助
東京市日本橋區北鞘町十番地

發行者　武居勝治
東京府荏原郡入新井村新井宿千三百七十九番地

印刷者　高橋赤次郎
東京市京橋區新榮町四丁目三番地

發行所　大阪屋號
東京市日本橋區北鞘町十番地
振替東京一三七五番

同　發行所　斯文館
東京市神田區南神保町九番地
振替東京二七七二三番
模範棋書發行所

御秘藏碁戰
【改正定價金壹圓】

舊幕府 御秘藏碁戰

795
H633k2
(s)
00617855

795
H633k2
(1)